文学部

科目履修の手引き

令和3年度

[2021年度]

大阪市立大学
文学部
www.lit.osaka-cu.ac.jp

この『科目履修の手引き』は、2021年度入学者を対象とする。

2021年度入学者は、この『科目履修の手引き』を卒業まで大切に保管すること。

※在学中に変更することもあります。変更点は、毎年度配付する時間割冊子の冒頭に記載するので確認すること。また、年度途中に変更がある場合は、学内サイトＯＣＵ ＵＮＩＰＡ（下記●参照）にて掲示するので常に確認すること。

（●参照）ＯＣＵ ＵＮＩＰＡ（オーシーユー ユニパ）について

学内利用者向けのシステムです。ログイン方法や利用については、別途配布しているマニュアルをご参照下さい。

ログインＵＲＬ：ocu.jp/unipa

目　　　次

履修にかかわる原則と変更にともなう措置について …………………… 03
大阪市立大学文学研究科・文学部　学術憲章 …………………… 04
学科・コース案内 …………………… 10
大学院案内 …………………… 42

科目履修の手引き

Ⅰ　文学部で学ぶみなさんへ
１．大学の授業と単位 ……… 45
２．文学部の学科・コース ……… 47
３．卒業までのステップ ……… 48
４．保険加入について ……… 49
５．履修例 ……… 49

Ⅱ　全学共通科目の履修
１．科目の区分と卒業要件 ……… 55
２．総合教育科目 ……… 55
３．外国語科目 ……… 56
４．健康・スポーツ科学科目 ……… 58
５．地域志向系科目・副専攻科目 ……… 58
６．単位互換制度にもとづく履修など ……… 58

Ⅲ　専門教育科目の履修
１．科目の区分と卒業要件 ……… 59
２．必修科目 ……… 59
３．選択必修科目 ……… 60
４．自由選択科目 ……… 60
５．文学部共通専門教育科目 ……… 60
６．その他 ……… 61

Ⅳ　卒業論文と学位
１．卒業論文を通じた論文作成 ……… 62
２．卒業論文・卒業論文演習の履修登録 ‥ 62
３．提出期日および締切時間 ……… 62
４．成績評価 ……… 62
５．卒業論文の仮認定と９月卒業 ……… 63
６．学位 ……… 63

Ⅴ　単位認定
１．外部試験等による外国語の単位認定 ‥ 64
２．海外の教育機関で修得した単位の認定 65
３．既修得単位の認定 ……… 65

Ⅵ　科目履修の手続きと成績評価
１．履修登録について ……… 67
２．試験と成績評価 ……… 68
３．成績確認 ……… 68
４．成績異議申立制度について ……… 69
５．文学部グレード・ポイント・アベレージ（GPA）制度について ……… 70
６．その他 ……… 71

Ⅶ　諸手続並びに注意事項
１．修業年限と在学年限 ……… 72
２．転学部 ……… 72

３．休学・復学、退学、除籍、再入学････ 72
４．大学における経済支援制度･････････ 73
５．就職活動････････････････････････ 74
６．各種変更届について･･･････････････ 74
７．学生証、通学証明書について･･･････ 75
８．各種証明書の発行について･････････ 75
９．学校で予防すべき感染症における出席停止と手続きについて ･････････････ 76
10．卒業後の各種証明書の発行について･･･ 76

Ⅷ 文学部専門科目表 ･･･ 77

Ⅸ 教職課程の履修方法
１．取得することのできる教育職員免許状 ･･ 94
２．教職課程科目の履修 ････････････････ 94

Ⅹ 博物館学芸員課程の履修方法
１．博物館学芸員をめざすために･･･････ 95
博物館に関する科目表 ････････････････ 98

Ⅺ 公認心理師になるために必要な科目の履修方法 ･･････････････････････････････ 99

Appendix
大阪市立大学文学部履修規程･･････････ 105

履修にかかわる原則と変更にともなう措置について

１．「大阪市立大学文学部履修規程」（以下、「履修規程」とする）は、文学部学生が履修すべき授業科目や修得すべき単位について定めたものである。その内容は、同規程第３条に述べる授業科目のうち、専門教育科目、教職課程科目、博物館に関する科目の履修や、第４条に述べる、卒業に必要な修得しなければならない単位数に関するものである。

２．この『文学部科目履修の手引き』（以下、『手引き』とする）は、文学部学生の卒業までの科目履修と単位修得、その他について解説するものであり、文学部学生が全学共通科目を履修する際の履修条件や専門教育科目の履修条件など、「履修規程」に準じて、その細則を示すものでもある。

３．文学部に入学した学生が卒業要件を満たしているかどうかは、入学年度の「履修規程」および『手引き』に定めた条件に照らして判断する。

４．「履修規程」および『手引き』は必要に応じて改訂される。その場合、新たな規定は、原則として改訂後に入学した学生に適用される。

５．「履修規程」および『手引き』に定めた履修の原則に抵触しない範囲で、全学または文学部が新たな制度を設けた場合は（例えば外国語の新たな単位認定制度、単位互換制度の導入など）、改訂年度以降の入学者に適用を限ることなく、すべての在学生に適用するものとする。

６．履修できるのは入学年度『手引き』の「文学部専門科目表」等で指定された科目であるため、在学中に科目の新設や名称変更があった場合、原則として新しい科目を履修することはできない。

　なお、入学年度の「文学部専門科目表」等で指定された科目が提供されなくなった場合は、必要に応じて、新科目との読み替え措置をとることがある。

７．上記５・６により、在学生に新たに適用される事項については、毎年配布される『文学部時間割』の冒頭に明記する。

大阪市立大学文学研究科・文学部 学術憲章

制　　定　2008年3月20日
最近改正　2020年1月24日

１．前文

かつて本邦の大学は、高邁深淵なる真理の探究と知的エリートの育成を大学の社会的使命として誇らしげに掲げてきた。だが本学の前身大阪商科大学の創設（1928年3月16日）に際し、当時の大阪市長であった関一は「今や大阪市が市立商科大学を新に開校せんとするに当って、よく考えねばならぬ事は、単に専門学校の延長を以て甘んじてはならぬ事勿論であるが、又国立大学の「コッピー」であってもならぬ。」と述べた上で、「其設立都市の有機組織と其都市の市民生活の内に市立大学が織込まれなければならない。」（「市立商科大学の前途に望む」）との卓見を披瀝している。大阪商科大学とその後身たる大阪市立大学がたどった歩みはまさに関一市長が示した市民に開かれた大学の理想を追求するものであった。この経緯に鑑みるとき、大阪市立大学に奉職しここに修学するわれわれは、学問的真理の探究と有為なる人材の育成に励むとともに、社会に開かれた大学の実現を真摯に追求することを以て建学以来の使命を果たしていきたいと考える。

わが文学研究科・文学部は人文科学および行動科学の分野においてこれまで学界をリードする研究を遂行し文化の進展に寄与するとともに、多くの優れた人材を世に送り出すことによって学界ならびに社会に大きな貢献を果たしてきたと自負するものである。しかしこの現状に安住することなく、さらに厳しく自己評価につとめると同時に、外部評価等の意見や要請を虚心に受け止め、たゆまぬ自己研鑽に資して行きたいと考える。学問的真理の探究、優れた人材の育成、そして社会に開かれた大学、これら崇高なる理想の実現をみずからに課した証として、ここに「大阪市立大学文学研究科・文学部学術憲章」を定める。

２．文学研究科・文学部の理念

- 人文科学・行動科学の方法や考え方を通して人間、社会、文化、言語の諸事象とそこに内在する普遍性を探究する。
- 人間、社会、都市、文化をとりまく今日的課題の解決に貢献し得る人文科学・行動科学の構築をめざす。
- 先端的研究成果をグローバルな視野から情報発信できる国際的競争力を備えた最高水準の教育・研究をめざす。

３．人材育成の目標

【学士課程】

- 人文科学・行動科学の方法や考え方を通して人間、社会、文化、言語の諸事象について深く考えることのできる人材を育成する。
- コミュニケーション能力を身につけ、国際的、歴史的視野から問題解決をはかる能力を備えた人材を育成する。
- 教育機関、文化行政、出版・ジャーナリズム、国際交流、情報サービス産業などの第一線で活躍できる専門性を身につけた人材を育成する。

［各学科］

（哲学歴史学科）

人間の歩みと思索の過程を考究し、人間にたいする洞察力と歴史への理解を基に、未来を展望することのできる力をもった人材を育成する。

（人間行動学科）

人間や社会を理解するための科学的方法を身につけ、人間行動や人間を取りまく事象を様々な視点から考えることのできる人材を育成する。

（言語文化学科）

人間が創り上げてきた言語・文学・文化を深く理解し、自文化、異文化の双方を見通しながら、新たな文化の創造に寄与することのできる人材を育成する。

（文化構想学科）

文化にたいする深い理解をもとに、新たな文化表現の創出や多文化共生的価値の構築を希求しながら、文化を社会的実践活動へと結びつけることができる人材を育成する。

【大学院前期博士課程】

- 人文科学や行動科学の分野において、先端的知識と方法を身につけ独創的研究をみずから行いうる人材を育成する。
- 地域の教育に貢献し、都市が抱えるさまざまな問題の解決に応えうる高度専門職業人を育成する。
- 生涯学習への意欲をもち、人間、社会、文化、言語に対する深い理解を通して、国際社会・地域社会においてさまざまな文化的活動を担うことのできる高度教養人を育成する。

【大学院後期博士課程】

- 人文科学・行動科学の最先端の研究課題を創造的に探究する高度な研究能力を備えた研究者を育成する。
- 国内外の教育研究組織や機関と連携し、人文科学・行動科学の国際的、学際的な研究を主導的に推進する研究者を育成する。

［各専攻］

（哲学歴史学専攻）

人間の社会と文化の構造・発展を明らかにし、人間のあり方を歴史と文化のなかに追求することを目的とする。人間文化の基礎を研究する哲学と歴史学を統合した教育研究体制を備えることで、人間の社会とその文化の本質と普遍的価値、さらにその変容を明らかにすることを目指す。専門分野への深い知識に加えて、関連分野にも視野を広げられる研究者、広い知識と教養をもった専門職業人を養成する。

（人間行動学専攻）

人間行動の特性や人間と社会および文化の関係を、とくに社会問題、教育問題や文化摩擦など現代社会が抱える諸問題を視野に入れて、総合的、学際的に捉えることを目的とする。フィールドワークや実験という行動科学の方法論を基礎に、実証的なデータに基づく分析と理解や理論化を重視する。人間行動に関する実証的な研究方法を修得させることによって、現実の社会や人間を客観的に観察する能力を涵養し、研究職のみならず、高度な専門的知識と技術をもった人材を養成する。

（言語文化学専攻）

言語にかかわる文化現象の全領域、すなわち、言語、文学、文化およびその関連領域を、言語を通じて根源的に解明することを目的とする。日本語、中国語、英語、ドイツ語、フランス語を中心とした各言語圏における古今を通じた諸現象を解明するのみならず、言語の隣接分野への応用という観点からも探究を深め、情報技術やグローバリゼーションという21世紀にふさわしい教育研究を推進する。鋭い言語感覚と高度な言語運用能力を備えた研究者や専門職業人など、国際社会において活躍しうる人材を養成する。

（文化構想学専攻）

さまざまな文化や文化的事象を、社会的実践の場において積極的に活用することで文化のもつ力をさらに高めるとともに、現代社会が抱える諸課題の解決に資する文化を主導的に構想することを目的とする。新たな文化の創出、比較文化的・多文化共生的な認識、文化の応用的・実践的活用のそれぞれにたいする専門的知見を併せ持ちながら、文化や文化的事象をさまざまな課題解決に活用することができる能力を習得させる。研究者、専門職業人のいずれの進路においても、文化の活用を理論と実践の双方で牽引できる人材を養成する。

４．学術研究の目標

・ 人文科学･行動科学の諸分野において最先端の研究を、公正を旨として推進し、新たなる知の創造をめざす。
・ 人文科学・行動科学の知はたえず社会と関わり、社会からの具体的要請に真摯に向き合うことにより進展していくものであるとの認識に立ち、社会に開かれた人文科学・行動科学の確立をめざす。
・ 人文科学・行動科学の諸領域において確乎とした学問的基礎の上に立脚すると同時に、新たに出現する知の状況変化にも柔軟に即応し得る学際的研究をめざす。

５．地域・社会貢献

・ 大学における高度な教育や研究それ自体は長期的観点からみると社会貢献の機能を果たしているが、同時にその成果を直接的に地域・社会に還元する必要性がある旨、学校教育法で謳われている。文学研究科・文学部では、地域・社会貢献を大学の果たすべき第三の使命と位置づけ、推進する。
・ 文学研究科・文学部の教員による地域・社会貢献活動の実績を、教育・研究活動、国際交流活動の実績と並べて教員評価の指標とし、教員の積極的な活動を奨励する。

６．アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

文学研究科・文学部は、人間、社会、文化、言語に関心を持つ人間性豊かな人材を育成することを目標としている。それに対応して、以下のような人材を求める。

【学士課程】

・ 人間の思考と社会・文化の生成発展について考えてみたい人
・ 人間行動の原理と社会のしくみについて考えてみたい人
・ さまざまな言語や文学・芸術について考えてみたい人
・ さまざまな文化的営みを社会のなかで活かす方法を考えてみたい人
・ 論理的思考を鍛え新しいものの見方を求めようとする人

＊ 入学者選抜の基本方針は、一般入試、編入学・学士入学、国際バカロレア入試、帰国生徒入試、私費外国人入試の各々において定める。

【大学院前期博士課程】
・ 人文科学・行動科学の専門領域に関する明確な問題意識と専門的知識を有する人
・ 社会的経験をふまえて人文科学・行動科学の専門領域の研究を志す人
＊ 入学者選抜の基本方針は、一般選抜、外国人留学生特別選抜、社会人特別選抜の各々において定める。
【大学院後期博士課程】
・ 人文科学・行動科学の専門領域に関する高度な知識と独創的研究テーマを有する人
・ 研究成果を国内外に発信できる情報発信能力を備えた人
＊ 入学者選抜の基本方針は、一般選抜、外国人留学生特別選抜、社会人特別選抜の各々において定める。

７．カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）
【学士課程】
・ 人間の思考と社会・文化を根本的、原理的に問う哲学的観点と、それらの本質を時間軸における変化のなかに見出す歴史的観点とを補完的に培う。
・ 人間の行動の諸側面を対象とし、それらを観察・調査・実験・フィールドワークなどの科学的手法に基づき解明する能力を培う。
・ さまざまな言語・文学・芸術を対象とし、それらを実証的、学際的に考察し、社会・文化事象に対する深い理解力、優れた言語運用能力や豊かな国際性を培う。
・ 新たな文化表現の創出、共生的文化の構築、文化資源の活用など、人間の文化的営みを社会のなかで実践的に活用できるような能力を培う。
・ 人文科学・行動科学の基礎となる原典、史料、文献などを調査・読解する能力を鍛え、批判的、創造的に問題に取り組む能力を培う。
・ 以上の目標を達成するため、文学部では次の６点を重視する。
① 人文学の基礎から応用まで段階を踏んで学んでいく体系的な講義科目を編成する。
② 初年次から最終年次までのすべての年次において、少人数による演習科目を配置する。
③ 基本的な教養と学際的な視点を身につけるために、全学共通科目を４年間にわたって履修できること。
④ 国際的な視野を獲得し、活躍する人材を養成するため、英語・新修外国語の修得を重視する。
⑤ 専門分野の知識をさらに広く活用する能力を養うため「副専攻」制度を認める。
⑥ 卒業論文は獲得した学修成果を最大限に生かしながら取り組むことができるように指導する。
【大学院前期博士課程】
・ 人文科学・行動科学の専門領域に関する高度な専門的知識を培う。
・ 人文科学・行動科学の専門領域において明確な問題意識をもって研究を行える能力を培う。
・ 以上の目標を達成するため、文学研究科では次の４点を重視する。
① 高度な知識と総合的な問題解決能力を身につけることを目標に、学生が所属する「研究分野」を考慮に入れた諸科目をバランスよく履修できるように、「専攻共通科目」と「分野専門科目」を配置する。

② 修士の学位論文の作成のため、指導教員等による「研究指導」を履修し、教員による助言を２年間にわたって受けるようにする。

③ 若手研究者として国際的に活躍できる能力を養うため「インターナショナルスクール授業科目」を用意する。

④ 全学に共通する大学院科目を修得単位として認定する。

【大学院後期博士課程】

・ 人文科学・行動科学の専門領域において深い学識にもとづき独創的な研究を行える能力を培う。
・ 研究成果を国内外に発信できる情報発信能力を培う。
・ 若手研究者として国際的に活躍できる能力を養うための「インターナショナルスクール授業科目」について積極的な履修を勧め、全学に共通する大学院科目は修得単位として認定する。
・ 博士の学位論文の作成のため、指導教員等による「論文指導」を３年間にわたって履修し、教員による助言を継続的に受けるよう指導する。
・ 「論文指導」４単位修得後（通常２年次）の前期セメスター開始時「博士論文作成計画書」を指導教授に提出することを義務づける。
・ 博士の学位論文については、３名の教員からなる審査委員会による審査を実施する。

８．ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

【学士課程】

・ 上記の人材育成の目標を達成するために設置された教育課程において、所定の単位を修得したうえで卒業論文を提出し、厳正なる審査に合格した者に、学位が授与される。

【大学院前期博士課程】

・ 上記の人材育成の目標を達成するために設置された教育課程において、所定の単位を修得したうえで修士論文を提出し、厳正なる審査に合格した者に、学位が授与される。

【大学院後期博士課程】

・ 上記の人材育成の目標を達成するために設置された教育課程において、所定の単位を修得したうえで博士論文を提出し、厳正なる審査に合格した者に、学位が授与される。

９．倫理綱領

（１）学問の自由

・ 学問の自由の下に、自らの専門的な判断と倫理観を持って真理を探究し、社会への責任を自覚したうえで、その行動基準を自律的に判断する。

（２）職務の公正・誠実な執行

・ すべての人間の基本的人権と尊厳を認めてこれを侵さず、自然環境、資源の保護にも配慮する。
・ 教育・研究・社会貢献及び大学運営に関する責務を公正かつ誠実に遂行し、誇りを持って社会的責任を果たす。
・ 適正な手続きの下で責務を遂行し、不正のない大学の実現のために行動する。

（３）教育責任

・ 十分な準備と熱意を持って教育に臨み、学生の学習意欲を高めるとともに、学生の人格を尊重し、教育に関わる説明責任を果たす。

・ 教育能力の向上を目指して常に自己研鑽に努める。

（４）研究活動の真摯な遂行

・ 学問の客観性を確保し、真摯に研究活動を行う。

・ 他の研究者の学問的成果を尊重する。

・ 研究に際して、研究対象者の人権、生命の尊厳、実験動物の福祉、自然環境を重んじる。

・ 研究費の獲得・執行を適正に行う。

（５）地域・社会貢献

・ 社会との相互交流を図り積極的に協力を行うなかで、公正性を踏まえて、研究業績・教育経験を社会に還元する。

（６）情報の適正な発信及び管理

・ 情報の適正な管理・保管・開示に努める。

・ 個人情報の保護に努める。

・ インターネットの使用に際して、不正利用や情報流出の防止に努める。

（７）環境整備

・ 大学を人間形成の場と位置づけ、自ら関わる事項の説明責任を果たす。

・ 互いに人格を尊重し合い連携するなかで、あらゆる差別、セクシュアル・ハラスメント、アカデミックハラスメント等のない、学習・教育・研究・労働のための安全で健康な環境を整備する。

学科・コース案内

大阪市立大学文学部には、哲学歴史学科、人間行動学科、言語文化学科、文化構想学科の４つの学科があり、14の履修コースを設けている。文学部学生は、２年次からこのいずれかのコースに所属して、学修を進めていくことになる。

志望届を出す12月までに、大阪市立大学文学部で何を学ぶか、この手引きのコース案内をよく読んで、慎重にコースを選択すること。１年次生が、学科・コースの内容をよく理解し、志望コースを決めていくために、文学部では下記のような日程で、ガイダンスを行い、情報を提供している。

この手引きのほか、「文学部ホームページ」（https://www.lit.osaka-cu.ac.jp）も参考にすること。また、文学部・大学院（文学研究科）の全体、各教員が行っている研究内容などについては、『大阪市立大学―データで見る教育・研究―』と『大阪市立大学研究者要覧』に詳しく記されている。

コース選択のために知りたいことがあれば、ガイダンスの時以外でも、各コースのガイダンス担当教員あるいは１回生担任の教員に遠慮なく相談すること。

特定の学科・コースに第１志望が集中した場合、やむをえない措置として、第１年次前期の成績にもとづき選抜を行う。

４月初め　**新入生ガイダンス**
　学科・コース希望アンケート予備調査

６月上旬　**第１回学科・コース決定ガイダンス**
　第１回学科・コース希望アンケート調査
　（出席：教務委員、ガイダンス担当委員）
　アンケート集計結果の掲示

９月下旬　**第２回学科・コース決定ガイダンス**
　第２回学科・コース希望アンケート調査
　（出席：教務委員、ガイダンス担当委員）
　アンケート集計結果の掲示

10月中旬　**コース別相談**（指定の日時・場所）
　（担当：各コースのガイダンス担当委員）

12月１日～12月10日（曜日の関係で変更することがある）
　「学科・コース志望届」提出
　注：第１志望が各学科・コースの受入れ限度数より多い場合は選抜

12月下旬または１月下旬
　学科・コースの決定通知（掲示）

※別途、文学部・文学研究科教育促進支援機構主催の「学生によるコースガイダンス」がある。

哲学歴史学科

われわれは何者なのか？　どこから来て、どこへ向かって進んでいくのか？　従来の文化的・社会的伝統の克服がときにさけばれることもあります。しかし、わたくしたち人間が歩んできた道のりがどのようなものであったのか、人間とは何者であるのか、を理解することなしには、わたくしたち自身の未来の明確なイメージを描くことは、決してできないでしょう。哲学歴史学科は、このような、いわば人間のアイデンティティーにかかわる根本的な問題について、ともに考えてゆくことをめざしています。

哲学コース ／ 日本史コース ／ 世界史コース

人間行動学科

情報化や国際化の波を受けて大きく変化していく今日、心の世界、人と人とのつながり、人と自然との共生といったことへの関心が高まっています。このような時代にあって、人間行動学科では、観察・調査・実験・フィールドワークといった科学的方法に基づいて、人間の行動、われわれをとりまく社会・環境、そして両者のかかわりについて、さまざまな角度から明らかにしています。人間行動学科では、各コースそれぞれの学問分野を中核としながらも、それらを有機的に結びつけた独自のカリキュラムを提供することによって、「人」とその「環境」の複雑さを、さまざまな視点から理解していくことのできる人材の育成をめざしています。

社会学コース ／ 心理学コース ／ 教育学コース ／ 地理学コース

言語文化学科

言語文化学科は、言語を通して人間にアプローチし、人間が作り上げた文化を探求します。日本、アジア地域、欧米諸地域等の文学や思想などの文献を読み、言語の姿や仕組みを考察します。また言語と関係する文化、たとえば演劇・音楽・映画などや、その背景にある社会・歴史も分析の対象とします。こうした作業を通じて、人々がこれまで何を考えてきたか、現在何を考えているのか、そして今後どのような新しい考えを打ち出すのかを探ります。

国語国文学コース ／ 中国語中国文学コース ／ 英米言語文化コース ／ ドイツ語フランス語圏言語文化コース

文化構想学科

文化構想学科は、文化を積極的に活用することで文化のもつ力をさらに高め、文化をもって21世紀型成熟社会における諸課題の解決をはかることができるような人材の育成を目指しています。本学科では、さまざまな場で活用される文化や文化的コンテンツに関する研究、日本を含めたアジア地域における文化活用の実際についての比較研究、実践的・課題解決的な文化活用の方策についての研究等の観点から、文化そのものから文化の地域的、社会的活用にいたるまでの一連の過程について学びます。

表現文化コース ／ アジア文化コース ／ 文化資源コース

哲学コース

１　本コースの研究内容、特色

遠く古代ギリシアに起源を有する哲学は、人間の英知の集約として、西欧文化の根底を培ってきました。哲学は広く世界と人間に関わる一切の問題について、自由な理性的探究を行う学問です。知識や存在についての根本的探究、倫理、宗教、芸術についての原理的考察などがその営みを構成します。このような西洋哲学の達成を広く深く学びつつ、同時に現在の状況が生みだしている重要な哲学的諸問題にどのように応答すべきかを考えていくことが哲学に課せられた使命です。

「哲学コース」では、古代ギリシアより現代に至る西洋哲学の歴史についての理解を基礎としつつ、まず哲学部門の基本的分野を学びます。それは、学問的な思考にとって不可欠な推論の原理について論じる論理学や、世界とそこで人間存在が占める位置について論じる存在論、さらには世界についてのわれわれの知識の成り立ちと根拠について論じる認識論などです。そのうえで、科学哲学・心の哲学・言語哲学など、哲学のなかの新しい分野についても学びます。

以上のような理論哲学的分野と並んで、「哲学コース」では、倫理学、宗教学、および美学という規範や価値に関わる実践哲学的分野についても学びます。倫理学は、正しい生き方とはどのようなものかという問題を中心に倫理（道徳）の本質や原理について考える理論的倫理学と、生命の技術的操作の是非など今日の具体的な倫理的問題について研究する応用倫理学から成ります。宗教学は、生と死の意味、神の存在といった宗教の根底を成すテーマについての哲学的研究とともに、世界の主要宗教の宗教思想などについても研究します。美学は、美的体験などの分析を通じて、芸術とは何か、美とは何かについて考える分野です。これら多様な分野の総合的学習を通して、今日の思想的状況に批判的に対応する基礎力が身につくことでしょう。

本コースは、西洋哲学の主要な領域をカバーできるスタッフがそろっています。西洋哲学の基本的なテーマについては、どの時代、どの地域であれ、指導を行うことができますので、詳細はスタッフに相談してください。その他、現有スタッフでカバーできない領域、テーマについては、毎年非常勤の先生を招いて補っています。

本コースでの履修方法ですが、まず「人間文化基礎論」で文献の読み方やレポートの書き方などの基本的なことを学び、「人間文化概論」で歴史を含む思想・文化について広く学びます。「哲学概論」や「哲学史通論」をできるだけ早く受講することも大切です。

「哲学概論」では、哲学の基本的な概念や基本的な問題について、知識、世界、心という三つの主題を通して学びます。「哲学史通論」では、西洋哲学思想の流れを概観します。

２回生では「哲学概論」、「哲学史通論」をはじめとして「倫理学概論」、「宗教学概論」などの概論的科目を中心に履修するのがよいでしょう。３回生ではさらに哲学の原典の読解能力を身につけることができるように、できるだけ複数の「演習・講読」科目を履修するのが望ましいことです。「演習・講読」では、哲学の基本的なテーマについて、比較的理解しやすいテキストを選び、哲学的な考え方やその筋道について学びます。用いられる言語は主として英語ですが、受講生の能力に応じて、ドイツ語、フランス語も用いられます。

こうして、４回生の初めまでには、自分自身の問題意識を身につけておくことが大切です。４回生では、自分の関心領域に近い「演習・講読」や「特講」などの自由選択科目を選び、「卒業論文演習」を受けながら、「卒業論文」の作成に集中できるようにしたいものです。

「卒業論文」は四年間の学習の総決算ですから、４回生の夏休みにはだいたいの構成ができあがっていなければなりません。夏休み明けにはそれぞれのテーマを専門とする教員の指導を受けて、細かな点を仕上げていくように心がけましょう。「卒業論文」のテーマとして標準的なものは、特定の哲学者について特定のテーマ（例えばカントの認識論やデカルトの心身問題など）を取り上げた研究です。

「哲学コース」では、学生相互や学生と教員との間の交流のための行事（学年はじめの新入生歓迎会や学年末の卒業生・修了生の予餞会など）を適宜行っています。また、大阪市立大学哲学研究会を組織し、例会を定期的に開催して、他大学とも研究交流を活発に行っています。

２　スタッフ

スタッフは以下の４名です。

（宗教学）

仲原（なかはら）　孝（たかし）　教　授

宗教と哲学との関係。カントやハイデガーを中心とする近現代ドイツの宗教哲学の研究。「宗教学概論」「宗教学演習・講読」などを担当。

（西洋哲学史・美学）

高梨（たかなし）　友宏（ともひろ）　教　授

ドイツ近現代美学、京都学派の芸術論。「哲学史通論」「美学概論」などを担当。

（倫理学）

土屋（つちや）　貴志（たかし）　准 教 授

倫理学、医療倫理学（現代医療に関する倫理的諸問題の研究）、人権問題研究、道徳教育論。「倫理学概論」「倫理学演習・講読」などを担当。

（哲学・論理学）

佐金（さこん）　武（たけし）　准 教 授

現代英米哲学、とくに時間の哲学、心の哲学を中心に研究している。「哲学概論」「哲学演習・購読」などを担当。

３　コース決定にあたっての心構え

他の学問でもそうでしょうが、哲学を学ぶに際しても重要なことは、まず、哲学とはどのような問題をどのような仕方で研究する学問であるのかをできるだけ早く知ることです。そうして初めて、自分自身の問題関心が自分の選んだ（選ぼうとしている）学問領域の中でどのような位置を占めるのかが分かり、その結果、問題に正しくアプローチし、さらに自分の将来の課題を見極めることも可能になってくるものです。したがって、「哲学コース」を選ぶかどうかをこれから決めようとしている場合にも、またコース決定した後も、できるだけ幅広く本コースの提供科目を受講し、自分の知識と思考の裾野を広げる努力をすることが肝要です。自発的な読書によって視野を広げることも重要です。

哲学の専門的研究のためには、先人の業績を原典で読むことが不可欠です。ですから、英・独・仏のうち２か国語を予め学習しておくことが望まれます。また、より深い研究のためにはギリシア語・ラテン語の学習が有益です。

４　大 学 院

哲学歴史学専攻に哲学専門分野（専修）として、前期博士課程、後期博士課程が置かれています。前期博士課程では二年間の間に多くの科目をとり、修士論文を書かねばならないので、たいへん忙しいのですが、明確な問題意識さえあれば、充実した研究生活を送ることができるでしょう。後期博士課程では、修士論文の成果をふまえながら、さらに研究を積み重ねたあとで博士論文を書くことが求められます。また、欧米の大学院に留学することも選択肢の一つです。

５　卒業後の進出分野

先輩の多くは、教員、公務員に進出していますが、一般企業へ就職する人も少なくありません。哲学を一生の仕事とすることは決して容易ではありませんが、本人の努力次第では大学院へと進学し、研究者として自立する道も開かれています。さまざまな大学で活躍している先輩もいます。

６　メッセージ

「なぜ」という疑問を持つことが学問の、とりわけ哲学の第一歩です。疑問を直接ぶつける積極的な姿勢で授業に臨んでほしいと思います。哲学は幅も広く奥も深い学問ですから、万巻の書を読み、千里の道を行く気概がなくてはなりません。読書が好きで、ものを考えるのが好きな人、世界と自分について多くの疑問を持っている人、こういう人々を「哲学コース」は歓迎します。

日本史コース

１　本コースの研究内容、特色

あるできごとが起きた年代を暗記するのが歴史学ではありません。事件や現象、政治・経済・社会・文化の仕組みは、前段階のどのような状況の中から生まれ、そのためにどのような本質をもち、次の段階にどのように影響するのか。歴史学はこれらを、史資料によって明らかにする学問です。人間の文化や社会の本質を、《時間》軸における変化のなかで把握する学問だと言い換えることができるでしょう。

「日本史コース」の教員は５人で、古代・中世・近世・近現代と考古学の分野をすべてカバーしています。したがって、学生諸君が日本の歴史のどの時代の何を学ぶにも対応できます。古代～近現代のスタッフは社会史を得意にしており、さらに政治史・都市史に関する教育実績をもつ特色あるコースとなっています。また、考古学の教員は古墳時代を専門としますが、幅広く日本考古学全般に対応できます。民衆の歴史や文化についても詳しく学ぶことができます。

つぎに「日本史コース」に進んだ場合の、専門の学習について説明しましょう。過去のことを史料（考古学の資料を含む）にもとづいて考えるには、史料の読み方・扱い方を身につけ、これまでの研究の蓄積をふまえる必要があります。そのため、卒業論文の作成にむけて、次第にレベルを高めながら学んでいけるよう、授業科目を用意しカリキュラムを組んでいます。

日本史コースを考えている諸君は、①１回生のうちに「人間文化概論」「人間文化基礎論」で広く人間や文化に関する捉え方を学んでおいてください。また１・２回生の間に「日本史基礎講読Ⅰ・Ⅱ」（１・２回生時）、「史学概論」（２回生時）で歴史学とは何かを考えてもらいます。②日本史コースへの分属が決まった２回生になると、「日本史通論Ⅰ・Ⅱ」「考古学通論」でやや高度な講義を聞き、「日本史講読Ⅰ～Ⅳ」「考古学実習」で史料の読み方・扱い方・調べ方を学びます。③３回生では、「日本史演習Ⅰ～Ⅳ」「考古学演習」でテーマの立て方、論文の読み方を身につけます。また、高度な研究内容にふれる「日本史特講Ⅰ～Ⅳ」を受講してください。④以上の学びの上にたって、４回生では、「卒業論文」の作成が中心となります。

「日本史コース」のカリキュラムについていくつか注意点を述べておきます。一つは、歴史学は総合的な学問ですから、歴史や人間・文化について幅広く学ぶとともに、自分で興味をもったテーマについて自ら積極的に学習を進めてほしいという点です。総合的な思索と個別の学びはどちらも大切であることを忘れないでください。

二つめは、科目選択の仕方です。「日本史コース」の学生は、選択必修科目である「日本史基礎講読Ⅰ・Ⅱ」「日本史通論Ⅰ・Ⅱ」「考古学通論」「日本史講読Ⅰ～Ⅳ」「日本史演習Ⅰ～Ⅳ」「考古学演習」は必ず履修してください。その上で、世界史コースの科目についても積極的に学んでください。また、「日本史特講Ⅰ～Ⅳ」についても、自由選択科目ですが、日本史コースの学生はすべて履修するようにしてください。

大学での学習は、授業の場だけで行うものではありません。「日本史コース」では様々な場を用意しています。毎年、夏休みに、「日本史コース」全体で特定地域の歴史的総合調査を２泊３日で行っています。現地で近世・近現代の古文書にふれ、その扱い方、整理法を身につけることができます。お年寄りから昔のことを聞き取り調査したり、フィールドワークによって集落の歴史を探ったりもします。また、「世界史コース」といっしょに、近畿地方の史跡見学会（日帰り）を春に開催し、秋には各地の遺跡・博物館を訪れ、歴史や文化財にふれ実習旅行を行っています。これらは授業に準ずるものですから、できるだけ参加するようにしてください。

また、「日本史コース」と不可分の学会として「大阪市立大学日本史学会」（1998 年設立）があります。本学会は、毎年５月に研究大会を開催し、学術雑誌『市大日本史』を刊行しています。日本史コースの学生は、全員、この学会の学生会員となります。このほか、教員・院生も加わる時代ごとの勉強会（読書会）や研究会、古文書を読む会などが数多く開催されています。これらに積極的に参加して自主的に学んでください。

２ スタッフ

仁木（にき）　宏（ひろし）　教　授

中世の近畿地方を中心として、都市や村落の歴史を研究している。全国の戦国大名や織田信長・豊臣秀吉らの権力論もあつかっている。

岸本（きしもと）　直文（なおふみ）　教　授

古墳や古墳群を通して古墳時代の政治・社会を研究している。発掘調査や測量調査を継続的に実施中で、学生も参加できる。

佐賀（さが）　朝（あした）　教　授

近現代大阪の都市社会史、また戦時下（「十五年戦争」期）の地域社会史を研究している。近年は、遊廓の社会史的研究も進めている。

磐下（いわした）　徹（とおる）　准 教 授

古代史の研究を行っている。主に郡司制度を通して、地方支配や地域社会の在り方を考えている。その他、古記録（日記）の註釈にも取り組んでいる。

齊藤（さいとう）　紘子（ひろこ）　准 教 授

近世（江戸時代）の大坂や和泉の地域社会について研究している。また、地域史の視点から畿内領主支配の特質を検討している。

３　コース決定にあたっての心構え

歴史学は総合的な学問です。そこで、日本史に限らない、いろいろな地域、さまざまな時代・分野の歴史や文化に興味と関心をもってほしいと思います。そのなかから徐々に自分のテーマを探っていきましょう。また、すでに興味をもつテーマがある人は、それに関係する図書などを積極的に読んでみましょう。

１回生のうちに履修しておいてほしい科目。共通教育科目では、「日本史の見方」「日本社会の歴史」「考古学入門」はもちろんですが、総合Ａの「歴史のなかの大阪」「都市の社会史」「戦争と人間」も履修することが望ましいでしょう。東洋史・西洋史などの歴史関係の科目も積極的に履修してください。

専門教育科目のうち、哲学歴史学科の必修科目は必ず１回生のうちに履修しておいてください。「日本史コース」の選択必修科目のうち、１回生が履修できる「日本史基礎講読Ⅰ」も履修してください。

４　大 学 院

日本史学専修の前期博士（修士）課程、後期博士課程があります。日本の考古・古代から近現代までの様々なテーマで、多くの院生が研究しています。近年、日本史学専修では課程博士の学位を取得するための指導を強めており、博士（文学）の学位を取得する人が増えてきました。また、日本学術振興会の特別研究員に採用される人もいます。

大学院で専門的な研究を重ねた諸先輩は、大学の教員、博物館・資料館の学芸員、あるいは自治体史の編纂担当者など、その能力を活かす様々な領域で活躍しています。最近の例を挙げると、大学では、神戸大学、岡山大学、関西学院大学、近畿大学、京都精華大学などに就職しています。博物館・資料館としては、国立歴史民俗博物館、大阪歴史博物館、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館、高槻市立しろあと歴史館、彦根城博物館などがあります。また大阪府や京都府、大阪市文化財協会などで発掘調査をする技師として働いている人もいます。専修免許を取得して教育現場で活躍している人も少なくありません。

５　卒業後の進出分野

大学で学んだ歴史学の知見を活かし、学校の先生になる人もいますが、近年は、一般企業、官公庁に就職する人が多くなっています。自らの創造性を要求される職場では、総合的な学問である歴史学を学んだことは大きな力となるでしょう。また先述のように、大学院に進んだ上で、前期博士（修士）課程修了後に、博物館・資料館の学芸員、発掘担当技師などの専門職に就く人が増えています。

６　メッセージ

質問や迷いのある１回生の皆さんは、是非、私たち日本史の教員に相談してください。文学部棟２階の日本史教員の研究室を訪ねたり、メールで質問したりしてください。

はじめに、歴史学とは、「人間の文化や社会の本質を、《時間》軸における変化のなかで把握する学問だ」と述べました。それは、今を生きる自己の探求でもあります。さあ、いっしょに、日本史という自己探求の旅に出発しましょう。

世界史コース

１　本コースの研究内容、特色

ほんのちょっと意識すれば、私たちの日常を取り囲む問題が、過去の歴史の積み重ねの上に成り立っていることがすぐわかります。隣りあう国々との思想や領土上の対立、世界規模で発生している経済危機、アラブ社会の変革のみならず、日本人のファッションや食生活の変化、エイズやインフルエンザ、新型コロナウィルスに対し世界が協調して行動している背景にも、歴史が大きく横たわっています。歴史を充分理解せずに、これら日常の問題を考えようとすると、浅はかな結論に行きつき、ときに大きな政治・経済・社会問題を引き起こすこと、そして生じた問題をどう受け止めてよいのかわからず右往左往する人々を多く生みだすことは、皆さんも報道その他でよくご存じのことと思います。歴史と、歴史に根ざした文化の相違を充分理解することは、問題が山積するこれからの世界を生き抜く私たちに、ぜひとも必要な能力のひとつだと言えます。

歴史を充分理解するには、世界で共通に認められている作法をふたつ習得する必要があります。「通説」を理解することと、「史料」を読み込むことです。過去の歴史叙述の束からなる「通説」を理解せず、かつ過去を生きた人々がのこした文字・遺跡・絵画・ファッションなど何らかの「史料」を利用せずに書かれた歴史は、不作法な歴史として、世界では取りあってもらえません。不充分な歴史理解に基づいて私たちの日常的な問題を解決しようとしても、世界の人々はなかなか納得してくれないのです。世界史コースは、皆さんがこの作法を身につけ、世界で通用する歴史とは何かを理解して卒業する手助けをします。

世界で通用する歴史理解を習得する効果的な方法として、「通説」と「史料」に基づいて自分で歴史を書いてみる、ということがあります。世界史コースに所属するすべての学生は、卒業論文として自ら歴史を書き、歴史理解を高める格好の機会を得ます。卒業論文のテーマは、学生各人がそれぞれの関心に基づいて選択します。世界史コースの教員は、社会史、文化史、生活史を得意とし、都市史、美術史、建築史、家族史、官僚機構史、宗教史、環境史など、広範なテーマを研究しています。教員や、ときには学生同士で議論しながら、３回生終了時までに卒業論文のテーマを各自で見つけだしてください。

つぎに、学年ごとにどのような専門科目を履修したらよいのかを説明します。まず、「人間文化基礎論Ⅰ・Ⅱ」を履修してください。歴史学の基本的な考え方、読み書き調べる基本的技法、将来の目標（「卒業論文」作成）など、４年間に必要な基礎的知識が身につけられます。ついで、「世界史基礎講読」で、研究論文や史料の初歩的な読み方の訓練を受けてください。「人間文化概論Ⅰ・Ⅱ」は、学問の基礎である哲学と歴史学の基本を学ぶことによって、広く人間や文化に関する捉え方をつかみます。本格的に歴史学を学ぶために必要ですので、１回生または２回生で履修してください。

２回生になると、「史学概論」で歴史学の特質を学ぶとともに、東洋史および西洋史の「基礎講読」および東洋史・西洋史・世界史の「講読」で研究論文や史料のより深い読解力を養い、「通論」でやや高度な講義を聴きます。１・２回生のあいだは本格的に専門教育科目を履修するための準備期間と位置づけてください。３回生になって２回生までに取得しておいた方がいい全学共通科目や専門必修科目を残していると、３回生以降に専門教育科目の履修に支障が出ることもあります。

３回生では、いっそう専門的に「講読」の訓練を受けるとともに、「演習」によって歴史学の基礎的方法をテーマの立て方、調べ方などについて会得します。「特講」は、高度で独自の研究内容の講義です。自由選択科目ですが、必ず履修してください。また、この時期に少し専門と離れた分野の「通論」を履修すると、視野を広げるのに役立ちます。

４回生は、「卒業論文」の作成が中心で、専門分野と関連する教員から「卒業論文演習」を受け、「卒業論文」に取り組みます。「通論」や「特講」を聴講すると、論文作成のためのヒントが得られるかもしれません。

以上のほかに、実習旅行・史跡見学会などで、現地や実物をみて歴史学の方法を考えます。また、東洋史・西洋史それぞれに卒業論文などの中間発表を行います。これらの行事終了後に懇親会があるほか、卒業パーティーなど教員と学生が触れあう機会がありますので、積極的に利用してください。

２　スタッフ

平田（ひらた）　茂樹（しげき）　教　授
中国前近代の科挙・官僚制を中心とする政治文化の歴史を主に扱う。

渡辺（わたなべ）　健哉（けんや）　教　授
近世・近代中国の都市社会史、学術史。

濱本（はまもと）　真実（まみ）　准 教 授
近世・近代の中央ユーラシア史、ロシア史。

上野（うえの）　雅由樹（まさゆき）　准 教 授
近世・近代のオスマン帝国を中心とする西アジア・中東・バルカン半島地域の歴史。

北村（きたむら）　昌史（まさふみ）　教　授
近現代ヨーロッパ、とくにドイツの社会史。

草生（くさぶ）　久嗣（ひさつぐ）　教　授
ビザンツ帝国（東ローマ帝国）及び東地中海の宗教史、社会史。

向井（むかい）　伸哉（しんや）　講　師
中世フランス史、国制史・農村史。

３　コース決定にあたっての心構え

いろいろな地域、さまざまな時代・分野の歴史に興味をもってください。どの地域・時代・分野を中心に学ぶにしろ、歴史学を基本としていることを忘れないで、歴史学の方法論・基本的な知識、多様性をしっかり理解してください。そのために、是非とも１・２回生のあいだに読書する習慣を身につけてください。この読書量が、卒業時に大きな差となってあらわれます。

目的意識・問題意識がなければ、歴史学を学ぶことはできません。高校まで歴史を暗記科目として得意とし、大学で勉強する歴史学も同じようなものだと思っている人は、大きな勘違いをしている人です。高校までに身につけた基本的歴史知識は、大学でも充分いかされますが、自分で問題（テーマ）を設定し、解決するだけの考察・分析力を身につけなければ、「卒業論文」のテーマを決めることはできませんし、テーマに沿って考察・分析していくこともできません。コース決定までに、大学で勉強する歴史学の意味を充分に理解してください。そのために、歴史学の提供している専門科目の「人間文化基礎論」「人間文化概論」「世界史基礎講読」をしっかり履修してください。

４　大 学 院

東洋史学専門分野（専修）では、中国史を専門とする教員を中核として、４名のアジア史を専門とする教員がいます。西洋史学専門分野（専修）では、ビザンツ史、フランス中世史、ドイツ近現代史を専門とする教員がいます。大学院生は、学内の授業科目で養った研究能力を基盤に、学外の学会・研究会でも活動しています。「世界史コース」の教員が関係している研究会に、宋代史談話会、宋代史研究会、関西ビザンツ史研究会、ドイツ現代史研究会などがあります。

前期博士課程修了者は、後期博士課程に進学する者のほか、教育関係、官公庁、一般企業に就職しています。後期博士課程修了者は、研究・教育関係の職に就く傾向があります。

５　卒業後の進出分野

一般企業、官公庁に就職する場合が多いですが、教員や大学院に進学して研究者になる人もいます。それぞれ「世界史コース」で身につけた読解力、文章力、考察力、目的意識・問題意識を活用した企画力などをいかして活躍していますが、このような基本的能力・知識をもとに、実用技術を身につけて、コンピュータ関連の仕事やベンチャー企業で活躍する人もいます。

６　メッセージ

「講読」「演習」「卒業論文演習」では、教員から直接指導を受ける機会が増えます。そのような少人数教育の利点をいかせるように、教員との関係を密にもってください。そのために、「世界史コース」の行事に積極的に参加してください。まずは、例年５～６月に行われる「新歓ハイキング」（日帰り）に、参加してみてください。文学部棟２階 220 号室が日本史・世界史学部指導室、213 号室が西洋史学院生指導室、215 号室が東洋史学院生指導室です。気軽に入って、学部学生・大学院生から「生の情報」を得てください。コース決定にあたって、きっと役立つことでしょう。

社会学コース

１　本コースの研究内容、特色

［社会学とは何か］　学問は、すべて対象と方法によって特徴づけられます。

これを社会学について述べますと、社会学の研究対象はあらゆる社会現象にわたり、文字どおり古今東西におよびます。アト・ランダムに例示すれば、①アフリカ難民の集団形成、②ナチズムの統治機構、③公害都市から環境都市へ、④核家族と産業、⑤天皇制とメディア文化、⑥選挙制度の国際比較、⑦階層の史的分析、⑧カルト宗教の社会的背景、⑨近代化と共同体……一見したところ無原則・雑多と思われるような集積ができあがります。このように、対象選択に関するかぎり、社会学ほど自由な学問は、まずないでしょう。この「自由さ」に惹かれて、昔も今も、多くの学生が社会学を志望して来ます。

たとえば政治学なら、上の③⑥くらいしか対象にならないでしょう。自由度がより小さい。これはもちろん価値判断ではありません。政治学は社会学とちがって、はじめから対象がよりはっきりしており、きびしく限定されているのです。その点、社会学はゆるやかであり、だらしないともいえる。学問には、主に固有の対象によって定義される「対象学」と、その点であいまいなものとがあるわけです。

社会学はあいまいなほうに属するのですが、それでは学問としての固有性・独自性はいったいどこにあるのかといえば、社会学では、あらゆる社会現象を選択の対象とすることができるかわりに、選択の仕方そのものに一定の原則・約束・方法があり、それにもとづいて選択・抽出がなされます。対象と方法との関連がより密接不可分で、視点や方法によって対象性が規定されてくる。その意味で社会学は、対象学というよりは「方法学」としての性格が強いといえます。

では、社会学の固有の視点とは何か。それは、社会現象をつねに人間・社会関係・集団のあり方や行為として解釈していくところにあります。あらゆる社会現象は、共通に「人と人」、「我と汝」、「個人と社会」の相互関係＝集団の現象にほかならない。この側面に焦点をおいてあらゆる社会現象にアプローチするのが、社会学の固有性です。

［教育方針とカリキュラム］　「社会学コース」の教育方針とは、人間と社会を分析する社会学的認識方法の実践を通して社会に貢献できる有用な人材を育成し、世に送り出すことです。

この目的を達成するために、カリキュラムを理論系と調査系の２本柱で総合的に構成しています。「理論なき調査は盲目であり、調査なき理論は死んでいる」という有名な言葉がありますが、理論と調査は互いに他を前提としあう車の両輪のような関係にあり、どちらも大切なことはいうまでもありません。

理論系には、「人間行動学概論」（１年ー標準履修年次）、「社会学概論」「社会学史」（２年）、「社会学演習」（２～４年）などがあります。聴講と読書と討論によって知識を増やし、問題意識を高めることができます。一方の調査系には「人間行動学データ解析法」（１～２年）、「社会学研究法」「社会調査法」（２年）、「社会学実習」（３年）などがあります。社会調査の方法を学び、街に出て実際にフィールドワークや意識調査を行います。また、調査系の科目を履修することによって「社会調査士」の資格を取得することが可能です。

以上は主として学科必修科目またはコース選択必修科目ですが、ほかに自由選択科目として、専任スタッフと非常勤講師によるさまざまな特論・特講などがあります（多くは２～４年の間に随時選択履修）。次項で紹介するように専任スタッフの研究領域はかなり多彩といえますが、それでも多様に専門分化している現代社会学の全領域をカバーすることは到底不可能です。そこで皆さんに社会学の豊饒な世界を少しでも多く知ってもらうために、他大学からも非常勤講師を招き、専門の講義をしていただきます。

以上のコースを経て社会学的方法を身につける一方、自らの研究対象を選択・決定した上で、最終学年で「卒業論文」を作成します。

２　スタッフ

石田（いした）　佐恵子（さえこ）　教　授

文化社会学・映像社会学・メディア文化論を専攻。現在の主な研究テーマは、映像と社会の関係、文化のグローバル化、アーカイブズの公共性について。

伊地知（いぢち） 紀子（のりこ） 教 授

生活世界の社会学。地域社会学・朝鮮地域研究を専攻。現在の主な研究テーマは、東アジアにおける国際移動とローカリティについて。

川野（かわの） 英二（えいじ） 教 授

都市社会政策の社会学・比較社会学を専攻。現在の主な研究テーマは、大都市の貧困と社会的排除に関する国際比較研究。

平山（ひらやま） 亮（りょう） 准 教 授

家族社会学、老年社会学、ジェンダー研究を専攻。現在の主な研究テーマは、男性性とケアの関係、ケアに関わる判断・調整責任とその社会的分有。

笹島（ささじま） 秀晃（ひであき） 准 教 授

都市社会学・芸術社会学を専攻。現在の主な研究テーマは、戦後ニューヨーク市における芸術家街の形成と都市空間変動の関係性に関する歴史社会学的な研究。

３ コース決定にあたっての心構え

１年次に受講できる社会学関連の科目は、共通教育・専門教育あわせてかなりの数があります。共通教育では、「現代文化の社会学」「都市的世界の社会学」「現代社会学入門」「家族と社会」「メディアの社会学」「現代の社会問題」（ただし、実際の開講科目は毎年異なるので要注意）。これらを可能な限り履修しておくことが望ましい。また、心理学・教育学・地理学、アジア文化学・表現文化学、政治学・経済学など、隣接科学からの提供科目も、幅広く学んでおいてください。

一方、専門教育では、先述の「人間行動学概論」「人間行動学データ解析法」などの学科必修科目があります。外国語については、英語はもちろん、新修外国語をしっかり履修しておくこと。大学院進学希望者はもちろん、卒業後にどの分野に進むにせよ、ヨーロッパ・アジア諸国の言語やロシア語は、将来きっと役に立つはずです。

つぎに日頃の心構えとして、こんなことを試してみてはいかがでしょうか。

現代社会を解読するキーワードとして、「少子高齢化」「情報社会・監視社会化」「リスク社会」「グローバル化」などがあります。これらは、われわれの生活を根本から規定している不可抗・不可避の社会変動といえます。だから、社会学コースを志望する人は、これらのキーワードをいつも頭から離さないでおいてください。新聞やテレビで報道される日々の出来事はどれも、これらのキーワードと直接・間接にどこかで関連しているにちがいない。その関連づけを考えながらニュースを読む、いわば思考の自主トレが、いざ社会学を本格的に勉強する段になって必ず役立ちます。社会学の「分析方法」は専門科目で学びますが、その対象である「社会現象」への関心を十分に高め準備をしておいてください。

４ 大 学 院

卒業後も続けて社会学を研究したい人のために、大学院前期博士課程（修士課程）と後期博士課程に進む道が開かれています。現在の院生は、地域社会学、福祉社会学、メディア論、都市問題、エスニシティ研究など、それぞれ自由にテーマを選んで研讃に励んでいます。また就職先としては、大学・研究機関の教育・研究職のほか、近年では公務員、教諭、NPO 団体、民間調査機関などに就職する人も増えています。

５ 卒業後の進出分野

製造業、サービス業、公務員、教員、マスコミ関係、進学など、多種多様ですが、人事・市場調査・広報公聴・企画開発といった部門が考えられます。これには社会学の方法、具体的には社会調査の知識と技術が関連しています。最近の卒業生の進路は、大学院進学、公務員、新聞社、テレビ局、オムロン、積水ハウス、京阪百貨店などでした。

６ メッセージ

自分が社会学向きかどうかを知りたい人のために、ひとこと添えておきましょう。読書が好きな人、または好きになろうと努力している人、人間に対する興味・関心が旺盛な人、市民運動・ボランティア活動などに参加している人、または参加してみたいと思っている人 ── このうちどれか１つでもあてはまれば、あなたは社会学に向いています。

心理学コース

１　本コースの研究内容、特色

心理学は、多様で複雑な人間の営みを、心のはたらきという視点から解明することを目指す学問です。心のはたらきという目に見えない現象を、行動という客観的な指標を通して、科学的に明らかにしていくことを目的としています。

わたしたちの行動にかかわる心のはたらきは、多岐にわたっています。「心理学コース」では、生理、学習、認知、発達、社会、性格といった、心のはたらきのさまざまな側面について学びます。ただし、本コースでは、臨床心理学の分野で扱う問題（心の問題を抱えた人々に対する診断・治療など）については、研究・指導を行っていません（臨床心理学についての教育・研究は、生活科学部の心理臨床コースで行われています）が、将来、大学院あるいは社会において臨床心理にたずさわることを目指す人にとっても、本コースで心理学の基礎的な知識・方法を学ぶことは、とても有益であるといえましょう。

「心理学コース」の最も大きな特徴は、実験・調査・観察といった実証科学的な方法論に基づいて、心の法則を明らかにしていこうとする点にあります。そのため、研究方法に重点を置いたカリキュラムが組まれています。

「心理学コース」のカリキュラムの中心は実験演習です。本コースに進まれた皆さんは、まず２回生で、心理学の各分野の基本的課題について実験・調査を行う「心理学実験演習Ⅰ・Ⅱ」を履修します。引き続き３回生では、「心理学研究演習Ⅰ・Ⅱ」を履修し、皆さん自身の関心に基づいて研究テーマを選び、実験・調査を行ってレポートをまとめます。これらの集大成として、４回生で「卒業論文」を作成します。「卒業論文」の作成にあたって、指導教員によるきめこまかな指導に加えて、年３回の卒業論文指導会があり、教員や大学院生ならびに仲間たちからのアドバイスを受ける機会が設けられています。

実験演習と並行して、人間行動学科共通の科目として、２回生向けに「人間行動学データ解析法Ⅰ・Ⅱ」、３・４回生向けに「人間行動学データ解析法Ⅲ・Ⅳ」が開講されています。コンピュータを使った演習を通して、統計の初歩からより高度な技法にわたって教授し、種々のデータ解析手法への理解と習熟を図ります。

講義科目としては、「心理学概論Ⅰ・Ⅱ」「心理学研究法Ⅰ・Ⅱ」を中心として、各種の「特論」「特講」が提供されています。「心理学概論Ⅰ・Ⅱ」は、心理学史および心理学の諸分野の概説を通して、心理学の全体像を理解してもらうための科目です。「心理学研究法Ⅰ・Ⅱ」では、心理事象の実証的研究に不可欠な方法論が解説されます。「特論」「特講」では、心理学の諸分野における特定の話題に焦点を当て、より深く掘り下げた内容の講義がなされます。

なお、通常のカリキュラムに加えて、それぞれの領域ごとに大学院生を交えた勉強会・研究会が随時開催されており、活発な議論が展開されています。

２　スタッフ

次の４名の教員が、「心理学コース」の授業を担当しています。

（認知・発達）

山（やま）　祐嗣（ひろし）　教　授

認知心理学：思考と推論、認知と文化。

（神経・生理）

川邉（かわべ）　光一（こういち）　教　授

生理心理学：心と身体（脳）・精神疾患、行動と薬物、学習・記憶を中心とした高次認知機能の脳内機構。

（学習・行動）

佐伯（さえき）　大輔（だいすけ）　准 教 授

学習心理学：行動分析学、判断、意思決定、選択行動。

（社会・文化）

橋本（はしもと）　博文（ひろふみ）　准 教 授

社会心理学：集団力学、集団内利他行動、心の文化差。

３　コース決定にあたっての心構え

「心理学コース」を専攻しようとする皆さんには、何よりもまず、心理現象に対する強い興味と関心が求められます。同時に、確実で客観的な知識を求めようとする熱意と、複雑な現象を実験・調査・観察に基づいて一歩一歩解明していくという地道な努力が求められます。また、心のはたらきは、人間のあらゆる営みと密接にかかわりあっています。その意味でも、心理学以外の分野にも関心・興味を広げ、広い視野をもつことは、心理学を学ぶ上でもおおいに役立ってくれることでしょう。

「心理学コース」では、前述したように、実験心理学を中心にしてカリキュラムが組まれていて、実証科学的な色彩が強い点に特色があります。本コースのカリキュラムをこなすことによって、科学的思考を養い、実験・調査・観察を行うための技能（コンピュータの操作を含む）を体得し、統計処理や数値計算に習熟することが期待できます。さらに、外国語（主として英語）の文献を短時間に読みこなすだけの語学力も身につきます。

本学では全学共通教育科目として、「心理学への招待」をはじめ、５科目の心理学関係の科目が提供されています。「心理学への招待」では、心理学全般についての初学者向けの解説を行い、他の科目では心理学の各分野についての少し詳しい紹介を行っています。「心理学コース」を希望される皆さんは、ぜひこれらの授業を受講して、心理学とはいかなる学問かを理解してください。

これらの授業では、随時、質問紙調査や心理テストを行ったり、実験の参加者を募集したりします。積極的に参加されれば、心理学についての理解を深めるのに役立つと思います。また、人間行動学科共通の必修科目として、「人間行動学概論Ⅰ・Ⅱ」も開講されていますので、これらの科目も忘れずに受講してください。

４　大 学 院

前期博士課程、後期博士課程に、心理学専門分野（専修）が開設されています。心理学専門分野（専修）では、実験心理学を基本として、科学的方法論を重視した教育・研究体制が組まれています。臨床分野を除くあらゆる心理学諸分野の基礎から応用にわたる幅広いテーマについて、学び、研究することができます。また、生理実験室、行動実験室、空間実験室、認知実験室、音響実験室、学習実験室、行動観察室、心理検査室を有し、実験設備も充実しています。

５　卒業後の進出分野

卒業生の進路は、一般企業、教員、公務員など、多岐にわたっています。心理学に直接関係する職種として、国家公務員Ⅰ種には、技術系行政官として、試験区分人間科学（心理学）があります。法務省や厚生労働省に勤めることが多いようです。地方公務員（大学卒業程度）にも心理職があり、児童相談所・婦人相談所の判定員やケースワーカー、養護施設の指導員といった職種につきます。その他、家庭裁判所調査官補Ⅰ種、法務教官などがあります。また、大学院に進む人も少なくありません。

なお、所定の単位を取得することによって、日本心理学会認定心理士の資格をとることができます。

また、2017 年 9 月に公布された、国家資格「公認心理師」（心理に関する支援を行う専門職）に関する「公認心理師法に基づき、文学部では、生活科学部と共同して、2018 年度入学生から、公認心理師国家試験受験資格取得に対応したカリキュラムを提供しています。公認心理師に関する詳細は、「科目履修の手引き」99 頁を参照してください。

６　メッセージ

「心理学」という言葉やトピックスの面白さだけから本コースを希望してくる人の中には、授業内容が予想と違うとして他コースへ転じるケースも出ています。

世間ではいまだに、心理学を学べば（研究すれば）たちどころに人の心がわかるようになる、という類の誤解が強いようです。心のはたらきという複雑な現象は、一朝一夕で解明されるというものではありません。心のはたらきについての確実で客観的な知識体系を作りあげるために、実験・調査・観察を地道に積み重ねていくこと、それがわたしたちが行っている心理学研究にほかなりません。心理学という学問について正しく理解した上で、コースを決定されるよう希望します。質問・相談があれば、本コースの教員・大学院生・学部生のだれにでも、遠慮なく声をかけてください。

教育学コース

１　本コースの研究内容、特色

人は生まれてから死ぬまでの間、いろいろな活動をしますが、それらのうち、教育に関係のないものはほとんどありません。人は、よりよく生きようとするとき、多くを学びます。学校以外でも学びます。「教師」が存在しないところでも学びます。職場にも、地域にも、ボランティア活動にも、家庭での子育てにも、教育の営みがあります。そういった、様々な場面において、「教育」という切り口で社会に貢献できるような人材形成を教育学コースでは目指しています。単に学校教師になるためだけのコースではありません。

教育学コースでは、人のライフサイクル（人生周期）全体を視野に入れて、学校教育と学校外教育の両面にわたる思想・制度および実践について、実証的に研究することを大事にします。具体的には、教えることと学ぶことの関係、カリキュラムの編成、授業論や特別活動論、教育制度・教育行政や教育改革、教育の歴史や国際比較、教職および教師の教育、教育の情報化、異文化理解の教育などの諸研究です。

必修科目の「人間行動学概論Ⅰ・Ⅱ」は１回生で履修してください。２回生向けの必修科目は「人間行動学データ解析法Ⅰ・Ⅱ」です。２回生では、「教育学研究法Ⅰ」「教育学実習」「教育学演習Ⅰ」「教育学演習Ⅲ」を履修してください。これらの必修・選択必修科目では、人間行動学とは何かについて考え、その基礎となる方法論や人間という対象へのアプローチの仕方を学びます。２～３回生向けの選択必修科目は、「教育学概論Ⅰ・Ⅱ」「教育方法学Ⅰ」で、３回生向けの選択必修科目は「教育方法学Ⅱ」「比較・国際教育学」「教育学研究法Ⅱ」「教育学演習Ⅱ」「教育学演習Ⅳ」です。また、教育学関係の自由選択科目は、「教育行政学」「教育史」「教育メディア論」「教育学特講Ⅰ・Ⅱ」及び「教育学演習Ⅴ」です。これらの他に、教育学コース生限定になりますが、教職科目の多くの所定科目（別途、参照）を、自由選択科目として履修することができます。

これらの選択必修科目や教育学関連の自由選択科目の特長は、学生自身の問題意識をもとに学問的な涵養を行い、討論や発表等を通して、多様なものの見方、批判的な思考、自分なりの価値や思想や知識を自分で構築できる力の育成を目指していることです。学生自身がいかに深く探究するかに力点が置かれます。教員は、学生の探究を支えるための有効な働きかけと環境の整備を心がけます。学生生活における探究の集大成である卒業論文も重視しています。「卒業論文演習」は４回生で履修しますが、それにつながる科目として、とくに「教育学研究法Ⅰ・Ⅱ」と「教育学実習」があります。

「教育学研究法Ⅰ」では、研究のテーマやトピックの設定、教育・教育学の概念、論文の読み方と書き方、文献・資料の検索に関わる基本的な事柄を学びます。「教育学研究法Ⅱ」では、学校現場に実際に出かけ、授業の設計・実施・評価やカリキュラムの開発等に関わる実証的データの収集・分析方法を学びます。

「教育学実習」では、大阪市学校支援学生ボランティア制度等を利用して、学校教育の実地体験を通して知見を広げます。４回生では、卒業論文の作成が中心となり、「卒業論文演習」が行われます。一人ひとりに担当となる窓口教員がついて、丁寧な指導をします。その際、卒論題目（テーマ）に応じて、窓口教員以外の教員と相談することも奨励しています。卒論題目には、例えば、「病児保育における保育士と看護師の連携の課題に関する研究―保育士および看護師の養成・研修の比較から―」、「地域と接続する高校教育のあり方―石川県の過疎地域における高等学校学科再編の取組から―」、「ブラジルにルーツを持つ子どもの学力とその親の日本語学習についての考察」などがあります。なお、各科目の詳細や卒論題目一覧は、http：//www.lit.osaka－cu.ac.jp/edu からでも閲覧できます。

教室行事として、教室旅行を毎年１度行っています。原則として教育学教室のメンバー全員（教育学コース生〔学部生〕、文学研究科人間行動学科教育学専修の大学院生および教員）が参加します。例年、10 月に１泊２日の日程で実施しています。企画・運営は２・３回生と担当の教員が行います。昼は博物館、資料館、文化史跡等を訪れて学習をし、夜は学生企画の催し（ゲーム、クイズ・・・・・・）とコンパで楽しみます。教育学教室のメンバーが一堂に会し、親睦を深める絶好の機会です。

２　スタッフ

添田（そえだ）　晴雄（はるお）　教　授

比較教育文化史、 教育・学習における話すことと聞くことの研究、いじめ問題の国際比較研究。

辻野（つじの）　けんま　准 教 授

教育経営学、公教育の射程の研究、教育上の自由に関する研究。

島田（しまだ）　希（のぞみ）　准 教 授

教育方法学、授業研究の方法論に関する研究、探究型学習活動のデザインに関する研究。

３　コース決定にあたっての心構え

専門教育を受ける上で一定の読解力は必要ですので、複数の外国語を身につけるよう努力しておいてください。教育の営みはいろいろな人間の活動（生産、経済、政治、遊び、幸福追求…）と関係があります。それゆえ、教育学と関係のない学問領域はないと言っても言い過ぎではありません。いろいろなことに興味をもち、活動し、いろいろな分野の読書をしてください。教育学の対象となるのは「人間」です。人間の行っているさまざまな活動を何でも見てやろう、経験してみようといった心構えで積極的に学生生活を送ってください。

４　大 学 院

大学院文学研究科人間行動学専攻教育学専門分野（専修）では、教育の基礎理論および広義の教育方法に関する研究を行います。大学院修了者は、大学教員、小・中・高等学校教員、教育研究所等の研究員や国家公務員（法務局の教官等）、地方公務員（社会教育主事補等）として活躍しています。

５　卒業後の進出分野

教育学コース生の進路は多種多様です。その中でもっとも数がまとまっているのが教職です。教科の免許状（国語、社会、地理・歴史、公民、英語）をとって、中等教育（中学校・高等学校）の分野に就職しています。また、資格試験を受けたり卒業後に通信教育などで単位を補ったりして小学校の教師になっている人もいます。本学の大学院（教育学専修）に進学してから教員になる人も少なくありません。次に多いのが公務員です。厚生労働省や法務教官、家庭裁判所等の国家公務員、県庁職員、市役所職員、社会教育主事補等の地方公務員です。教育学の試験が免除されたり、試験対策が教員採用試験と共通するところが多かったりするので、教育学コース生は公務員試験を多く受験しています。その次に多いのが大学院進学ですが、これについては前項を参照してください。しかし、「教職」「公務員」「大学院進学」「一般就職」のように大きく分類すれば、教育学コース生の大半は「一般就職」に進むと言えます。新聞社、放送局、出版社、書店、コンピュータ関連会社、保険会社、銀行、デパート、食品メーカー、文具メーカー、JA、商工会議所、医療福祉関連・・・・・・など、実にバラエティーに富んでいます。

６　メッセージ

教育学教室のホームページは http://www.1it.osaka-cu.ac.jp/edu/です。教育学教室の研究室等は文学部棟１階にあります。コース所属の学生は「教育学学生指導室」(149) を利用できます。この部屋には学生専用のコンピュータが設置してあります。「教育学共同研究室」（146）には、教員・院生・学部生が談話できるスペースが設けられ、教育学および隣接領域の辞・事典、統計書、白書等、教育学関係の新着雑誌が豊富に揃っています。「教育学資料室」（150）には、全国の都道府県教育史をはじめとして教育史関係の文献があり、自習するスペースが設けられています。「教育技術開発研究室」（142）は、教育学の授業や自主的な研究会に使えるようにしてあります。「教育学大学院指導室」（147）は、大学院生が研究するための部屋で、コンピュータも利用できます。

地理学コース

１　本コースの研究内容、特色

哲学者カントは事物の存在を規定する根本的な契機として時間（いつ）と空間（どこ）があるとしました。歴史学が時間を扱うのに対して、地理学は人間の生活する地球表面の「空間」や「景観」の形態、構造、過程を研究する学問です。家屋、道路、耕地、工場、商業・娯楽施設、その他の人間活動のための諸物からなる「空間」や「景観」は人間が歴史の流れの中で作り上げてきた組織、構築物、そして意味体系です。これらは経済・社会・文化・政治・環境などの事象との関連で形成され、意味をなし、またその様態は常に変化しています。

こうして世界はさまざまに分化した「空間」や「景観」から成り立っています。したがって地理学は、東洋史学・西洋史学・文化人類学同様に世界を研究対象にします。分化した「空間」や「景観」は人間のすみかを作り、人間生活を条件づけています。したがって地理学は、社会学が人間の組織や相互関係を扱うのに対して、人間とそれを取り巻く「空間」や「景観」（広義の環境）について考えます。

大阪およびその周辺における自然・人文各分野にわたるさまざまな事象に関する研究の蓄積は本コースの伝統であり、『アジアと大阪』（古今書院刊）の出版をはじめ、雑誌『空間・社会・地理思想』の定期刊行など、これまで数々の成果をあげています。また、海外研究についてもアジア、ヨーロッパ、アメリカなどで現地調査に携わった経験を持つ専任スタッフを擁し、国際的な広がりを持った授業が展開されています。

しかしながら、地理学は非常に広範にわたる事象を研究対象としていますので、専任スタッフのみですべての分野をカバーすることは困難です。それゆえ毎年数人の非常勤の先生方に出講をお願いし、専任スタッフの専門分野以外の諸分野をカバーし、在学中に地理学研究の懐の深さを理解できるようにつとめています。さらに、卒業論文などで必要な場合には、国内・海外の研究者を適宜紹介しています。

広範な地理学の諸分野を見通すために、「経済・都市」「景観・文化」「社会・政治」「地理情報システム」の４つの専門領域を学習の基本軸として設定し、さらに経済・社会・文化・政治・環境など、人間の生活と行動に関わるさまざまな要素を幅広く知るためのカリキュラムが用意されています。

１回生の「人間行動学概論」は、人間行動学科の学問に対する基本的な考え方と各コースの学問の基礎的手法を身につけることを目的としています。

２回生では、「地理学概論」「地誌学」で地理学・地域研究の特質を学ぶとともに、「地理学実験実習」「地理学野外調査実習」を通じてインドア・ワーク（室内での地形図・空中写真などの読図と計測、コンピュータを用いた情報処理技術）とフィールドワーク（数日間にわたる野外での計測・資料収集・インタビューなど）の訓練を受けます。また、「地図学」では地図の発達史や測量技術の基礎を、「地理情報学」では近年注目されている地理情報システム(GIS)などに関する最先端の研究課題と方法を学びます。

３回生では、「地理学講読演習」で外国語論文の読み方と専門用語についての知見を深め、「地理学野外調査実習」でさらにフィールドワークの技量を磨きます。「地理学演習」では、地理学界の最先端の研究動向と研究方法を国内・海外の文献を通じて習得するとともに、各自が関心を持っている研究テーマに即して報告・議論を行い、卒論執筆に備えます。また、「地理学特講」については、非常勤の先生による講義も少なくないので、２回生以上は学年を問わず積極的に受講してください。

４回生は「卒業論文」の作成が中心となります。本コースでは専門領域別にみっちりときめ細かな「卒業論文演習」を実施しています。

さらに、授業以外でも適宜「巡検」を実施しています。「巡検」は、コースに所属する教員・大学院生・学部学生がキャンパスを離れて実際に「地域」や「景観」を観察し、現地でディスカッションを行うもので、地形図の読図力や野外観察の眼を養うことを目的としています。なお、巡検の準備は、３回生向け「野外調査実習」の課題となります。

とくに野外調査による観察とデータ収集の重視は、本学「地理学コース」の創設期以来の伝統的特色といえます。近年発達のめざましい情報処理技術についても、最新のデジタル・マッピング、地理情報システム(GIS)

設備、地図室などを擁しています。あわせて地理学コースには、情報処理室、製図室、情報資料室など、教材・測定設備・コンピュータを備えた実習室と大学院・学部学生の指導室（各１室）があります。

また、常に学界の最新の研究動向・技術を教育の中にとり入れるよう心がけ、少人数クラスによる演習、実習でみっちりと実力を養うことを目ざしています。

２　スタッフ

水内（みずうち）　俊雄（としお）　教　授　（都市研究プラザ兼任）

東アジア諸都市の社会問題・住宅問題の現状や歴史的経緯についての社会地理学的研究。

山﨑（やまざき）　孝史（たかし）　教　授

グローバルな政治経済的変動とローカルな社会運動に関する政治地理学的研究、戦後沖縄研究。

祖田（そだ）　亮次（りょうじ）　教　授

東南アジアにおける人口移動・民族間関係・資源管理問題、第三世界における都市－農村関係の研究。

木村（きむら）　義成（よしなり）　准 教 授

地理情報システム論、保健医療分野におけるGISの応用研究。

菅野（すがの）　拓（たく）　准 教 授

都市地理学、災害研究、サードセクター（NPO／NGO／非営利民間組織）論。

３　コース決定にあたっての心構え

野外観察の眼の養成やデータの計量処理・地図化の技術をはじめ、実践的な外国語能力、総合的な思考力など、地理学を学ぶために必要とされる能力は多岐にわたっています。それゆえ外部の世界に目を見張って、物事を具体的に考え、広範なトレーニングに意欲的に取り組むことのできる、好奇心を持った活力の旺盛な人に向いているといえましょう。地道な学習を積み重ねれば、卒業時には国際化・情報化時代にふさわしい能力を獲得することが期待できます。

1 回生では学科共通科目を受講して人間行動学の基礎を学ぶとともに、なるべく幅広く全学共通科目を受講するように心がけてください。そうした授業を通じて身につけた知識は、間口の広い地理学を学ぶ際に必ず役に立ちます。

また、外国語は少なくとも英語の能力を磨くことが求められます。なぜなら、学界の最新の研究動向を知るには英語文献の読解力が前提となり、将来自らの仕事や研究の成果を国際的に発信していく上で英語が鍵を握るからです。この他、特定の地域や文化を研究したいと考えている人は、その地域の言語になるべく早く親しむことが望まれます。具体的な調査・研究の中で実践的な語学能力が身につくのが地理学の特徴であり、本コースの卒業生の中には、留学の機会に現地でのフィールドワークを行い、卒業論文を作成した人もいます。

４　大 学 院

研究目標を次第に集約しつつある、意欲的な人の入学を期待しています。地理学専門分野（専修）では、前期博士課程については、９月と２月の年２回入学試験を実施しています。前期博士課程修了後、行政官庁、高校教員や地域計画コンサルタントへ就職したケースもあり、引き続き後期博士課程に進学する者も数多くいます。後期博士課程の修了者のうち、すでに30名以上が大学等の研究職につき、学界で広く活躍して実績をあげています。

５　卒業後の進出分野

近年は学校教員のほか、官庁や企業の実務の分野などに進出し活躍する者が多くなっています。なかには、地理学の専門知識や地図作成技術あるいはコンピュータ処理能力などを買われて、旅行業、地図・写真測量会社、都市計画・地域計画コンサルタント、海外企業などに就職する者もいます。

６　メッセージ

本コース専攻を希望している人、考慮している人は、学部学生・大学院生・教員が頻繁に利用する地理学情報処理室（文学部増築棟３階359室）に気軽に来室・見学して、いろいろな相談をもちかけてください。

国語国文学コース

１　本コースの研究内容、特色

長い歴史を有する日本語と、その言葉によって織りなされる古代以来の文学作品 ── 前者を直接の研究対象とするのが国語学、後者とその周辺を扱うのが国文学、この双方を合わせて本コースは構成されています。「国語国文学」と名乗るのは、日本語日本文学を自己の属する文化と考える立場にたち、その責任と自覚の下に研究活動を行っているからです。

本コースの特色は、古典を重視するということです。この古典というのは、近代の文学も含まれます。古典作品を深く読み、そこに現代と通底するものを見い出す、あるいは、現代とは異質で容易には理解しがたい考え方と対峙する、そういう中から、現代を生きる基盤というものを汲み取ることが重要だと考えています。また、現代の日本語も、歴史的な変遷を経ながらも、根幹部分を古典語と共有するところが多く、ふだん何気なく使っている言葉の奥行きに目を向けることが必要です。

本コースのもう一つの特色は、具体的な根拠に基づきつつ着実に考察を展開させていく、実証的な研究姿勢の修得を目指しているということです。そのため、授業カリキュラムは、文献や資料の扱い、またその解釈など、基本的な学習に比重を置いたものになっています。古典を現在の常識から早呑み込みするのでなく、その時代の考え方や背景に即して理解するためには、このような基礎的な過程が是非とも必要になるのです。

では、具体的にどのような学習の進め方をするのかということですが、２・３回生の間は、国語学国文学担当の全教員の授業を満遍なく受講することになります。 国語学だけ、国文学だけ、あるいは特定の時代の授業だけ、といった受講の仕方をすることはできません。国語国文学の幅広い領域について、まず基本的な素養をしっかりと身につけることが重要です。ある偏った分野だけを学んでいては、卒業論文で個別のテーマに取り組む時にも、研究が深まっていきません。

本コースの授業形態は、演習形式の授業の比率が高くなっています。「国語国文学講読Ⅰ～Ⅳ」、「国語国文学演習Ⅰ～Ⅵ」「国語国文学特論演習」という科目はもちろん、「国語学方法論」「国語国文学特講Ⅰ・Ⅱ」「国語国文学特論」という科目も、演習形式を組み込んで行われることが多くあります。そこでは、たとえばある作品を講読するような場合、受講生の間で分担を決め、それぞれの担当箇所について各人が調べ、考えてきたことを発表し、さらに、それについて質疑を交わしながら問題点を深めていく、といった形式で授業が行われます。担当者には、多くの文献を読み、さまざまな資料を調べるという、地味で根気のいる作業が要求されますが、こうした実地の作業を通じて、文献処理の方法や、緻密な読解のための基本姿勢が初めて身につくのです。と同時に、それらは決して単に退屈で苦しいだけの作業ではなく、経験を重ねるうちに、そうした作業の合間合間に、この学問特有の面白さを感じ取れる瞬間が訪れるようになることでしょう。

このようにして、２・３回生の二年間、本コースの授業を一通り受講する過程で、おのずと自分の好みの分野、関心のある作品がしぼられてくるはずです。４回生の卒業論文では、自分自身で具体的なテーマを模索し、資料・データを集め、考えを深め、結論を導いていきます。この１年は、学習時間のほとんどを卒業論文の制作にあてなくてはなりません。もちろん専任教員が指導・助言をしますが、あくまで研究主体は自分自身であり、最終学年としての自覚が問われます。

２　スタッフ

(国語学)

丹羽（にわ）　哲也（てつや）　教　授

日本語の意味と文法。日常われわれが使っている言葉がいかなる仕組みでできているか、また、それが過去から現代までにいかに変化してきたかという研究。

(国文学)

小林（こばやし）　直樹（なおき）　教　授

中世の説話・伝承文学の研究。作品世界とその背景をなす文化的基盤の両面を究明する。

久堀（くぼり）　裕朗（ひろあき）　教　授

近世文学、主に人形浄瑠璃史の研究。作品がどのような時代背景のもとに生まれ、どのように享受されていったのかを考察する。

奥野（おくの）　久美子（くみこ）　准 教 授

近代文学、特に芥川龍之介など大正期の作品研究。草稿や典拠、文化的背景の考察により、作品の成り立ちを研究する。

山本（やまもと）　真由子（まゆこ） 准 教 授

平安時代の文学、主に漢文学・和歌の研究。漢語表現と和語表現との関わりを考察し、作品の表現の成り立ち・特質を研究する。

３　コース決定にあたっての心構え

一般に言語や文学の研究には、人間についての広く深い教養と、やわらかな知的好奇心とが必要とされますが、国語国文学もその例外ではなく、日頃からあらゆる機会を捉えて、この方面の涵養につとめてほしいと思います。

また、大学での勉強では、学生一人ひとりに、主体的に問題意識を持って考え、持続的にそれを深めていくような姿勢が要求されます。授業を通して興味を喚起された事柄については、積極的にその方面の書物について、自ら考察を重ね、深めていくような学習態度を身につけていってほしいと思います。何よりもまず本を読むことが重要ですが、具体的にどういう本を読めばよいか、どういう問題意識をもって学んでいけばよいかを知るためには、上記の教員が担当する全学共通科目の授業を受講することも有益です。

中学校や高等学校の国語教員を志望する人は、本コースに進むことをお勧めします。どのコースに所属しても、国語教員になるための単位を揃えることはできますが、教員としてふさわしい十分な国語力を養うためには、卒業論文まで含めて、日本語や日本文学にじっくり取り組むことが必要だと考えるからです。

４　卒業後の進出分野

本コース卒業生には高等学校や中学校の国語教員が多数いるとともに、一般企業や公務員などさまざまな方面に就職しています。丹念に調査し、資料を深く読み、それを誰もが納得するような形で報告するという本コースのトレーニングは、あらゆる実務の基本であるともいえ、どのような職種に就いても生きることでしょう。

授業を通して、あるいは、卒業論文に取り組む過程で、学問の面白さに目覚め、さらに奥深くまで攻究したいという意欲をもった人のためには、大学院「国語国文学専修」に進学する道も開けています。伝統ある本専修は、これまで多くの優秀な人材を学界に輩出して来ています。

また、中学・高校の教員志望の人は、前期博士課程を修了し専修免許状を取得してから教職に就くということも、現在はごく普通になっています。

５　メッセージ

本コースに関心のある人、もっと詳しい情報を得たい人は、国語国文学学生指導室（文学部棟304号室）を覗いてみてください。ここは普段、学部生や大学院生が授業の準備や研究を行っている部屋です。学年の上から下までが日常的に親しく接する中で、下級生は勉強法などを教えてもらっています。ここへ行って一声かければ、上級生や大学院生がいろいろなことを教えてくれるでしょう。もちろん、教員のところにも、気軽に相談に来てください。

６　その他

研究室では雑誌『文学史研究』を発行して研究成果を公表しており、優秀な卒業論文がこれに掲載されることもあります。

また、本コースの在学生・卒業生・教員から成る同窓会組織「大阪市立大学国語国文学会」が結成され、年一回の総会（大学院生の研究発表会や講演会・懇親会）や、春の新入生歓迎茶話会、秋の研修旅行、それに卒業生を送り出す予餞会等、各種行事を行って、構成員間の親睦をはかっています。

中国語中国文学コース

１　本コースの研究内容、特色

中国は古くから日本にとって重要な隣国であり、様々な交流がありました。前世紀に不幸な歴史がありましたが、近年は政治・経済・文化・科学技術の各分野で、再び重要なパートナーとなっています。今後も相互交流はますます活発となり、重要度は増してゆくことでしょう。

しかし、相互理解のためには、歴史や文化的な伝統を十分に理解することが肝要です。その国の言葉を学び、人々の考え方を知り、文学、演劇、映画などに親しむことによって、初めて深い相互理解に到達するのです。

また、中国は単に歴史が長いだけでなく、国土が広く地域性に富み、多くの民族が暮らしています。19 世紀の半ば以降には、西洋文化の流入などによる著しい社会変化も生じています。こうした多様な文化が混じり合うるつぼのような状態は、今もなお継続しており、新たな中国の文化的伝統を産み出しつつあると言えます。こうしたことから、私たちのコースでは、変容をとげゆく中国文化の本質を多角的にとらえるため、中国の文化全般にわたる幅広い分野を教育・研究の対象としています。

現有スタッフは、語学１名、文学１名、文化論１名の３名です。このように多様な角度から中国について研究するのが、本コースの特色の一つであり、全国的に見てもこうした体制を整えている学科・コースは多くありません。

語学の分野では、古代漢語から現代漢語に至る中国語の歴史的な展開に即して研究をしています。音韻学や辞書の研究など、新しい角度からの研究にも意欲的に取り組んでいます。

文学の分野では、古典文学の基本に立ち返って、原典資料を精密に読み解きます。当時の社会的・文化的背景にも目配りしていきます。

文化論の分野では、現代中国（中国・台湾・香港）に重点を置き、映画、演劇などの表象芸術を中心とした研究を行っています。

中国に関心を持つきっかけは、中国語でも、中国の文学、映画でも、また中国の自然でも構いません。どんな入り口から入っても、中国の世界は広い奥行きと刺激的な魅力を持って、みなさんを迎えてくれるはずです。そして本コースのスタッフは、みなさんの中国世界の探求の道案内をつとめることをお約束します。

次にカリキュラムについて申しますと、まず「中国語中国文学概論Ⅰ～Ⅳ」で全体的な知識を身につけ、２、３回生向けの「基礎演習」、「中国語コミュニケーションⅠ～Ⅳ」と３、４回生向けの「演習」で、現代中国語の基礎力、古典文学の読解力を身に着け、辞書などの工具書の使い方、および研究方法を学びます。また２、３回生向けの「特講」で、やや専門的な知識や新しい研究分野についての知識も得られます。そうした基礎の上に、４回生で卒業論文指導を受けつつ、大学での勉強の総決算として、卒業論文の執筆に当たることになります。講義科目でも参考文献などを読んで積極的に知識を身につけることが必要ですが、演習科目ではよりしっかりとした予習が必要です。そうして自分から積極的に学ぶ姿勢が、みなさんの大学生活を有意義にすることは言をまたないでしょう。

なお、日頃出入りすることになる共同研究室の雰囲気ですが、和気藹々としており、決して堅苦しさを感じることはありません。先輩達はみな親切で、いろいろと教えてくれます。また学生、院生、卒業生、教員を中心に大阪市立大学中国学会という学会が組織されており、年２回研究発表会が行われています。この学会では『中国学志』という研究誌を発行していますが、そのレベルは高く、平成 14 年度には「蘆北賞」を受賞しています。

２　スタッフ

先述したように、３人の専任教員から構成されています。その専門は各々次の通りです。

（語学）

大岩本（おおいわもと）　幸次（こうじ）　教　授

中国古代字書の研究。字書を主な資料とする音韻史の研究。

（文学）

高橋（たかはし）　未来（みき）　准 教 授

中国古典文学、とくに唐・宋代の詩文の研究。

（文化論）

張（ちょう）　新民（しんみん）　教　授

現代中国文化論及び映画論研究。

３　コース決定にあたっての心構え

本コースを志望する人は、まず中国語をしっかり学んでおいてください。２回生以降は、特修中国語なども活用してほしいものです。このようにして、読むだけでなく、聴き、話す能力もマスターできるよう心掛けていれば、４年間で中国語がかなり身につきます。

それから、先述したように本コースでは、文献の読解を基礎にして研究を進めてゆきますから、２回生に上ってきたら、伝統文化を理解するために古典語（いわゆる漢文）の力も必要となります。その意味で共通専門科目である「中国古典語Ⅰ、Ⅱ」の履修を勧めます。

４　大 学 院

卒業論文のテーマをもっと深く掘り下げたいと希望する人には、大学院に進む道が開かれています。前期博士課程（修士課程、２年間）と後期博士課程（３年間）の二段階制になっていますが、特別な人だけが進学する敷居の高い世界だと考えないで、どしどし積極的に挑戦してほしいと思います。修士課程くらいは出ておかないと、一人前の大学出とはみなされない時代がもう間もなくやって来るでしょう。自分の研究テーマをもち、基礎学力を備え、勉強に対する意欲のある人なら誰にでも門は開かれています。

大学院を終えた人は、自分の研究をさらに深化させ、後進を教育するためのポスト（大学教員）に就くことができます。私達のコースのこれまでの例を挙げますと、北海道大学、富山大学、大阪府立大学、大谷大学、関西外国語大学、流通科学大学、九州看護福祉大学、北星学園大学などに採用されています。

しかし、大学教員や研究職に就く道は決して平坦ではなく、厳しい競争に耐えなければなりません。他大学出身者に負けない秀れた論文を書かない限り、数少ないポストを得ることはできません。しかし、総体的に言って、私達の研究室の出身者は善戦していますし、学界で注目されている研究者も少なくありません。

５　卒業後の進出分野

かつては高等学校の国語教員となり、漢文や日本古典を担当する人が多かったのですが、近年はその割合が減り、企業や官公庁に就職する人が増えてきました。私達の希望としては、大学で修めた専門を生かす仕事に就いてほしいのですが、新聞社や旅行社や商社に就職して語学力と専門的知識を活用している卒業生がいる反面、それとはほとんど関係のない業種を選ぶ人もいてさまざまです。なお、大学教員については先述しましたが、学部卒業生にも高等学校で中国語を教える道が開かれています。

６　メッセージ

以上、限られた字数で私達のコースの紹介を試みましたが、もっと情報を得たい人は、中国語の時間などに専任教員をつかまえて遠慮なく尋ねてください。また、いつでも文学部棟３階の共同研究室(323)を覗いてみてください。学生、院生でとても賑やかで、皆さんを「熱烈歓迎」してくれるはずです。

英米言語文化コース

１　本コースの研究内容、特色

英米文化、イギリス文学、アメリカ文学、および英語学を研究対象としています。

本コースでは、学生が、これら４つの分野を対象とする学問的研究に必須な基本的知識を修得するとともに、実質的に「世界共通語」として機能している英語そのものの高度な運用能力を身につけることも目的とした教育・指導を行っています。

英米文化 ── イギリスおよびアメリカおよびその他の英語圏にかかわる、さまざまな文化現象や、英語文化の特色を探ることをめざします。英語を母語とする教員が担当し、言語・文化の諸問題を広い文化的コンテクストにおいて考察を加えます。

イギリス文学 ── ヨーロッパ文学の一環をなしていますが、大陸からの異民族の侵略を経験しながらもその地勢が四方を海に囲まれていること、そして秩序と均衡を重んずる国民性によって、独特の複雑な性格をもっています。古来大陸との文化交流を常に行ってきたイギリスは、文学と思想の両面において優れ、特に近世以降は、世界の文学に大きな影響を与えてきました。詩・演劇・小説いずれのジャンルも、他者との対話を重視する伝統に支えられ、異文化理解の能力の養成をめざす皆さんの知的好奇心を十二分に満足させてくれるでしょう。

アメリカ文学 ── アメリカ文学の特色は、さまざまな意味での若さです。初期植民以来わずか 300 余年の歴史しかもたないのに、アメリカの建国理念、ピューリタン的理想をその出発点として実に多様で豊かな文学世界が拓かれてきました。作品においては、「宇宙とオリジナルな関係」（エマソン）をもとうとする「アメリカの夢」が繰り返し描かれています。観念が現実の前に挫折するという過程も、新世界では、深い共感をもって語られています。そして皆さんは、現代最先端の文学作品にいたるまで、あらゆるジャンル・時代のアメリカ文学について学ぶことができます。

英語学 ── 近年の認知科学への関心の高まりとともに、言語学も学際的要素が強くなってきていて、英語学もその影響を受けていると言えます。これにより、より実際に使われている生きた英語を考察しやすくなったと言えます。英語学の教員の研究領域は、英語の類型論的考察を通時的、共時的に行っており、特に学生は英語の意味、機能、構造の多様性、またその歴史的編成過程について認知言語学、文化人類学などを踏まえた学際的アプローチで学ぶことができます。

つぎに、履修モデルを示しておきましょう。

本コースを選んだ学生は、１年次で必修科目の学科共通科目、２・３年次で選択必修、４年次で「卒業論文演習」および「卒業論文」を履修することになります。自由選択科目は自由な年次に履修できます。本コースでは、３回生の初めから、希望する卒論ゼミに所属し、２年間教員から直接卒業論文について指導を受ける体制を取っています。３回生の初めに、ゼミに関するガイダンスを開きます。

ここでは、イギリス演劇に興味を持っているが、同時に他の国々の文化にも興味を持ち、卒業後はマスコミ、ファッション関係に就職したいと思っているＡさんという架空の学生を想定して、履修の一例を紹介してみます。

１回生の前期、後期は、全学共通教育科目もあるので、履修するのは必修の学科共通である「言語文化基礎論Ⅰ、Ⅱ」「言語文化概論Ⅰ、Ⅱ」にならざるを得ません。これらの科目においては、言語文化学科の学問が紹介されますから、ここで自分の志望するコースを決めることができます。コースの選択は１回生の後期に行われます。

２回生でも、全学共通教育の履修がありますから、開講状況、配分などを考えて、このコースの概論的な科目である「英米文化概論」「英米文学史Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」「英語学概論Ⅰ、Ⅱ」、またＡさんの興味のある演劇、文学、美術などに接することのできる文学・文化「演習」、「特講」の中から履修する科目を選び、さらに時間が許せば、英作文や英会話の能力を養成する「英語コミュニケーションⅠ、Ⅱ」を履修します。３回生には、ゼミに所属して専門的な勉強が本格化します。

「卒業論文」で扱う分野（Ａさんならイギリス文学）について、少なくとも概論４単位（Ａさんの場合、「英米文学史Ⅰ、Ⅱ」）と演習科目４単位（「英米文学演習」２つ）を履修することが必須になっているので、この要件は、３回生の前期くらいまでに満たしておきましょう。教職の単位が必要な場合は、Ａさんよりももう少し、

本コースに重点をおいた履修が必要になります。

４回生では、「卒業論文」と授業に加えて就職活動という多忙な日々が続くので、あまり多くの授業を取ると論文に集中できません。論文は、３回生の時点で「卒論ゼミ」に所属して、テーマを決定し、早めに指導の先生に相談し、材料を用意しておきましょう。

２　スタッフ

５人の専任教員の専門分野は、次のとおりです。

（イギリス文学）

田中（たなか）　孝信（たかのぶ）　教　授

18 世紀から現代に至るイギリス小説に見られる階級・ジェンダー・人種といった「他者」を巡る問題を研究しています。それとの関連で、文学テクストと大衆メディアとの関係も研究対象としています。

内丸（うちまる）　公平（こうへい）　准 教 授

シェイクスピアを研究しています。現在は主に、日本の英語英文学教育やポピュラーカルチャーなどで、作品がどのように受容されてきたのかについて調査しています。英語教育史も研究対象としています。

（英米文化）

Ian（イアン） RICHARDS（リチャーズ）　准 教 授

英語圏の文化研究。文化事象を広くとらえ、ことばと文化の関係を研究しています。

（アメリカ文学）

古賀（こが）　哲男（てつお）　准 教 授

詩(うた)とは何か、文学(フィクション)とは何か、という問いをアメリカのロマン派詩人から、今日のポストモダンな作家に至る射程で研究しています。カナダも含む北米の芸術・文化論も研究対象としています。

（英語学）

豊田（とよた）　純一（じゅんいち）　教　授

英語やインド・ヨーロッパ語の多岐にわたる構造や言語現象を学際的な視点から研究しています。近年では、英文法の特異性、中世イギリスにおける方言間の言語接触、死の概念と時制の形成などを主な研究対象にしています。

３　コース決定にあたっての心構え

学生は、英語そのものへの興味と、それをマスターしようとする意欲と根気が要求されます。各分野を勉強する際の留意事項としては、イギリス文化・文学では、１・２回生でヨーロッパの文化や文学を視野に入れながら、イギリス文学あるいは文化全般への飽くことのない探究心を持ち続けること、アメリカ文化・文学では、幅広く今日の世界情勢や学問・芸術・文化の動向に関心を寄せること、英語学では、多様な英語の言語形態に接することにより、日常使われる口語表現、文学作品に代表される文章表現などに興味深いトピックを見い出そうとする意欲が求められます。

４　大 学 院

本コースの大学院は、新制の大学院としては、最も先行する大学院として、昭和 28 年に修士課程、それから２年後の昭和 30 年に博士課程が設置され、多くの研究者を送り出し、学界に少なからぬ貢献をしてきました。大学院における名称は、言語文化学専攻英語英米文学専門分野（専修）です。英文学、アメリカ文学、英語学、英米文化学の研究および演習科目が提供されています。専修生はこれら４分野のなかからテーマを選んで研究を進めることができます。

定員の目安は、前期博士課程（修士課程）が１学年４名、後期博士課程が１学年２名です。後期博士課程修了者の多くは、大学の教員として教育と研究に従事していますが、修士課程修了で高等学校の英語教員として活躍している人もいます。近年、高校教員も、修士課程修了者で専修免許取得者が歓迎される傾向が強まっています。

５　卒業後の進出分野

卒業生はほとんどすべての分野に進出しているので、目標をもった勉強によって自分の希望する分野に進出することが可能です。

６　メッセージ

自分にあった分野の選択や、卒業論文のテーマについては、スタッフが個々に相談と指導に当たります。

各教員がオフィス・アワーを設けていますので、いつでも相談に来てください。

ドイツ語フランス語圏言語文化コース
ドイツ語圏言語文化領域

1　本コースの研究内容、特色

第二次世界大戦の反省から、平和のためのシステムとして構築されたEU（欧州連合）は、いまや巨大経済圏でもありますが、このEUの中心をになうのが、欧州の二大国ドイツとフランスです。本コースでは、この独仏の研究者が協力して「欧州」や「国際文化」に関する科目を提供し、ひろくEU圏やそれを越えた世界について学ぶことを可能としています。もちろん、履修外国語が独語か仏語によって所属する領域では、それぞれ独自の専門を究めることができます。

【ドイツ語圏言語文化領域】

欧州連合（EU）の中核的存在であるドイツは決して遠い国ではありません。関西空港から直行便に乗り12時間程度でミュンヘンに着きます。最近このような有利な条件を生かして、ドイツでの語学講習に参加する学生が増えています。またインターネットを使えば、研究室にいながらにしてドイツ語放送などリアルタイムの情報を手に入れられます。他方、ドイツ・オーストリア・スイスは、いずれも美しい自然と豊かな文化や芸術を持つ国々です。本領域のスタッフは、ドイツの伝統的文化や芸術を学ぶ人にも、現代ドイツに関心を持つ人にも、その関心領域に応じた柔軟な指導を行う体制を整えています。

ドイツ語は英語と同様、西ゲルマン語に属す言語です。同族の言葉でありながら、英語では失われた興味深い言語学的特徴を保持しているのがドイツ語です。英語に加えてドイツ語をマスターすることは、将来どんな分野で活動するにしても、非常に大きな実践的能力として高く評価されるだけでなく、それまでの限られた視野を広く世界に向けて拡大してくれるというすばらしい効果を持っています。文学部でしっかり外国語を学び、ヨーロッパに関する知識を身につけることにより、社会人になる人も研究者を目指す人も、世界に羽ばたける有効な精神的基礎を形成することができるでしょう。

ドイツ語圏言語文化領域では、未知の世界への探求心を持った人を歓迎し、またそのような人を育てています。

授業科目は、大きく分けて次の３分野に設定されています。

①「ドイツ文学」はドイツ語圏の文学作品の研究を行います。たとえば、18世紀では、ゲーテの戯曲『ファウスト』や、シラーの『ヴィルヘルム・テル』、19世紀では、クライストの喜劇『壊れがめ』やホフマンの怪奇幻想小説『砂男』、20世紀に入ると、カフカの『変身』や、トーマス・マンの長編小説『魔の山』、あるいは現代ではミヒャエル・エンデの『モモ』や『果てしない物語』などを例としてあげることができますが、他に数多くの研究対象があります。

②「ドイツ文化」の領域では、ドイツ語圏の演劇、音楽文化、芸術、民話（たとえばグリム童話集）、あるいは自然、社会、歴史、風俗・風習、社会制度、さらにはスポーツなどを扱います。また、ドイツ文化の背景にある、あるいはその根底にある思想（人間観や文化観）も扱います。

③「ドイツ語学」の領域では、ドイツ語の歴史やその言語構造について、専門的に純粋言語学として取り扱うだけでなく、社会言語学的に言語を社会とのかかわりの中でとらえ、研究します。またこの領域では、実践的なドイツ語の習得にも力を入れており、読む・書く・聞く・話す力をバランスよく身につけることを目指しています。特に、ネイティヴの教員によるコミュニケーション能力の開発には力を入れています。

まず、本領域に専攻を決めた諸君が、専門的な学習に向けた基礎力をつけるために、「ドイツ語圏言語文化演習」を開講しています。

専門科目は、文学・文化・語学の３領域のそれぞれに、概論的科目、演習科目、特講科目の３グループの授業が開講されます。このうち概論的科目は、各領域の基礎となる内容ですので、なるべく早い年次に履修することが望まれます。専攻生諸君は、これら３分

野の科目を、バランスよく受講することが重要です。

これら専門科目と平行して、ネイティブ教員担当による「ドイツ語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」「ドイツ語圏ランデスクンデ」が開講され、ドイツ語の実践的な能力を高めてゆくための演習が行われます。

これらの授業の上に立って、最終年次には、担当教員の指導のもとに、各自が関心を持つテーマで卒業論文を書くことになります。

２　スタッフ

（ドイツ文学・文化）

高井（たかい）　絹子（きぬこ）　教　授

20世紀ドイツ語圏文学、とくに戦後文学、女性文学を、社会状況と文学テクストの関係性の観点から研究している。

長谷川（はせがわ）　健一（けんいち）　准 教 授

18・19世紀の文化と文学(「ゲーテと敬虔主義」など)をその歴史的・社会的背景も含め総合的に研究している。

（ドイツ語学・文化）

信國（のぶくに）　萌（もえ）　講　師

ドイツ語学が専門分野で、特に現代ドイツ語の形容詞と構文の統語論的・意味論的関係を、事象の捉え方という視点から研究している。

Simon（ジモン）　OERTLE（エルトレ）　特任准教授

言語学（特に語源学）を主たる研究領域とし、ドイツ語教育の研究ならびにドイツ語圏（特にスイス）と日本の比較文化研究を行っている。

３　コース決定にあたっての心構え

ドイツ語圏言語文化領域は、ヨーロッパに関心がある人やドイツ語に興味を持つ人を歓迎します。大学入学後から、ヨーロッパ、とりわけドイツ・オーストリア・スイスの文学、芸術、文化に親しむように心がけてください。また１回生の時から「ドイツ語」を受講しておいてください。上記スタッフと直接知り合うことができます。

４　大 学 院

ドイツ語圏言語文化領域で学んだ後、引き続き大学院で研究を続けることができます。大学院の正式名称は「文学研究科・言語文化学専攻・ドイツ語フランス語圏言語文化学専修・ドイツ語圏言語文化領域」となります。本領域では、ドイツ語圏の文学、言語、文化、思想を研究することができます。現在の担当教員の専門領域は、「現代文学」「近代文学」「ドイツ語学」「ドイツ文化学」「ドイツ語教育学」ですが、それ以外の領域を対象として研究を行うことも可能です。

「前期博士課程（修士課程）」修了後、さらに３年間の「後期博士課程」を修了し、「博士論文」の審査に通れば「博士（文学）」となります。現在、本専修に在籍する大学院生はそれぞれ関心を抱く研究テーマを選び、専門研究者をめざし研鑽を積んでいます。

５　卒業後の進出分野

専門としてドイツ語を学んだことを直接生かせる分野として、研究者を目指す大学院進学と外国語を使う文化的機関への就職が挙げられます。またドイツ語とは直接結びつかない一般企業へ就職する人も多いですが、大学で複数外国語を学んだ努力は一定の評価を得られることでしょう。卒業生の最近の就職先は、商社、銀行、メーカーなどの一般企業の他に、美術館、都市ホテル、教員、司書、外国語学校、官公庁などがあります。

６　メッセージ

ヨーロッパの北方、「森の国」と呼ばれるドイツには、さまざまな夢想家や思想家が生まれました。そこでは独特の精神文化が形成され、世界に向けて新しいヴィジョンの発信がなされてきました。世界や人間、文化や言葉をどう理解するのか、人間は矛盾に満ちた社会の中でどのように生きるべきかといった問いは、目標を見失いがちな現代の日本人にとって重要な問題ですが、ドイツの文学や文化や言語はその課題と取り組む上での貴重な示唆を与え、われわれを未知の新しい発想へとうながしてくれることでしょう。

ドイツ語フランス語圏言語文化コース

フランス語圏言語文化領域

１　本コースの研究内容、特色

第二次世界大戦の反省から、平和のためのシステムとして構築されたEU（欧州連合）は、いまや巨大経済圏でもありますが、このEUの中心をになうのが、欧州の二大国ドイツとフランスです。本コースでは、この独仏の研究者が協力して「欧州」や「国際文化」に関する科目を提供し、ひろくEU圏やそれを越えた世界について学ぶことを可能としています。もちろん、履修外国語にしたがって所属する「領域」では、それぞれ独自の専門を究めることができます。

【フランス語圏言語文化領域】

あなたは、「フランス」ときいて、何を思い浮かべますか？　エッフェル塔、モナリザ、ジャンヌ・ダルク、ヴィトン、シャネル、ワイン、チーズ、パン、料理、映画、文学、スポーツ……。どれも、ひとびとの憧れをよび、いちどはフランスへ旅してみたいと感じさせるのではないでしょうか？　事実、花の都のパリは世界でもっとも観光客をあつめる都市のひとつですし、日本からの観光客は大のお得意さんでもあります。そのおかげで、有名な観光地では、日本語の案内が出ていたりもしますが、旅行にいった先の言語であいさつくらいできなければ、「イヤな観光客野郎」と思われることはまちがいありません――じっさい、わたしは、英語が世界中で通じると思いこんで英語しか話そうとしない某大国の観光客の接客を終えたフランスの店員さんに「まったくヤツらときたら」と相づちを求められたことがあります……――。

フランス旅行のため――そんな目的で、とりあえずフランス語を学びはじめたなんてひとはたくさんいますし、それもたいせつなことなのです。ですが、フランス語は、フランス以外でも役に立つ言語なのです。

ヨーロッパにおいて、17 世紀までの「国際共通語」はラテン語でした。それが、絶対主義の確立のなかで、いちはやく国家統一・中央集権をなしとげたフランスの威勢と文化発信力の増大とともに、18 世紀にはフランス語が欧州国際語となります。その後、20 世紀初頭までの 200 年ほど、フランス語は現在の英語のような地位にあったわけですが、この間は、現代の欧米社会が成立する過程にあたったため、フランス語の影響は少なからぬものがありました。この歴史と植民地政策のなごりのため、現在でも、フランス語は世界各地に話し手がおり、英語と並んで国連の「作業語」に指定されているのです。また、フランス語を公用語とする地域（カナダ、スイス、ベルギーなど）やその他をあわせた「国際フランコフォニー機構」（88 ヶ国・政体（54 正会員＋7 準会員＋27 オブザーヴァー））も存在し、英語圏の向こうを張ろうとしています。つまり、フランス語はいまなお国際語の地位を失ってはいないといえるでしょう。現在、人口増加傾向にあるアフリカのフランス語圏諸国のおかげで、数十年後には、**フランス語圏話者数は飛躍的に増大する（50 年後には 40 億人）**という予測もあります。

フランス語がペラペラになる――すてきな目標ですし、そんなに難しいわけでもありません。若い頃に留学すれば、半年でペラペラになれます。文学部には、フランス夏季短期研修のほかに、リヨン第３大学、CY セルジー・パリ大学、ル・アーヴルとの交換留学制度がありますから、ペラペラになりたいひとは、ぜひ長期留学を目指してください。けれども、ことばを学ぶということは、そのことばを用いるひとびとや地域の歴史や文化を学ぶということでもあります。当然、フランス語圏言語文化領域では、そのような面の教育・研究にも力を入れています。

この卒論一覧をご覧ください。（http://yakitori.lit.osaka-cu.ac.jp/user/frn/?page_id=50）先輩たちは、**文学、言語学にとどまらず、歴史、美術、音楽、建築、社会現象など幅広いジャンルをテーマとして卒業**していったことがわかるでしょう。つまり、この領域に学ぶということは、「フランス語」という幹にさまざまの枝葉をしげらせた一本の樹木となることなのです。もちろん、幹が太ければ、枝葉も立派なものになることはいうまで

もありません。

そうです。この領域は、フランス語力をきたえつつ、フランスを中心とするフランス語圏（西欧、北米、中米、南米、北アフリカ、西アフリカ、オセアニア etc.）のさまざまなことがらを学ぶことで、フランス語圏のエキスパートを育てる場なのです。もちろん、哲学でフランス哲学をやったり、世界史でフランス史をやったり、社会学でフランス社会学をやったり、表現文化でフランス映画をやったりすることは可能でしょう。ですが、それらのコースでは、フランス語とフランス語圏の知識についてトータルに学ぶことはできません。そして、フランス語圏について――もちろんドイツ語圏についても――学ぶことは、アメリカ中心に偏った「グローバル・スタンダード」を相対化し、あらたに「世界」を考えるための視点／支点を手に入れることになるのです。

そして、そんなふうに「世界」を見られるようになったあなたは、きっとフランス語圏に行きたくてたまらなくなるにちがいありません。一度目は観光で。二度目は勉強で。現地でふれたひとびとや文物は、きっとあなたをもう一度誘惑するでしょう。そして三度目は暮らしに……。

いやまったく、人生、どんなことがあるか、わかったもんじゃありません。そしてまた、人生はなんでもアリなのです。だってあなたは、いま、無限の可能性を手にしているのですから。

２　スタッフ

福島 祥行（ふくしま よしゆき）　教　授

言語学・相互行為分析（コミュニケーションや会話分析や文法の研究）、言語学習（協働学習、ポートフォリオ、CALLなど）、コミュニティ・社会的レジリエンス創発（協働する現場の研究）が専門ですが、現代フランス語圏にまつわる社会や文化についても指導をおこなっています。

白田 由樹（しらた ゆき）　教　授

ジェンダー表象論、メディア論の観点から、とくに、フランスの女優サラ・ベルナールや、ベルギーにおけるアール・ヌーヴォー運動など、19世紀末のフランス語圏文化の研究をしています。

原野 葉子（はらの ようこ）　准 教 授

専門は20世紀仏文学。ボリス・ヴィアンを中心に、レーモン・クノーや潜在文学工房、超前衛的研究集団コレージュ・ド・パタフィジック等を研究しています。もっぱら（空想）科学と文学の関係について思考中。

Julien MENANT（ジュリアン ムナン）　特任講師

フランス語の第1言語話者としてフランス会話、フランス語圏文化などを教えますが、フランス語教育の専門家でもあり、とくにゲームを用いたフランス語教育法の研究などをおこなっています。

３　コース決定にあたっての心構え

よく質問される事柄について、あらかじめお答えしておきましょう。

Q：１回生のフランス語の成績が優秀でないと、ついてゆけませんか？

A：大丈夫です。２回生以上ではフランス語に接する時間が増えますので、積極的に授業に参加していれば、いつの間にか語学力が身についてくるようになります――仏語力のみならず、英語力もアップします。

Q：語学検定の資格はありますか？

A：実用フランス語技能検定試験（仏検）があります。１級取得者にプロの通訳なみの実力が必要ですが、３年次には２級合格が可能です。また、DELF、DALF、TCFというフランス政府認定の試験を大阪で受験することもできます。

Q：留学は可能ですか？

A：フランス第２の都市圏にあるリヨン第３大学と、パリ郊外のCYセルジー・パリ大学、ル・アーヴル大学との間に交換留学制度があり、毎年５月に選考をおこなっています。また、業者に手配してもらい留学する学生もいます。なお、毎年９月のトゥール研修、11～12月のル・アーヴル研修にも仏文の学生が参加しています。

４　大 学 院

前期（２年）、後期（３年）の博士課程が設けられています。修了者の多くは教育・研究職に就いていますが、民間の会社員になる人も増えてきました。

５　卒業後の進出分野

これまで、マスコミ、教職、商社、デパート、金融、アパレル、料理関係、エステ関係、官公庁、IT関連、メーカーなど、多方面にわたっています。また、就職先で、フランス語関係の職をまかされることもあるようです。直接フランス語に関係ある職種は少ないですが、鞄メーカーや化粧品原材料製造メーカー、フランス企業のグループ企業など、そのような職も存在します。

表現文化コース

１　本コースの研究内容、特色

表現文化コースは、現代社会の文化現象を「表現」という切り口から考察・研究するコースです。表現文化コースが提供するプログラムの特色は、現代社会の多様な文化現象における「表現」あるいは「表現する行為」に注目し、それを「表現の歴史」、「表現が生み出される場としての社会」、そして「表現に形を与えるメディア」の三つの観点から多面的に考察する点にあります。

「表現」に関わる文化現象は多様です。人間のものの見方や感じ方の「表現」の代表例は、文学、美術、演劇、写真、映画などの芸術でしょう。しかし、「表現」に含まれるのはそれだけではありません。個人や社会の感性や価値観を表現するファッションや化粧、ポピュラー音楽やマンガ、広告やメディアイベント、さらには、現在多くの人々によって楽しまれている多彩な創作活動（二次創作や同人活動）もまた、そこには含まれます。表現文化コースが対象とする「表現文化」とは、こうした多様な現象を指しています。

表現文化コースでは、そうした「表現文化」を、「歴史」、「社会」、「メディア」という三つの観点から多面的に考察します。

まず「歴史」ですが、あらゆる表現は、突然、無から生まれるわけではありません。すべての表現には、その形式やジャンルの歴史があります。たとえば、あらゆる物語には祖型があり、最新の小説やマンガの物語もまた、しばしば長い歴史的伝統からその力を得ているのです。そして、現代の演劇作品もまた、日本・西洋の長い伝統と無関係ではありません。したがって、表現文化コースでは、同時代の表現だけでなく、その歴史にも注意を払います。

つぎに「社会」ですが、あらゆる表現は、純粋に個人的なものではありません。それはその表現が生み出され受容される社会の構造と関係しています。ある映画が大ヒットするとき、それは個人的な好みの集積ではなく、ある特定の社会状況のもとで人々の好みが構造化されていることを意味します。表現文化コースではしたがって、表現を、それを生み出し、それが受容される社会と関係づけて考察します。

最後に「メディア」ですが、私たちが出会う表現はすべてある特定のメディアによって形を与えられています。そのさい、メディアは無色透明な容れ物ではなく、それ自体の可能性と限界を持っています。たとえば、動く映像を映画館で見るのか、居間のテレビで見るのか、インターネット上のコメント機能付き動画共有サイトで見るのかによって、私たちと映像との関係は大きく異なったものになるのです。表現文化コースは、こうした表現とメディアの関係にも注目します。

最後にもう一つコースの特色を付け加えるとすれば、上記のような考察・研究を行っていくうえで、コンピュータを始めとする情報・メディア機器を積極的に活用していくことが挙げられます。視聴覚メディアやソフトウェアを用いたプレゼンテーションは、表現文化コースで習得できる基本的スキルのひとつです。

このように、表現文化コースではきわめて多様な対象・テーマが授業で扱われます。したがって、本コースを志望する学生には、次の二つ事柄がとりわけ要求されます。ひとつは、未知の文化現象への幅広い旺盛な好奇心であり、もうひとつは、多様な文化現象の中から自分が取り組みたい対象とテーマを主体的に探り当てていく積極性と自主性です。

本コースでは、教員スタッフがカバーしていない対象領域については、非常勤の先生を招くことで多彩なテーマに取り組めるよう配慮していますが、文化圏やテーマに関して本コースで研究が続けられるかどうか不安な人は、遠慮なくスタッフに相談してください。

［授業］　本コース独自の授業は、選択必修科目とされている科目群で提供され、2回生から4回生のあいだに履修します。その中で「表現文化論基礎演習」は、表現文化コースに進学した2回生のための少人数のゼミ形式の授業です。この科目では映画、マンガ、写真、小説といった様々なジャンルの作品について、共同で作品を分析し、自らの考察を文章にまとめます。文献の読み方や資料の扱い方、ディスカッションの仕方など、学問的なコミュニケーション・スキルの習得もこの科目の目的のひとつです。

本コースの五本の柱となっているのが、「文化理論」「表象文化論」「ポピュラー文化論」「比較表現論」「テクスト文化論」で、それぞれ講義科目として提供されています。

さらにこれら講義科目に対応する演習の授業として、「表象文化論演習」「ポピュラー文化論演習」「比較表

現論演習」「テクスト文化論演習」「文化理論演習」が用意されています。3、4回生に提供される「表現文化特殊演習Ⅰ」では、特定のテーマについて発表とディスカッションを行いますが、専門の異なる教員が共同で授業を行うコーチ―ティングの方法を導入することにより、多様な視点から問題を把握、議論することを通して新たな答えを導き出す能力を養います。また、自由選択科目の「表現文化特論」「表象文化特論」では、演劇やアニメーションなど特定のテーマに関する講義を行います。

4回生では、各自の関心に基づいて「卒業論文」を書くことに集中することになります。

2　スタッフ

野末（のずえ）　紀之（のりゆき）　教　授

身体と芸術表現、19 世紀末文化。

高島（たかしま）　葉子（ようこ）　教　授

民間説話・民間伝承、比較文化論、物語の再話と再創造に関する研究。

増田（ますだ）　聡（さとし）　教　授

音楽学、メディア論、大衆文化論。

海老根（えびね）　剛（たけし）　准 教 授

表象文化論、ドイツ文化研究。

江村（えむら）　公（きみ）　特任准教授

近・現代芸術論、ロシア文化研究。

3　コース決定にあたっての心構え

芸術・文化現象に対して強い関心を持つとともに、理論的な問題意識が要求されます。つまり、さまざまな作品（文学・音楽・美術・映画…）やサブカルチャー的な現象にたくさんふれ、関心を持つことはもちろん必要ですが、単にそれを「おもしろい」と享受している段階にとどまっているのでは研究になりません。そのためには、理論的視点から対象に問いかける訓練が必要になります。

外国語の能力もきわめて重要です。英語はもちろんのこと、少なくとももう一つの言語に習熟することを念頭におき、１回生のうちに新修外国語の基礎を十分に習得してください。

海外語学研修や留学生との交流も、視野を広げるチャンスです。表現文化では、毎年、留学生もともに学んでいます。

4　大学院

現代社会の幅広い文化現象を多面的な視点から対象化し分析することのできる、柔軟な思考力を持った意欲的な研究者の育成を目指しています。

5　卒業後の進出分野

さまざまな芸術分野・文化現象の考察・研究に取り組んだことを評価され、多種多様な分野へ進出しています。就職先は一般企業が多いですが、業種は、美術館、広告、映像制作、映画プロダクション、商社、金融、保険、製造、百貨店、旅行業、印刷、IT関連など幅広い分野に及んでいます。公務員になる人も毎年数名います。教職免許を取得するためには、他コースの専門科目の履修が必要ですが、免許を取得して教員を目ざす学生もいます。また、さらに研究を深めるため、大学院に進学する人も少なくありません。

6　メッセージ

表現文化コースでは自分の「好きなこと」を研究できるように思えるかもしれません。確かに研究することはできますが、「好きなこと」を研究することほど難しいことはありません。そのためには、自分を厳しく相対化する視点の獲得が不可欠だからです。表現文化コースでは、「文化」とその「表現」に関わる問題に、旺盛な好奇心と主体性をもって取り組む意欲のある学生を歓迎します。そのような人にとって、表現文化コースは、知的刺激に満ちた３年間を過ごせる場所となることでしょう。１回生の間に何度かガイダンスがありますが、それ以外にも進路のことなどで相談があれば、いつでも表現文化学共同研究室（法学部棟５階508室）までおいでください。またメールでの相談も随時受け付けています。

ウェブサイト:
https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/academics/faculty/cultural-management/arts
メール: culture@lit.osaka-cu.ac.jp

アジア文化コース

１　本コースの研究内容、特色

アジア文化コースは、〈アジア〉の様々な文化現象や文化の歴史を比較文化や文化人類学の立場から研究する総合的なコースです。アジアに対する深い共感と専門的な知識をはぐくみ、地域の特性に応じた文化の活用を考えます。

心豊かなくらしのために、アジアの多彩な文化を生活に取り入れる･･･、アジアの経験をもとに、人々の共生に資するような文化を構築する･･･など、コースの守備範囲は無限に拡がっています。文化の身近な利用から経済的な活用まで、あるいは文化についての哲学的な思索から実践的な応用まで、〈アジア文化〉のさまざまな〈活用〉を考えてみましょう。

アジアは、伝統的に文化、言語、宗教などにおいて多様性に富んだ地域です。近年のグローバルな文化交流や人口移動によって、その生活様式も大きな変容を遂げつつあります。このような文化状況のなかで、日本を含めたアジア諸社会では、文化の対立を克服し、多様性を尊重して人々の共生を実現することが求められています。そのためには、アジアの現状を深く知り、課題と方策を考える必要があります。

アジアを考えるとき、日本とのかかわりも見逃すことはできません。古代から近現代に至るまで、日本はアジア諸国との文化的関係や交渉が密接でした。国家レベル、あるいは民間レベルで交流やまなざしはどのような変化があったのでしょうか。日本のアジア学はそれをどのようにとらえてきたのでしょうか。そのような変遷を探ってみることは現代日本社会を捉えることと表裏一体なのです。

アジア研究に対するアプローチは、近年多様化の一途を辿っています。問題意識にそって、どのような探究方法があるのか、長年の研究の蓄積と周辺領域の研究の基本的知識をみまわしながら、研究をすすめる必要があります。本コースでは、「地域」「共生」「比較」をキーワードとしながら、既存の枠にとらわれることなく、独創的な研究を目指します。

文学、思想史、歴史学等、主として文献資料や文学作品をもとに研究を進める専門領域の立場から、そして、文化人類学、社会学、民俗学等の、主としてフィールド調査をもとに研究を進める専門領域の立場から、アジア文化の歴史と現状、構造と機能、アジア地域における文化の実践的活用例などについて検討していきます。歴史ある本学の学術情報総合センターには多くのアジア関係の歴史文献や文化情報、経済・法の資料が集積しています。皆さんの革新的な視点と既存の枠組みを超えた研究方法で活用し再構築されるのを待っています。

カリキュラム登録に際しては、いくつか注意点があります。必修科目はすべて履修しなければなりません。選択必修科目は、アジア文化コースの科目を中心に、文化構想学科の他コース提供の選択必修科目を含めて、必要単位数をそろえてください。1回生の「文化構想学概論Ⅰ・Ⅱ」は文化構想学科の学問に対する基本的な考え方と各コースの学問の基本的な手法を学ぶことを目的としています。2回生では「文化構想学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」に加えて アジア文化コースの選択必修科目を履修してください。アジアの文化や歴史についての学問的課題について考え、その基礎となる方法を学びます。3回生では専門知識を高め、演習授業で自らの関心と課題を明確にします。4回生では大学生活の集大成としての卒業論文の作成に向けて取り組みます。必修単位を履修することが第一ですが、その他のコースの授業も自分の興味や関心に応じて幅広く受講し、自分の専門性・学際性を高めて欲しいと思います。

大学での学習とは、講義や授業の場で教えられるものだけではありません。さまざまな経験と体験を積み、比較分析の視点を意識して友人と語り合い、感受性豊かに街を歩き、自主的に学ぼうとする心構えをもってください。世界のニュースや雑誌記事を積極的に入手し、現代文化の把握などにも積極的に取り組んで皆さん独自のアジア認識を構築できるよう、つとめてみましょう。

２　スタッフ

松浦（まつうら）　恒雄（つねお）　教　授

中華圏の演劇がどのように形成されているのかを、歴史的側面だけでなく、現代社会とのかかわりの中で明らかにしようとしています。これまでは主に民国期のメディアとの関連性に重点を置いてきましたが、今後は、21世紀に新たな局面を迎えつつある中国演劇の新しい姿にもスポットを当ててゆきたいと思っています。

多和田（たわだ）　裕司（ひろし）　教　授

文化人類学を専門にしています。東南アジア、とくにマレーシアをフィールドとして、現代社会における文化や宗教のありかた、多文化共生社会の課題など、文化を応用的観点からとらえたいと思っています。

堀（ほり）　まどか　教 授

日本文化研究や日本語文学研究を国際的な観点からおこなう研究をしています。比較の視点をもって、日本をアジアのなかの地方として把握し、文芸文化の交渉の歴史や実態について研究したいと思っています。

宋（そん）　恵媛（へうぉん）　准 教 授

朝鮮半島に住む人々、そして日本を含む世界各地に散らばるコリアンディアスポラたちの文化を研究しています。声を奪われてきた周縁の人々の言葉、文学、歴史を新たに掘り起こすことを目指しています。

３　コース決定にあたっての心構え

日本、中国、香港、台湾、朝鮮半島などを指す「東アジア」を中心にして、「東南アジア」、「南アジア」「西アジア」も含めて、広い範囲のアジアを対象にできます。また、アジア地域は、英、仏、蘭、露、米などの大国や大言語とのあいだで、多彩な文化と歴史をつくりあげてきました。アジアをテーマに、一つの地域や国家、言語や階層にとらわれることなく、従来のジャンルを超越するような独創的な研究を切り拓くことが期待されています。

文化の多様性と共通性を考えることは、じつは容易なことではありません。文化が、各民族・各国民の思考様式や生活様式から創出されるところの有形無形の産物、組織、機構、伝統の一切を包括する多様な概念だからです。それぞれの文化事象には、伝承、伝播、創造があり、その歴史をたどる必要があります。そして、その歴史が今の皆さんの立ち位置となり、未来につながっているのです。

４　大学院

2020年度から、アジア文化学専修として前期博士課程（修士課程）、後期博士課程が開設されました。本コースの大学院開設の前には「アジア都市文化学」の大学院がありました。諸先輩方は、大学の教員、博物館学芸員など、その能力と専門を活かして活躍しています。

５　卒業後の進出分野

「アジア文化コース」で身につけた、目的意識、問題意識を実社会に活かして、また読解力や文章力、考察力を発揮して幅広い分野で活躍することが期待されています。

６　メッセージ

アジアに関心がある皆さんを歓迎します。アジアの料理が好き、アジア映画をよく見る、アジアに旅行に行ったことがある・・・等々、アジアへの関心はどのようなものでも構いません。アジア文化コースの教員が、皆さんが抱いている個人的な思いを、アカデミズムの枠組みのなかであらためてとらえ直すことができるように支援します。

文化の活用といっても難しく考える必要はありません。私たちの身の回りを見渡しても、抹茶がアイスクリームやケーキに取り入れられたり、アジアの伝統工芸が素敵なインテリアとして活用されたり、あるいは、イスラームの「ハラール・フード」が新しいビジネス分野として注目されたりなど、文化活用の事例は数限りなく見ることができます。

日々「旅」をするような気持ちで、新しくなにかを発見する気持ちで、アジア文化コースで学ぶ時間を一緒に楽しみましょう。

文化資源コース

１　本コースの研究内容、特色

文化資源コースは、2019年度から始まった全く新しいコースで、コース名となっている「文化資源学」という領域自体も、21世紀に入ってから本格的に注目がなされるようになった学問です。「資源」というと、皆さんは石油や鉄鉱石や森林（天然資源）、あるいは古新聞やペットボトル（資源ゴミ）などを連想するかもしれません。すなわち資源とは、人々の生活や社会活動をより豊かにするために有効に活用することができるものを指します。本コースでは、あらゆる文化的な所産を「文化資源」としてその「価値」を見出し、文化を社会の中で積極的に活用するための理論や実践について学びます。

文化の活用というと、国宝や重要文化財、文化遺産の保存や継承といったイメージが先行しがちで、実際に他大学の類似の名称の学科やコースでは、そうした分野について学ぶところが多いですが、本コースでは、歴史的な文化はもちろん、現在進行形で生み出されていく最新の文化に至るまで、さらに絵画や建物・街並みといった「モノ」としての文化のみならず、演劇の上演や、イベント、観光ツアー、アートワークショップなどの「コト」としての文化にも着目します。

主要な専門科目においては、アート（芸術、特に美術・音楽・演劇）とツーリズム（観光）に関連する文化資源のあり方を捉えること、及び文化の活用のための企画や実践について扱います。アートといっても、いわゆるファインアート（著名な芸術家の創作した絵画や彫刻、音楽）だけではなく、ガムの包み紙から、即興的にその場で紡ぎ出される音楽に至るまで、その活用の可能性を追求します。

２～３年次に入ると、講義科目と演習・実習科目が開講します。「文化資源基礎論」では、文化資源とは何か、その歴史的な展開と現在について、関連分野である美術史や歴史学、文化財科学等の知見を踏まえながら学びます。「観光文化論」では、具体的に文化資源が活用される現場としての観光のあり方について、食文化探求の旅やエコツアー、アニメ聖地巡礼など、新たな文化体験のあり方を中心に学びます。「文化デザイン論」では、文化を生み出す場と文化を用いて個人や社会に影響を与える場をいかに創りだすことができるのかについて、音楽ワークショップの実践を中心に学びます。「視覚芸術文化論」では絵画や彫刻、漫画、グラフィックアート、アニメーションなどの視覚芸術の展開を学び、「舞台芸術文化論」では、西洋と日本における演劇の歴史と表現上の特色について学びます。「文化資源特論Ⅰ」では、隔年で開講される観光メディアと国際観光に関する事象をそれぞれ学びます。「文化資源特論Ⅱ」では、映画プロデューサー、映画監督としての顔を持つ講師をお招きし、自ら立ち上げた映画祭や国際観光映像祭などのイベント実務の観点から、文化資源としての映像コンテンツについて学びます。「文化資源特論Ⅲ」では、デジタルゲームを中心とするポピュラー文化産業を研究対象とする講師をお招きし、時代の最先端に位置する文化資源（マンガ、アニメ、デジタルゲーム）の社会的運用のあり方を学びます。「文化資源特別演習」では、発表と討論を通じて、学問的に文化資源を捉えるためのトレーニングを行ないます。

文化資源コースの大きな特徴は、座学による学びだけでなく、アートイベントの企画や観光メディアの制作、まちづくりや地域再生に関する現地フィールドワーク、音楽ワークショップの企画・参画、美術館などへのインターンシップ的な視察などの実践的な取り組みに関わることを通じて、文化資源の力＝文化力を引き出すためのセンス（感性）とメチエ（技能）を体験的に養うことにあります。これらは前期に演習科目として、後期に実習科目として開講されますが、文化資源コースの皆さんは、前後期を通して履修することを基本としています。

「視覚文化資源論演習・実習」では、文化資源研究の視点と方法に関するトレーニングの後、それらを社会で活用するためのプロジェクトを実施します。「地域文化資源論演習・実習」では、観光学やまちづくりに関する文献の購読を行なった上で、ツアーや観光まちづくりのプランを企画し、学生コンクールに出展したり、地域づくりの現場に赴き、現地調査を行なった上で、地域への提言を行なったりします。「音楽文化資源論演習・実習」では、コミュニティアートの形態や手法を学んだ上で、アートプロジェクトを企画・立案したり、複数の多様な立場の人々が参加する音楽ワークショップを体験したりします。「舞台文化資源論演習・実習」では、演劇創作の手順や方法について学んだ上で、小規模な劇を制作・上演し、ふりかえりを行ないます。これらの科目は、参加学生のイニシアティブに基づいて行なわれるものがほとんどです。そのため、主体的に社会と関わり、その成果を得ようとする意欲を

有することが前提となります。

4年次には、これまでの学びの集大成として、自らテーマを選定した上で、卒業論文の執筆を行ないます。

2　スタッフ

小田中（おだなか）　章浩（あきひろ）　教　授

表象文化論、特にフランス演劇・西洋演劇に関する比較演劇史的な研究、演劇的な表現の特色に関する考察を中心に研究を行なっています。「舞台芸術文化論」「舞台文化資源論演習」などの科目を担当します。

菅原（すがわら）　真弓（まゆみ）　教　授

日本美術史、特に近世・近代の美術史、文化資源学、博物館学を中心に研究を行なっています。大学の教員になる前は、学芸員として美術館に勤めていました。「文化資源基礎論」「視覚文化資源論演習」などの科目を担当します。

天野（あまの）　景太（けいた）　准 教 授

観光学、特に都市における観光、現代観光の様態、メディアと観光行動の関係などを、社会学・文化論的な視点から解読する研究を中心に行なっています。「観光文化論」「地域文化資源論演習」などの科目を担当します。

沼田（ぬまた）　里衣（りい）　准 教 授

臨床音楽学、特に音楽療法や即興音楽の可能性について研究を行なっています。神戸を中心に「おとあそび工房」など、音楽を題材としたワークショップを企画・実践中です。「文化デザイン論」「音楽文化資源論演習」などの科目を担当します。

3　コース決定にあたっての心構え

第一に、さまざまな文化・社会現象に対する好奇心を持って欲しいということです。文化資源を研究するためには、その対象である文化が創出されるプロセスについて深く関心を抱いてください。そのため、文学・歴史学・地理学・社会学・表現文化・アジア文化など文学部の他のコースの科目や、他学部の関連科目も積極的に履修することが望まれます。

第二に、受け身の姿勢ではなく、積極的にプロジェクト等に参画し、実社会において何かを成し遂げ、そして自らも成長を果たそうとすることへの意欲と行動力が求められます。

4　大学院

文化資源に関連する理論と実践について、さらに深く研究しようという人は、大学院への進学をおすすめします。修士論文・さらには博士論文の執筆を通じて、より理論的・体系的に文化資源学（あるいは関連する美術史学、観光学など）を追求できます。また、専修分野の性格上、留学生や実務経験の豊富な社会人の大学院生も多く在学しています。こうした文化資源に関する実務家を含む多様な人々との交流のなかでの鍛錬を、是非経験してください。

5　卒業後の進出分野

本コースの学びが直接的に関連する職種は、博物館・美術館の学芸員、イベンター・メディアプロデューサー・出版社や放送局といったメディア業界、旅行会社や鉄道・航空会社・通訳ガイドといった旅行業界などが想定されます。実際に、スタッフが過去に指導した卒業生には、そうした進路に進んだ人も多いです。しかし、文化資源コースでの学びを通じて得られる力は、社会における実践力に直結しています。文化に価値を見出す想像力、プロジェクトの企画や実施を通じて鍛えられるチームワーク力やプロデュース力は、どんな職種でも求められる力です。そのため、商社や金融、製造などの一般企業、国家・地方公務員から、教員、大学院進学に至るまで、幅広い進路への夢をサポートします。

6　メッセージ

第一に、前述のように文化資源コースが対象とする「文化」は、非常に幅広いです。スタッフが過去に指導した卒業論文のテーマも、演劇論や美術史、観光に関連するテーマのみならず、クラブイベント、プロスポーツチーム、音楽フェス、食文化の国際比較、ゆるキャラ、恋愛論、幸福論、デジタルゲームの作品分析、現代ギャルファッション、お笑いコントに至るまで、多種多様です。自らが打ち込むと決めたテーマについて、真剣に「ガクモン」することへの意欲を持った皆さんを歓迎しています。

第二に、文化資源学という領域、および文化資源コースは、まだまだ未開拓な新しいフロンティアです。そこに降り立ち、教員とともに切磋琢磨しながらパイオニアたろうとするチャレンジングな精神をもった皆さんが、本コースを選択されることを期待しています。

大学院案内

将来、研究職をめざす人、あるいは文学部で学んだ専門分野を活かした職種につくことを希望する人、それぞれのコースで専門の勉強に取り組むなかで研究を続けたいと思った人は、大学院―大阪市立大学文学研究科に進学することを積極的に考えてほしい。

大学院には２年間の前期博士課程（いわゆる修士課程）と、３年間の後期博士課程があり、多くの先輩が大学院に進んで勉強を続けている。また、他大学を卒業し、大阪市立大学文学研究科で学ぶために、大学院に入学してくる大学院生も少なくない。

文学研究科には、哲学歴史学専攻、人間行動学専攻、言語文化学専攻、文化構想学専攻という四つの専攻があり、それぞれの以下のような専門分野（専修）に分かれている。

哲学歴史学専攻
哲学専修 ／ 日本史学専修 ／ 東洋史学専修 ／ 西洋史学専修
人間行動学専攻
社会学専修 ／ 心理学専修 ／ 教育学専修 ／ 地理学専修
言語文化学専攻
国語国文学専修 ／ 中国語中国文学専修 ／ 英語英米文学専修
ドイツ語フランス語圏言語文化学専修 ／ 言語応用学専修
文化構想学専攻
表現文化学専修 ／ アジア文化学専修 ／ 文化資源学専修

大阪市立大学大学院文学研究科で学び、さまざまな研究職や専門的な職種、あるいは官公庁や一般企業に就職し活躍している人材は多い。かつては、大学院へ進学する人は多くはなかったが、現在はそうではない。研究職をめざすかどうかは、博士後期課程へ進学するかどうかが岐路になっており、前期博士課程の２年間の専門的な研究をへて就職する人も増えている。誰もが大学を卒業する時代になり、大学院修了者は、研究という創造的な営みの訓練を積んだ人材として期待される場合も少なくない。

２年次生になり、各コースで専門科目の履修が始まると、大学院生と接する機会も増え、専門分野に関わることだけでなく、さまざまなアドバイスを受けることもある。大学院があり、大学院生という先輩がいることが、文学部で学ぶみなさんにも大きな意味をもつ。大学という研究機関は、教員、大学院生、そして学部生という、同じ専門分野に関心をもつ者が集まり、研究活動をおこなう共同体であると言うこともできる。互いに刺激を受けながら、それぞれが研究を進めることが大きな活力となり、また個々人の学修・研究の発展にもなる。

文学部で４年間学ぶなかで、みなさんは卒業後の進路について考えることになるが、大学院で勉強を続けることもひとつの選択肢として視野に入れてほしい。大阪市立大学文学研究科では、みなさんの中から、大学院へ進学し、より専門的な研究活動の仲間に加わろうという積極的な人材が現れることを大いに期待している。

科目履修の手引き

Ⅰ　文学部で学ぶみなさんへ

具体的な科目履修の方法を説明する前に、大学の授業のあり方、卒業に必要な条件、専門的に学ぶための学科・コースへの分属、４年間の学修の流れなど、まず概要を示しておく。

１．大学の授業と単位

大学では、開講されている科目のなかから、それぞれが自分で受講する科目を選択し履修する。その際、履修すべき科目にも大きな区分や種別があり、それぞれに必要な単位数が定められているので、それらを満たすように科目を選択する必要がある。

（１）学　位

大阪市立大学文学部の学生は、卒業論文を含めて下記（２）で示す単位数を修得しなければならない。これを満たした者は、卒業を認定され「大阪市立大学学士（文学）」の学位が授与される（「履修規程」第14条）。

（２）文学部を卒業するための単位数

文学部の学生は、以下の単位を修得しなければならない。また第３年次に編入した学生は、専門教育科目92単位以上を修得しなければならない（「履修規程」第４条）。

全学共通科目				文学部専門教育科目		
総合教育科目 または 基礎教育科目	外国語 科　目	健康･スポーツ 科学科目	総合教育科目 または 外国語科目	必修科目	選択必修科目	自由選択科目
16単位	12単位	３単位	８単位	22単位	30単位	40単位
39単位以上				92単位以上		
131単位以上						

全学共通科目の履修、専門教育科目の履修については、**「Ⅱ　全学共通科目の履修」「Ⅲ　専門教育科目の履修」**をよく読むこと。

（３）資格取得のための科目

大阪市立大学文学部で取得可能な資格免許は、教育職員免許および博物館学芸員となる資格である。資格取得を希望する者は、文学部を卒業するための科目履修とは別に、定められた科目を履修し、必要単位を修得しなければならない（「履修規程」第15条・第16条）。

教育職員免許取得を目指す者は**「Ⅸ　教職課程の履修方法」**を、博物館学芸員となる資格の取得を目指す者は**「Ⅹ　博物館学芸員課程の履修方法」**をよく読むこと。

その他所属コースによっては、公認心理師・社会調査士・認定心理士の資格を取得することができる。（公認心理師については**「XI　公認心理師になるために必要な科目の履修方法」**をよく読むこと。）

（４）学期と単位認定

大阪市立大学では、１年間を前期（4月1日～9月30日）と後期（10月１日～3月31日）の２学期（セメスター)に区分している。授業科目の開講区分は、前期・後期・通年（前期＋後期）・集中がある。

授業は原則として週１回、14週で14回おこなわれ、学期末の試験により、100点満点で60点以上を取った者を合格とし、単位を認定する。

（５）既修得単位の認定（大学既卒の学生・編入学生のみなさんへ）

本学または国内の他の大学・短期大学および外国の大学・短期大学において単位を修得し、新たに本学部に入学または第３年次に編入学（学士入学を含む）した者については、当該大学において修得した単位（既修得単位）が本人にとって教育上有益であると認められる場合、その一部を本学において修得した単位とみなすことができる。詳細は**「Ⅴ 単位認定」**で述べる。

（６）科目ナンバー

2016年度より、大阪市立大学で開講されているすべての科目に９桁のアルファベットおよび数字によるナンバーづけ（ナンバリング）が行われている。文学部専門教育科目に関するナンバリングの基本的な考え方は以下の通りである（全学共通科目については『全学共通科目履修案内・授業時間割表』を参照のこと）。なお、教職科目については別の設定になるので注意すること。

① 最初のアルファベット２桁は、科目の提供主体である文学部と学科を意味するLA（哲学歴史学科）・LB（人間行動学科）・LC（言語文化学科）・LE(文化構想学科)とし、学部共通専門教育科目はLXとする。教職に関する科目で全学共通の科目はKK、文学部提供の科目はKLとする。博物館に関する科目はMUとする。

② ３～５桁目のアルファベットはコースを表す。

・哲学歴史学科：哲学＝PHL、日本史＝JPH、世界史＝WHE（東洋史学）WHW（西洋史学）

・人間行動学科：社会学＝SOC、心理学＝PSY、教育学＝EDU、地理学＝GEO

・言語文化学科：国語国文学＝JPN、中国語中国文学＝CHN、英米言語文化＝ENG、ドイツ語圏言語文化領域＝DFD、フランス語圏言語文化領域＝DFF

・文化構想学科：表現文化＝ART、アジア文化＝ASA、文化資源＝CRS

・学科内で共通の基礎科目や学部共通専門教育科目はGENとする。

・教職に関する科目、博物館に関する科目は内容に応じた記号をつける。

③ ６桁目は、学修マップ上の位置づけを、以下の４段階で表示する。

学科基礎科目＝1

１年次から履修可能な専門科目＝２

コースの選択必修科目など２・３年次から履修の科目＝３

４年次に履修可能な専門科目＝4

④ ７桁目は、標準履修年次の最小学年を表す。

⑤ ８～９桁目は科目特定番号であり、科目表の配列順になっている。

（７）OCU指標

OCU指標は、総合大学である大阪市立大学学生の多様な学修成果を「見える化」するために開発されたものである。専門教育科目では、授業を通じて学んだことがA～Fの７つの項目に分けて数値化され、レーダーチャートの形で示される。A～Eは全学部共通、Fは各学部独自の項目である。（全学共通科目のOCU指標の成果配分については『全学共通科目履修案内・授業時間割表』を参照のこと）

この指標を活用することで、①現在の自分自身の学修成果の状況をその都度知ることができるとともに、②将来のキャリア選択・決定を行う上で、伸ばすべき学修成果の項目を見つけ、どのような科目を履修すればよいかを考えるガイドになる。

詳しくは、文学部HP（https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/）＞学部・大学院＞学部・大学院シラバス＞文学部専門OCU指標を参照のこと。

２．文学部の学科・コース

文学部には、哲学歴史学科・人間行動学科・言語文化学科・文化構想学科の４つの学科があり、学科の履修上の区分として、以下の14のコースを置いている（「履修規程」第２条第１項）。

学生は、いずれかのコースに所属し、コースごとに定められたカリキュラムにより専門教育科目を履修する。

（１）各コースの標準所属者数

４つの学科では、それぞれ下のような学生定員を定め（「履修規程」第２条第２項）、またこれにしたがって、各コースの標準所属者数を定めている。

学科・コースの分属は、第１年次終了時に決定し、第２年次からコース所属となる。

コース	哲学	日本史	世界史	社会学	心理学	教育学	地理学	国語国文学	中国語中国文学	英米言語文化	ドイツ語フランス語圏言語文化	表現文化	アジア文化	文化資源
学科別学生定員	32			56				43				24		
標準所属者数	8	10	14	16	16	12	12	13	4	14	12	8	8	8

（２）コースの決定

文学部で専門的に学びたい分野を第１年次の間によく考え、ガイダンスを通して志望コースの内容を確認し、最終的なコースを選択すること。コース決定の手続きは次の通りである。

① 学科・コース決定のためのガイダンス

第１年次の６月上旬と９月下旬に学科・コース決定ガイダンスを開催する。開催日時は事前に掲示するので必ず出席すること。ガイダンスでは、コース決定の手続きや各コースの概要について説明し、志望コースのアンケート調査を行う。なお、コースの選択にあたっては、本冊子もよく読むこと。

② 「学科・コース希望届」の提出

第１年次の12月1日から12月10日まで（曜日の関係で変更することがある）の期間に、「学科・コース希望届」を提出する（「履修規程」第２条第３項）。

③ 選　抜

第１志望の学生が集中し、全員を受け入れることができない学科・コースについては、やむをえない措置として選抜を行う。選抜にもれた学生は、第２志望以下のコースに所属する。

選抜の基準は第１年次前期の成績による。【必修「外国語」５科目（※）】と、【全学共通科目の「総合教育科目」（「基礎教育科目」を含む）および「１回生向け専門科目」の中から３科目（成績の良いもの上位３科目）】の合計点で判定する。なお、英語についてTOEFL・TOEIC・英検による認定単位である場合は、それ以外の、実際に前期に履修した外国語科目の平均点に基づいて判定する。

※留学生が日本語と英語を組み合わせて履修している場合は、４科目の成績を５科目分に換算する。

④ コースの決定と通知

コースへの分属は、12月または１月の教授会の審議を経て決定し、掲示する。

⑤ 第１年次において休学した者の取り扱い

第１年次において休学した者については、休学期間を除いた在学期間が６ヶ月を超えた日以後の直近の12月に、所属コース決定の手続きを行うものとする（所属コース決定手続き期間中に休学中である者は、決定手続きをとることはできない）。なお、分属コースの決まっていない学生は、第１年次として扱われる。

（３）コースの変更

第２年次以降に学科・コースを変更したい者は、「学科・コース変更願」を12月1日から12月10日まで（曜日の関係で変更することがある）の期間に提出しなければならない（『履修規程』第２条第４項）。

転コースができるかどうかは、希望するコースの在籍者数等による。コース分属は入学年度ごとに行うことになっており、第１年次の分属の際に選抜が行われた場合を含め、すでに受け入れ限度数の上限までを受け入れているコースに転コースすることはできない。

第３年次中に学科を変更する転コースが決定した場合は、次の年度は、第３年次として扱う。またコースを変更した場合においても、在学年限は「履修規程」にしたがう（「履修規程」第２条第４項）。

３．卒業までのステップ

各コースでは、専門教育科目に標準履修年次を定めているが、これは、それぞれの分野の専門教育を、基礎的な訓練からより専門性の高いものへ、段階的に身につけられるよう設定したものである。そのため、標準履修年次にしたがって単位を修得していくことが、スムーズに卒業するために重要である。

全学共通科目については、４年間のうちに幅広く学ぶものとしており、標準履修年次を定めてはいない。しかし、第２年次以降、各学科・コースのカリキュラムにもとづく専門教育が本格的に始まるので、全学共通科目については計画的に修得しておくことが望ましい。

（１）第１年次と外国語科目

第１年次における科目履修においては外国語科目が重要である。後述するように、英語であれば前・後期各２科目、新修外国語では前・後期各３科目があり、卒業に必要な外国語科目の基礎となるものを第１年次で履修する必要がある。文学部では進級条件でも外国語科目を重視しているので、第１年次、第２年次で外国語科目の単位を、確実に修得しておくことが望ましい。

これに加えて、第１年次生向けの専門教育科目（必修科目を含む）があるので、第２年次から自分が専門的に学修したいコースを考えて必ず履修すること。

上記の２点を骨格とし、それ以外の時間帯において、全学共通科目に含まれる総合教育科目などを選び、時間割を組み立てること。

なお、第１年次においては、まだコースに分属していないので、文学部の教員を「１回生担任」として置いている。科目履修などに関する相談があれば担任に申し出ること。

（２）第２年次のコース分属

第２年次には全員がコースに分属し、文学部の専門教育科目が本格的に始まる。コースごとに科目の性格や配置が異なるので、年度はじめに各コースで行われるガイダンスに必ず出席し、履修指導を受けること。

（３）第３年次への進級

第３年次に進級するためには、卒業に必要な単位のうち、第２年次までに、以下の単位を修得していなければならない（『履修規程』第６条）。

外国語科目 （２ヶ国語）	総合教育科目（基礎教育科目を含む） ＋ 所属する学科の必修科目
10単位	14単位

※発展的な外国語科目（英語のAdvanced English(AE)、新修外国語の「特修」科目）も「外国語10単位」に含めることができる（ただし２ヶ国語まで）。

※外国人留学生の場合、外国語の科目履修の特例に基づき、日本事情ほかの履修で得た６単位を「外国語10単位」に含めることができる。

この進級条件を満たしていなければ留年となり、標準履修年次が第３年次以上となっている科目は履修できない。

３年目以降の前期終了時までに進級条件を満たす見込みがあり、定期試験期間終了の日までに願い出たうえ、所定の単位を修得した場合は、後期から標準履修３年次の科目を履修することができる。

※第３年次への進級は４月となるため、後期は第２年次の在籍となる。

以上のように、第２年次までの間に一定の単位数を修得していなければ留年となり、４年間で卒業できなくなるので、十分に注意すること。

（４）第４年次の卒業論文作成

上記のように第２年次から第３年次への進級に条件をつけているのは、後半の第３年次・第４年次ではより高度な専門教育となり、また最終学年である第４年次には１年間をかけて卒業論文をまとめる必要があるからである。

なお、就職活動、各種採用試験、大学院進学などの準備は、第３年次ごろから計画的に進め、第４年次の科目履修や卒業論文の作成に支障が出ないようにすること。

４．保険加入について

学部生は学生教育災害傷害保険・付帯賠償責任保険あるいはそれと同等の保険に必ず加入すること。保険に加入していない場合、履修できない科目がある。詳しくは「文学研究科・文学部における保険加入の注意事項」を参照すること。

５．履修例

文学部では、学術憲章に「人材育成の目標」「アドミッション・ポリシー」を掲載している。各履修コースにおいても、この目標やポリシーにそった履修が求められる。

次ページ以降に、文学部卒業後の進路を想定した「履修例」を示す。これを参考にして、１年次においては「１回生担任」の教員、２年次以降は各履修コース（教室）の教員のガイダンスを受けて、適切な履修を心がけること。

【略号について】

各科目名左側の左列の略号

全＝全学共通科目

必＝文学部専門教育・学科必修科目

選＝文学部専門教育・学科選択必修科目

自＝文学部専門教育・自由選択科目（規定単位数を超えた選択必須科目を含む）（他学部科目も含む）

各科目名左側の右列の略号

教＝教職課程関連科目

博＝博物館学芸員課程関連科目

調＝社会調査士関連科目

履修例１：歴史研究者になるために大学院進学を目指すＡさんの場合

	前期	後期
第1年次	全　・Freshman English Ⅰ 全　・Freshman English Ⅱ 全　・AE：Reading 全　・中国語基礎１ 全　・中国語基礎２ 全　・中国語応用１A 全　・大阪の地理 全　・東洋史の見方 全　・現代の歴史 全　・健康運動科学 必　・人間文化基礎論Ⅰ 必　・人間文化概論Ⅰ 自　・文学部基礎演習	全　・Freshman English Ⅲ 全　・Freshman English Ⅳ 全　・AE：Global Understanding Ⅲ 全　・中国語基礎３ 全　・中国語基礎４ 全　・中国語応用２A 全　・体験で知る科学と技術 全　・情報基礎 全　・健康・スポーツ科学実習 必　・人間文化基礎論Ⅱ 必　・人間文化概論Ⅱ 選　・日本史基礎講読Ⅰ
↓		
第2年次	全　・Sophomore English Ⅰ 全　・人間と居住環境 全　・現代社会と大学 全　・ジェンダーと現代社会Ⅰ 全　・西洋史の見方 選　・史学概論 選　・日本史基礎講読Ⅱ 選　・日本史講読Ⅲ 選博・日本史通論Ⅰ 選　・日本史講読Ⅰ 自　・哲学史通論Ⅰ 自　・比較文化交流論Ⅰ（ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ）（集中） 自博・文化人類学 自博・生涯学習概論（集中）	全　・Sophomore English Ⅱ 全　・AE：Global Understanding　Ⅰ 全　・ことばの歴史 全　・都市的世界の社会学 全　・ジェンダーと現代社会Ⅱ 全　・地球の科学 選　・日本史講読Ⅳ 選博・日本史通論Ⅱ 選博・考古学通論 選　・日本史講読Ⅱ 自　・哲学概論Ⅱ 自博・美術史通論 自博・博物館教育論 自他・建築史Ⅰ（工）
↓		
第3年次	全　・エスニック・スタディ（演習） 選　・日本史演習Ⅰ 選　・日本史演習Ⅲ 自　・世界史基礎講読 自　・東洋史基礎講読 自　・西洋史通論 自　・日本史特講Ⅰ 自　・哲学概論Ⅰ 自　・社会学概論Ⅰ 自　・宗教学概論Ⅰ 自博・博物館経営論 自博・民俗学 自　・上方文化講座（集中） 自　・国際都市文化論Ⅱ（ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ）（集中） 自他・社会思想史（経）	全　・現代社会と大学（演習） 選　・日本史演習Ⅱ 選　・考古学演習 自　・日本史特講Ⅱ 自　・日本史特講Ⅲ 自　・考古学実習 自　・西洋史基礎講読 自　・世界史通論 自　・社会学概論Ⅱ 自博・博物館資料論 自博・博物館情報・メディア論 自博・博物館資料保存論 自博・博物館展示論 自博・地図学 自他・西洋経済史（経）
↓		
第4年次	全　・AE：Writing 必　・卒業論文 必　・卒業論文演習Ⅰ 自　・国際都市社会論Ⅰ（ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ）（集中） 博・博物館実習Ⅰ	必　・卒業論文 必　・卒業論文演習Ⅱ 選　・日本史演習Ⅳ 自　・日本史特講Ⅳ 博・博物館実習Ⅱ

○第4年次：博物館実習、9月大学院入試

取得学位・資格：学士（文学）、博物館学芸員

履修例２：国際的に活躍できる社会人を目指すＢさんの場合

	前期	後期
第1年次	全　・Freshman English Ⅰ 全　・Freshman English Ⅱ 全　・AE：Global UnderstandingⅢ 全　・ドイツ語基礎１ 全　・ドイツ語基礎２ 全　・ドイツ語応用１A 全　・人間と居住環境 全　・生物学への招待 全　・情報基礎 全　・健康運動科学 必　・言語文化基礎論Ⅰ 必　・言語文化学概論Ⅰ 自　・哲学史通論Ⅰ 自　・文学部基礎演習	全　・Freshman EnglishⅢ 全　・Freshman EnglishⅣ 全　・AE：Reading 全　・ドイツ語基礎３ 全　・ドイツ語基礎４ 全　・ドイツ語応用２A 全　・西洋社会の歴史 全　・西洋美術の流れ 全　・生命と進化 全　・地球の科学 全　・健康・スポーツ科学実習 必　・言語文化基礎論Ⅱ 必　・言語文化学概論Ⅱ 自　・哲学史通論Ⅱ
↓		
第2年次	全　・Sophomore English Ⅰ 全　・ドイツ語特修１ａ 全　・ドイツ語特修３ａ 全　・技術と生命 全　・日本の古典文学Ⅱ 選　・ドイツ語フランス語圏言語文化論Ⅰ 選　・ドイツ語圏文学史 選　・ドイツ語圏文化論 選　・ドイツ語圏言語文化基礎演習Ⅰ 自　・国語学基礎論 自　・英語学特講 自　・比較文化交流論Ⅰ（ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ）（集中） 自他・社会思想史（経）	全　・Sophomore English Ⅱ 全　・AE：Global Understanding Ⅰ 全　・ドイツ語特修２ 全　・ドイツ語特修４ 全　・アーツマネジメント 全　・文化人類学入門 選　・ドイツ語学概論 選　・ドイツ語圏言語文化基礎演習Ⅱ 選　・フランス語圏文学史 自　・英米文化概論 自　・フランス語圏文化論 自　・西洋史通論 自　・哲学概論Ⅱ
↓	※第2年次8～9月ハンブルク大学ドイツ語夏季講習会修了、ドイツ語特修７認定	
第3年次	全　・ドイツ語特修５ 全　・ドイツ語特修７※ 全　・文学と芸術へのいざない（演習） 選　・ドイツ語フランス語圏言語文化論Ⅱ 選　・ドイツ語圏言語文化演習Ⅰ 選　・ドイツ語圏言語文化演習Ⅱ 選　・ドイツ語コミュニケーションⅠ 自　・ラテン語Ⅰ 自　・英米文学史Ⅰ 自　・文化人類学 自　・世界史通論 自　・文学部実践演習 自　・国際都市文化論Ⅱ（ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ）（集中） 自他・国際経済学（経）	全　・ドイツ語特修６ 全　・植物と人間（演習） 選　・ドイツ語圏ランデスクンデ 選　・ドイツ語圏言語文化演習Ⅲ 選　・ドイツ語圏言語文化特別演習 選　・ドイツ語コミュニケーションⅡ 自　・ヨーロッパ言語文化特講 自　・ラテン語Ⅱ 自　・比較表現論 自　・フランス語学概論 自　・英米文学史Ⅱ 自　・宗教学概論Ⅰ 自他・国際協力論（経）
↓		
第4年次	必　・卒業論文 必　・卒業論文演習Ⅰ 自　・インターカルチュラルスタディーズ 自　・西洋古典学 自　・国際都市社会論Ⅰ（ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ）（集中）	必　・卒業論文 必　・卒業論文演習Ⅱ 自　・日本文化発信のための英語 自　・比較・国際教育学

取得学位・資格：学士（文学）

履修例３：学校づくりの力量をもつ教員を目指すＣさんの場合

	前期	後期
第1年次	全　・Freshman English Ⅰ 全　・Freshman EnglishⅡ 全　・Global Understanding　Ⅰ 全　・フランス語基礎１ 全　・フランス語基礎２ 全教・フランス語応用１Ａ 全　・心理学への招待 全　・地球学入門 全教・情報基礎 全教・健康運動科学 全教・健康・スポーツ科学実習 必　・人間行動学概論Ⅰ 自　・文学部基礎演習	全　・Freshman EnglishⅢ 全　・Freshman EnglishⅣ 全　・AE：Global Understanding　Ⅲ 全　・フランス語基礎３ 全　・フランス語基礎４ 全教・フランス語応用２Ａ 全教・部落差別の成立と展開 全　・日本の古典文学Ⅰ 全　・大阪の自然 全　・現代科学と人間 必　・人間行動学概論Ⅱ 教・教職概論※ 教・教職ボランティア実習Ⅰ（集中）
↓	○第1年次10月：教職ガイダンス	
第2年次	全　・Sophomore English Ⅰ 全　・フランス語特修１ 全　・大阪の地理 全教・障がい者と人権Ⅰ 必　・人間行動学データ解析法Ⅰ 選　・教育学概論Ⅰ 選　・教育方法学Ⅰ 選　・教育学研究法Ⅰ 選　・教育学実習 自　・教育史 自教・中国古典語Ⅰ 自教・国語学基礎論 自教・国文学史Ⅰ 自他・社会思想史（経） 教・教育方法論※ 教・特別活動論※ 自他・西洋経済史（経）	全　・Sophomore EnglishⅡ 全　・フランス語特修２ 全教・部落解放のフロンティア 全教・障がい者と人権Ⅱ 全　・生命と進化 必　・人間行動学データ解析法Ⅱ 選　・教育学概論Ⅱ 選　・教育学演習Ⅰ 選　・教育学演習Ⅲ 自教・教育制度論 自教・中国古典語Ⅱ 自教・国語学方法論 自教・国文学史Ⅱ 自教・教育基礎論● 自教・発達・学習論● 教・特別支援教育論※ 教・教育課程論※ 教・教職ボランティア実習Ⅱ（集中）
↓	○第2年次11月：介護等体験（前期にガイダンス）	
第3年次	全教・日本国憲法 選　・比較・国際教育学 選　・教育学研究法Ⅱ 選　・教育学演習Ⅱ 選　・社会学概論Ⅰ 選　・地理学概論Ⅰ 自　・教育学特講Ⅱ 自　・上方文化講座（集中） 自教・国語国文学特講Ⅰ 自教・国語国文学講読Ⅰ 教・国語科教育法Ⅰ 教・総合的な探究の指導論 教・教育相談論※	全　・観光と文化 選　・教育方法学Ⅱ 選　・教育学演習Ⅳ 選　・社会学概論Ⅱ 自　・教育行政学 自　・教育学特講Ⅰ 自教・国語国文学特講Ⅱ 自教・国語国文学講読Ⅱ 自教・国語国文学講読Ⅲ 教・道徳指導論※ 教・生徒・進路指導論※ 教・国語科教育法Ⅱ 教・国語科教育法Ⅲ 教・書道 教・教職ボランティア実習Ⅲ（集中）
↓	○第3年次5月：教育実習ガイダンス	
第4年次	必　・卒業論文 必　・卒業論文演習Ⅰ 教・教育実習B（４単位） 教・教育実習事前事後指導（中・高） 教・教職ボランティア実習Ⅳ（集中）	必　・卒業論文 必　・卒業論文演習Ⅱ 自　・生涯学習概論 教・国語科教育法Ⅳ 教・教職実践演習（中・高） 教・教職ボランティア実習Ⅳ（集中）
	○第4年次6月：教育実習、7月：教員採用試験（第1次）、9月：教員採用試験（第2次）	

※の科目は、教育学コース生に限り、文学部専門科目のうちの自由選択科目とみなされる。
●の科目は、教育学コースを含む全コースの学生に、文学部専門科目の自由選択科目とみなされる。
取得学位・資格：学士（文学）、中学校教諭1種免許状（国語）、高等学校教諭1種免許状（国語）

履修例４：人権感覚の豊かな公務員を目指すＤさんの場合

	前期	後期
第1年次	全　・Freshman English Ⅰ 全　・Freshman EnglishⅡ 全　・Global Understanding　Ⅰ 全　・朝鮮語基礎１ 全　・朝鮮語基礎２ 全教・朝鮮語応用１A 全　・大阪市大でどう学ぶか 全　・エスニック・スタディ入門編 全　・現代科学と人間 全　・情報基礎 全　・健康運動科学 全　・健康・スポーツ科学実習 必　・人間行動学概論Ⅰ	全　・Freshman EnglishⅢ 全　・Freshman EnglishⅣ 全　・Global UnderstandingⅡ 全　・朝鮮語基礎３ 全　・朝鮮語基礎４ 全教・朝鮮語応用２A 全　・技術と環境 全　・現代都市論 全　・部落解放のフロンティア 全　・メディアと人権 必　・人間行動学概論Ⅱ
↓		
第2年次	全　・Sophomore English Ⅰ 全　・朝鮮語特修１ 全　・現代の社会問題 全　・障がい者と人権Ⅰ 全　・歴史のなかの大阪 必調・人間行動学データ解析法Ⅰ 選　・社会学概論Ⅰ 選　・社会学史Ⅰ 選調・社会学研究法Ⅰ 選　・社会学基礎演習 自　・広報情報論Ⅰ 自　・マス・コミュニケーション論Ⅰ 自　・社会学特講Ⅰ 自　・比較文化交流論Ⅰ（ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ）（集中）	全　・Sophomore EnglishⅡ 全　・朝鮮語特修２ 全　・日本史の見方 全　・生物学への招待 全　・ジェンダーと現代社会Ⅱ 全　・障がい者と人権Ⅱ 必調・人間行動学データ解析法Ⅱ 選　・社会学概論Ⅱ 選　・社会学演習Ⅱ 選調・社会学研究法Ⅱ 自調・社会調査法 自　・観光文化論 自調・社会学データ解析法 自　・国語学方法論
↓		
第3年次	全　・日本国憲法 選調・社会学実習Ⅰ 選　・社会学演習Ⅰ 選　・社会学演習Ⅲ 選　・社会学特論Ⅰ 自　・社会学特講Ⅱ 自　・マス・コミュニケーション論Ⅱ 自　・比較表現論 自　・広報情報論Ⅱ 自　・文化心理学特論 自　・上方文化講座（集中） 自　・国際都市文化論Ⅱ（ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ）（集中） 自他・環境論（商）	全　・人権と多様性の研究（演習） 選調・社会学実習Ⅱ 選　・社会学史Ⅱ 選　・社会学演習Ⅳ 選　・社会学特論Ⅱ 自　・地理学概論Ⅱ 自　・社会学特講Ⅲ 自　・西洋古典学 自　・中国古典語Ⅰ 自　・地誌学Ⅱ 自他・証券経済論特殊講義（経） 自他・各国経済論特殊講義（経） 自他・憲法第1部（法）
↓	○第3年次に大阪市立大学・市大生協共催「公務員試験対策講座」を受講	
第4年次	必　・卒業論文 必　・卒業論文演習Ⅰ 自　・国際都市社会論Ⅰ（ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙｽｸｰﾙ）（集中）	必　・卒業論文 必　・卒業論文演習Ⅱ 自　・美術史通論

取得学位・資格：学士（文学）、社会調査士

Ⅱ 全学共通科目の履修

全学共通科目は、大阪市立大学の全学部生向けに開講されているものであり、そのうち総合教育科目には、自然科学を含め多様な学問分野の科目が用意されている。

文学部では、科目の区分ごとに必要単位数を定めている。全学共通科目の履修にあたっては、この文学部の定めた条件をよく理解した上で、別途配布される『全学共通科目履修案内・授業時間割表』にもとづき履修登録をおこなうこと。全学共通科目の授業は、杉本キャンパスの全学共通教育棟でおこなわれる。

１．科目の区分と卒業要件

全学共通科目は、総合教育科目、基礎教育科目、外国語科目、健康・スポーツ科学科目に区分されている（『全学共通科目履修案内・授業時間割表』）。

文学部の学生は、以下の単位を修得しなければならない。

全学共通科目			
総合教育科目 または 基礎教育科目	外国語科目	健康･スポーツ 科学科目	総合教育科目 または 外国語科目
16単位	**12単位**	**3単位**	**8単位**
39単位以上			

２．総合教育科目

総合教育科目には、「キャリア学習・デザイン科目」と「リベラルアーツ科目」からなるナビゲーション科目群と、現代的かつ普遍的なテーマを扱った主題科目群の大きな２区分がある。後者の主題科目群は、内容・分野により「環境・都市と生命」「人間と社会」「歴史と文化」「自然と情報」「ソーシャルイノベーション」という５つの科目群に分かれており、そのなかに全部で11の主題が配置されている。

文学部の学生は、以下の条件を満たすよう履修しなければならない。これを満たしていない場合、卒業に必要な全学共通科目の単位数を修得したことにならない。

１）ナビゲーション科目から１科目２単位以上
２）主題科目
　科目群：「環境・都市と生命」の主題：「生命と人間」あるいは
　科目群：「自然と情報」の主題：「自然と人間」から２科目４単位以上
３）主題科目
　科目群：「自然と情報」の主題：「情報と人間」から１科目２単位以上
４）地域志向系科目から１科目２単位以上（58頁参照）

文学部では、**第１年次で履修できる総合教育科目は８科目以内**としており、また前期に履修できるのは５科目以内である。

※履修した科目は、すべて単位を修得することが望ましい。例えば前期に５科目を履修し、すべて単位を修得すれば、後期の履修は３科目以内であり、前期に３科目を履修し、２科目の単位を修得すれば、後期の履修は６科目以内となる。

なお、基礎教育科目は理系学生向けの数学と理科の科目で、文学部では履修が義務づけられていない。しかし、履修することは自由であり、修得した単位は、文学部では総合教育科目の必要単位数（16単位）に含めることができる。主題科目「ソーシャルイノベーション」について、ソーシャルイノベーション(SI)コース修了を目的に設けられた科目群だが、コース修了認定を目指さないなら一部の履修も可能である。

３．外国語科目

外国語科目には、英語と新修外国語（ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語・朝鮮語）の６ヶ国語が提供されており、このなかから２ヶ国語を選択し、それぞれ６科目６単位を履修しなければならない。なお、英語以外の新修外国語を２ヶ国語選択することもできる。

（１）英　語

Freshman English（ＦＥ）Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Sophomore English(ＳＥ)Ⅰ・Ⅱの６科目を履修すること。

第１年次前期	ＦＥⅠ・Ⅱ
後期	ＦＥⅢ・Ⅳ
第２年次前期	ＳＥⅠ
後期	ＳＥⅡ

英語については、文学部生に割り当てられた複数のクラスに分かれて履修する。クラス分けは、あらかじめ指定してあるので、必ず指定されたクラスで履修すること。

（２）新修外国語

基礎１・基礎２、 基礎３・基礎４、応用１Ａ・応用２Ａの６科目を履修すること。

第１年次前期	基礎１・基礎２・応用１Ａ
後期	基礎３・基礎４・応用２Ａ

※基礎１・基礎２は同じ時期に並行して同じクラスで履修しなければならない。評価は２科目共通で行われ、基礎１・基礎２の合計２単位が同時に認定される。

新修外国語については、卒業に必要な６単位分を第１年次にすべて履修する。新修外国語についても文学部生に割り当てられたクラスで履修すること。

また新修外国語の場合、前期の基礎１・基礎２の内容がその後の学修の基本となるため、この単位を修得していなければ、後期の科目はいずれも履修できない。この場合、第１年次後期に配当されている科目の履修が第２年次後期以降にずれ込むことになる。そのため、第１年次前期の基礎１・基礎２を必ず修得するよう、くれぐれも注意すること。

（３）外国人留学生の外国語科目の履修と特例（外国人留学生のみなさんへ）

外国人留学生は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、朝鮮語および日本語の７ヶ国語から、２ヶ国語を選択し履修しなければならない。

英語はFreshman English(ＦＥ)Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Sophomore English(ＳＥ)Ⅰ・Ⅱの６科目、日本語は１Ａ・１Ｂ・２Ａ・２Ｂ・３Ａ・３Ｂ・４Ａ・４Ｂのうちから６科目、他の外国語は基礎１・基礎２・基礎３・基礎４・応用１Ａ・応用２Ａの６科目を履修し、合計12単位を修得しなければならない。なお、次の点に留意すること。

日本語を含む２ヶ国語を選択することが望ましい。 選択する外国語は、母語とみなされるものであってはならない。

また、日本語の場合は８科目の中から６科目を選択するので、英語や新修外国語のように第１年次・第２年次に履修する科目が指定されていないが、次のように履修することが望ましい。

第１年次前期	日本語１Ａ・２Ａ
後期	日本語１Ｂ・２Ｂ
第２年次	日本語３Ａ・４Ａ（前期）、日本語３Ｂ・４Ｂ（後期）から２科目

さらに、外国人留学生の場合、外国語２ヶ国語のうち、１ヶ国語については、共通教育科目として提供されている日本事情（ＩＡ・ＩＢ・ⅡＡ・英語で学ぶ日本事情の４科目がある）および専門教育科目を履修し、あわせて６単位を修得することにより外国語科目の履修に代えることができる。この場合、外国語の中の１ヶ国語を日本語で修得したことと同等と見なすので、もうひとつの外国語は、日本語を除く６ヶ国語から選択すること。また、外国語科目に代えた専門教育科目の単位は、専門教育科目の単位と重複して計算することはできない。

この特例の適用を希望する外国人留学生は、第１年次前期の履修登録期間中に、学生サポートセンター文学部教務担当に申し出て、文学部教務委員のガイダンスを受けること。

（４）「総合教育科目または外国語科目」８単位について

卒業に必要な外国語12単位とは別に、さらに発展的な外国語科目として、英語のAdvanced English（ＡＥ）、新修外国語の「特修」科目が提供されている。ＡＥは第１年次から、特修は第２年次から履修でき、修得した単位は、８単位までを卒業に必要な全学共通科目の単位に含めることができる。文学部生は第１年次の前期・後期にＡＥを１科目ずつ履修することが望ましい。

また、外国語科目は２ヶ国語に限定され、３ヶ国目の外国語は履修できるが、卒業要件の単位にはならない。

この制度は、発展的な外国語科目（ＡＥおよび特修）の履修を奨励するためのものであり、例えば発展的な外国語科目の８単位を修得すれば、卒業に必要な総合教育科目の単位数は、残り合計16単位以上となる。一方、発展的な外国語の単位をまったく修得しなければ、卒業に必要な総合教育科目の単位数は、残り合計24単位以上となる。

なお、外国人留学生が「日本語」もしくはそれに相当する科目の単位を、６単位（外国語必修単位数）を超えて修得した場合は、ＡＥ科目ないし新修外国語特修科目の場合と同様に「発展的な外国語」科目を修得したものとみなし、６単位を超える単位数を、卒業要件単位（「総合教育科目または外国語科目」８単位）に算入することができる。

（５）再履修

外国語科目の場合、単位を修得できなかった者は、英語については次学期の再履修クラス、新修外国語については翌年の同名科目による再履修となる。

（６）外国語の単位認定

TOEFL・TOEIC・英検において所定の成績または資格を取得した場合、また大学が指定する海外の語学研修を修了した場合は、必修の外国語科目の単位または発展的な外国語科目の単位として読み替えることができる。詳細については**「Ⅴ 単位認定」**をよく読むこと。

４．健康・スポーツ科学科目

健康・スポーツ科学科目のうち、健康・スポーツ科学講義（２単位）、健康・スポーツ科学実習（１単位）から、それぞれ１科目以上を履修し、合計３単位以上を修得しなければならない。

５．地域志向系科目・副専攻科目

（１）地域志向系科目

大阪市立大学は、平成 25（2013）年度に文部科学省「地（知）の拠点整備事業」として、大阪府立大学との共同申請「大阪の再生・賦活と安全・安心の創生をめざす地域志向教育の実践」の採択を受けた。本事業は、大学と自治体の連携を通して、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進めていくものである。

以上の理念に基づき、大阪市立大学では、平成27（2015）年度入学生より、全学共通科目の履修において、総合教育科目のうち「地域志向系科目」として指定されている科目から、２単位以上を修得することが必要になった。なお、「地域志向系科目」は、全学共通教育科目シラバス（別冊）に、そのリストがあるので、平成27（2015）年度以降に入学した学生は、在学中に「地域志向系科目」を必ず受講すること。

（２）副専攻制度

大阪市立大学では、学生が学部・学科で修得した専門分野の知識を、さらに広く活用する能力を養うため、「副専攻」制度を設けている。現在「グローバルコミュニケーション（GC）副専攻」「地域再生（CR）副専攻」「人権（HR）副専攻」の３つの副専攻が開設されている。

これら副専攻の具体的な内容については、別冊の副専攻ガイド冊子を参照すること。また、副専攻に関心をもち、積極的に受講したいと考える学生のために、各副専攻にてガイダンスが開かれる。ガイダンス開催時期についても、別冊の副専攻ガイド冊子を確認すること。

なお、「副専攻科目」については卒業単位に含まれない。

６．単位互換制度にもとづく履修など

『全学共通科目履修案内・授業時間割表』にある全学共通科目とは別に、単位互換制度にもとづく履修により、卒業要件の単位数に含めることができる場合がある。

詳細については『全学共通科目履修案内・授業時間割表』の該当箇所およびそれぞれの説明用に配布される別冊子を参照すること。

このほか、大阪市立大学の全学共通科目として国内外の受講生に開かれたインターネット講義がある。この科目については、受講は自由であるが、文学部では卒業に必要な全学共通科目の単位としては認めていない。

Ⅲ 専門教育科目の履修

次に、文学部の専門教育科目の履修について説明する。専門教育科目には、各コースで標準的に履修する科目と、文学部共通専門教育科目（すべて自由選択科目）とがある。

いずれも週１回14週の授業を基本とし、合格すれば２単位が認められる。科目によっては、ある年度には休講のものもあるので、開講年度に注意すること。また、週１回の授業ではなく、短期間で授業を行う集中講義によるものもある。

専門教育科目の授業は、基本的に１号館を中心とした本館地区の教室で開講される。

１．科目の区分と卒業要件

文学部の専門教育科目は、必修科目、選択必修科目、自由選択科目に区分されている。

卒業のためには、以下の単位を修得しなければならない。履修にあたっては、この『手引き』によるほか、各コースのガイダンスによる指導にしたがうこと。

なお、第３年次に編入した学生は、全学共通科目を履修する必要はないが、専門教育科目92単位以上の修得が卒業要件となる。

文学部専門教育科目		
必修科目	選択必修科目	自由選択科目
22単位	30単位	40単位
92単位以上		

標準履修年次は、各コースにおいて専門教育を積み上げていくために、科目の内容に応じて履修することが望ましいとされた年次であり、これにしたがって履修し、卒業論文作成に向け専門性を高めていくことが重要である。なお、標準履修年次に満たない年次の学生は、その科目を履修することはできないが、標準履修年次を越える年次の学生は履修が可能である。

２．必修科目

所属する学科で指定されている以下の科目を、必ず修得しなければならない。

哲学歴史学科	：「人間文化基礎論Ⅰ・Ⅱ」「人間文化概論Ⅰ・Ⅱ」
人間行動学科	：「人間行動学概論Ⅰ・Ⅱ」「人間行動学データ解析法Ⅰ・Ⅱ」
言語文化学科	：「言語文化基礎論Ⅰ・Ⅱ」「言語文化概論Ⅰ・Ⅱ」
文化構想学科	：「文化構想学概論Ⅰ・Ⅱ」「文化構想学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」

これらは、第１年次または第２年次を標準履修年次としており、それぞれのコースに進むにあたって専門科目の中で基礎となるものである。第２年次に自分が進みたい履修コースを念頭に、第１年次に履修可能な科目は必ず履修すること。コース選択を迷っている場合、また候補と考えるコースの学科が異なる場合は、両方を履修しておくことが望ましい。履修したが、進級しなかった学科の科目も、自由選択科目として卒業に必要な単位数に含めることができる。

なお、必修科目である卒業論文および卒業論文演習については、別に説明する。

３．選択必修科目

各コースのカリキュラムの根幹となる科目である。コース提供の選択必修科目のほか、同一学科他コースの選択必修科目の中からも選択することができるが、所属コースの選択必修科目をすべて履修することが望ましい。科目の選択にあたっては、当該コースのガイダンスに従うこと。

４．自由選択科目

以下に列挙する科目を履修することができる。

①各コースの専門科目表に掲げた自由選択科目

②規定の単位数を超えて履修した選択必修科目

③他学科の専門教育科目（必修科目・選択必修科目・自由選択科目すべて）

④「文学部専門科目表」の学部共通専門教育科目

⑤教職課程科目（ただし、以下の科目に限る）

※「教育基礎論」「発達・学習論」「教育制度論」の３科目。

※ただし、教育学コース生については、これに加えて「教職概論」「教育方法論」「教育課程論」「特別活動論」「道徳指導論」「教育相談論」「生徒・進路指導論」「特別支援教育論」「総合的な探究の指導論」を卒業に必要な自由選択科目の単位とすることができる。

（2019年4月以降入学生に適用）

⑥博物館に関する科目（ただし、以下の科目に限る）

※「生涯学習概論」「博物館概論」「博物館経営論」「博物館情報・メディア論」「博物館資料論」「博物館展示論」「博物館資料保存論」「博物館教育論」の８科目

⑦他学部提供専門教育科目

※提供学部が他学部生も履修可としているもの。ただし、卒業までに合計16単位以内に限る。

５．文学部共通専門教育科目

各コースの専門科目表に掲げた専門教育科目とは別に、文学部として共通に提供する自由選択科目があり、文学部の学生は自由に履修できる。

このうち特色ある科目について簡単に解説しておく。

（１）インターナショナルスクール集中科目

インターナショナルスクール集中科目は、国際的な研究教育を推進することを目的に、毎年９月に集中講義形式で実施されている。英語での講義を聴くセッションと、講義内容に関する質疑やディスカッションを英語で行うセッションで構成されており、この２つを交互に行う中で理解を深めるとともに、直接英語で考えたり、表現したりすることを通じて、日常会話とは少し違った「学問の場での英語」を体験できる。

（２）上方文化講座

大阪の地に歴史的に育まれた文化、とりわけ伝統芸能に光を当て、学問的アプローチの下でこれを学ぼうとする試みであり、現在は文楽を取り上げている。伝統芸能の第一線で活躍する専門家を招き、本学教員との共同作業により授業を組み立てる。一般市民にも開放している科目で、毎年８月に実施している。

６．その他

（１）既修得科目の再履修

不合格になった科目は、別のセメスターにおいて再度履修できるが、一度合格した科目は、２回以上履修できない。ただし、科目表の科目名の前に「○」が記載されている科目は、当該コースの学生のみ２回目に限り、自由選択科目の卒業要件単位数に含めることができる。ただし、教職課程の「教科及び教科の指導法に関する科目」の単位数を計算する際には、重複分は含まれないので注意すること。

なお、同一科目であっても、年度ごとに内容が異なることがあるので、関心があれば聴講することは可能である。卒業に必要な単位にならなくても、関心ある科目を重ねて受講したい場合は、履修登録はせず、授業担当者に申し出ること。

（２）集中講義

週１回の授業ではなく、短期間で授業を行う集中講義を開講することがある。これは、時間割表の最終頁に掲げる。集中講義の開講期日については掲示により事前に周知する。

集中講義の履修登録については、それぞれ前期・後期の履修登録期間中に登録すること。履修登録期間の時点で希望する集中科目の開講日が未定の場合でも、履修希望者は必ず登録しておくこと。

なお、卒業予定者の後期集中講義（９月卒業予定者については前期集中講義）に関しては、卒業判定に含まれないことがあるので注意すること。

Ⅳ 卒業論文と学位

１．卒業論文演習科目

必修科目である卒業論文演習Ⅰ・Ⅱは、卒業論文作成のためコース教員から指導を受ける科目であり、とくに時間割は定めていない。卒業論文は、卒業論文演習Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）を履修し、１年を通じて作成するものとする(※)。卒業論文演習Ⅰ・Ⅱを受けずに提出された卒業論文は認められない。

また、卒業論文演習Ⅱは、卒業論文演習Ⅰの単位を修得しなければ履修することができない。

※「卒業論文演習Ⅰ」・「同Ⅱ」について、「卒業論文演習Ⅰ」を修得後に「同Ⅱ」を異なる年度に修得する場合は、卒業しようとする年度の前期に「卒業論文」、後期に「卒業論文演習Ⅱ」の履修登録を行わなければならない。その際、WEBシステムが利用できない環境にいる等やむをえない理由で履修登録できない場合は、必ず事前に学生サポートセンター文学部教務担当へ申し出ること。
（ただし、前期休学者の「卒業論文」履修登録については、後期の履修登録時に文学部教務担当窓口にて手続きを行うこと）

２．卒業論文・卒業論文演習の履修登録

「卒業論文」および「卒業論文演習Ⅰ」は、卒業論文を提出する年度の前期に、「卒業論文演習Ⅱ」は後期の履修登録期間中に登録すること。

３．提出期日および締切時間

卒業論文の提出時期は１月14日正午（午後０時）を締め切りとする（「履修規程」第12条）。ただし祝祭日などにより、年度によって提出期日が変更となる場合があるので、掲示に注意すること。提出期日および締切時間に遅れた場合は、原則として受理しない。

提出に際しては、文学部および学科・コースの指示する条件と形式にしたがって作成し、仮製本をした上で学生サポートセンター文学部教務担当に提出すること。

４．成績評価

卒業論文の成績評価は、提出された卒業論文とその内容に関する面接試験の結果による（「履修規程」第13条）。２月に実施する面接試験の日時は、各コースから通知する。

もし、卒業論文および卒業論文演習Ⅰ・Ⅱを除く、卒業に必要な所定の単位を修得できなかった場合は、卒業論文の単位認定はしない（「履修規程」第13条）。

卒業論文演習Ⅱの単位認定は、卒業論文の単位が認定されたことをもって行う（「履修規程」第13条第２項）。したがって、卒業論文が不合格になった場合は、卒業論文演習Ⅱの単位も認定されない。卒業論文および卒業論文演習Ⅰ・Ⅱの成績は、100点満点法により60点以上を合格とする（「履修規程」第13条第４項）。

合格した卒業論文は製本し、本学学術情報総合センターで保管する。

５．卒業論文の仮認定と９月卒業

卒業要件に不足する科目・単位が、２科目かつ４単位以内である場合に限り、卒業論文および卒業論文演習Ⅱの単位を仮認定する。

当該学生が、次年度前期に卒業に必要な単位を修得し、かつ本人が前期末に卒業すること（いわゆる９月卒業）を希望する場合にのみ、９月の時点でそれまでの仮認定を正式認定とする。この条件を満たさない場合は、仮認定を取り消す。

いわゆる９月卒業は、卒業論文および卒業論文演習Ⅱが仮認定された者のみが可能であり、９月に卒業論文を提出することはできない。

９月卒業の願出に際しては、前期にOCU UNIPAにて掲示するので指定期日までにサポートセンター文学部教務担当に提出すること。

６．学　位

卒業に必要な単位を、卒業論文を含めてこれを満たした者は、教授会の審議を経て卒業が認定され、「大阪市立大学学士（文学）」の学位が授与される（「履修規程」第14条）。

Ⅴ 単位認定

文学部では、通常の単位認定とは別に、以下のような場合、本学において単位を修得したものとみなすことができる。

１．外部試験等による外国語の単位認定

（１）TOEFL・TOEIC・英検に基づく英語の単位認定

TOEFL・TOEICの成績取得者及び実用英語技能検定（英検）の資格取得者（合格者）は、所定の英語の単位を得たものとみなすことができる。６単位・４単位・２単位それぞれへの読み替えに必要な最低点は以下の通りである。※原則（在学中）1回のみ認定する。なお、上限は６単位までとする。

認定単位数	TOEFL	TOEIC	英検
６単位	iBT 88	L&R 800	１級
４単位	iBT 79	L&R 750	
３単位			準１級
２単位	iBT 69	L&R 650	

（TOEFL iBT：満点120点、TOEIC：満点990点）

それぞれの全学共通科目の外国語科目への読み替えは次の通りとする。

① 第１年次（１回生）の読み替え科目

前期申請　６単位の場合　　FE Ⅰ～ⅣおよびSE Ⅰ～Ⅱ
　　４単位の場合　　FE Ⅰ～Ⅳ
後期申請　６単位の場合　　FE Ⅲ～Ⅳ、SE Ⅰ～ⅡおよびAE ２科目
　　４単位の場合　　FE Ⅲ～ⅣおよびAE ２科目

３単位または２単位の認定科目は、AE科目の中から定める。

② 第２年次（２回生）以上の読み替え科目

前期申請　６単位の場合　　SE Ⅰ～ⅡおよびAE ４科目
　　４単位の場合　　AE ４科目
後期申請　６単位の場合　　SE ⅡおよびAE ５科目
　　４単位の場合　　AE ４科目

３単位または２単位の認定科目は、AE科目の中から定める。

※AE科目としては、まず「TOEFL Ⅰ」、「TOEIC」の２科目を優先する。それ以外の単位数の場合はその他のAE科目を充てるものとする。なお、Global Understanding科目を充てることはできない。

③ 申請条件

TOEFL・TOEICの点数、英検の資格は、入学前・入学後を問わず、申請時より遡って１年以内に取得した場合に限って、上記の英語単位として認定する。

ただし、再履修対象科目の単位認定は、対象外とする。

④ 認定の手続き

毎年４月と１０月に当該の単位認定を行う。適用を希望する学生は、各期の履修登録期間中に、英語単位認定申請書、およびTOEFL・TOEICの成績証明書または英検の資格取得証明書（いずれも写し）を学生サポートセンター文学部教務担当に提出すること。学期途中の申請は認めない。

（２）海外語学講習会の単位認定

以下の海外語学講習会の研修を受けた者は、所定の語学単位を得たものとみなすことができる。

① 英　語

シェフィールド大学英語夏期講習会、ビクトリア大学短期語学研修会、オックスフォード大学ハートフォードカレッジ春期語学研修の修了者には、AE科目１単位を認定する。

認定科目については、「TOEFL Ⅰ」または「TOEIC」を認定する。すでにこの２科目を修得している場合は、「TOEFL Ⅱ」を除く他のAE科目を充てることができる。

② 新修外国語

ハンブルク大学ドイツ語夏期講習会、フランス語夏期講習会、サンクト・ペテルブルク国立大学ロシア語夏期講習会、中国語短期研修プログラム、ソウル市立大学校サマースクールの各修了者には、申請に応じて、それぞれ新修外国語のドイツ語特修科目、フランス語特修科目、ロシア語特修科目、中国語特修科目、朝鮮語特修科目の各２単位を認定する。

③ 認定の手続き

上記の単位認定を希望する学生は､各期の履修登録期間中に、外国語単位認定申請書、およびそれぞれの語学講習の修了書（写し）を学生サポートセンター文学部教務担当に提出すること。

２．海外の教育機関で修得した単位の認定

本学や本学部が学術交流・学生交流協定を結んだ海外の教育研究機関などで修得した単位を、「外国大学科目Ⅰ～Ⅳ」など自由選択科目を中心に、文学部専門科目の単位として認めることがある。担当教員に確認すること。

３．既修得単位の認定（大学既卒の学生・編入学生のみなさんへ）

本学または国内の他の大学・短期大学および外国の大学・短期大学において単位を修得し、新たに本学部に入学または第３年次に編入学（学士入学を含む）した者については、当該大学において修得した単位（既修得単位）が本人にとって教育上有益であると認められる場合、その一部を本学において修得した単位とみなすことができる。

（１）第１年次に入学した者の場合

全学共通科目の単位として認定する。本学の全学共通科目に相当する既修得単位を選択し個別に認定する。修得したとみなす単位数は20単位以内である。

（２）第３年次に編入学（学士入学を含む）した者の場合

① 本学における全学共通科目の卒業要件単位（39単位）については一律に一括認定し、修得したものとみなす。なお、新修外国語未履修の学生には、これを履修するよう各コースで指導する（卒業要件単位にはならない）。

② 専門教育科目については、修得したとみなす単位数は、22単位を超えないものとする。このうち８単位は一括認定とし、残りの14単位は個別認定とする。

一括認定の８単位については、１・２年次生用の必修科目または自由選択科目とする。

個別認定の14単位については、自由選択科目の単位とし、本学の専門教育科目に相当する既修得単位を選択し個別に認定する。

ただし、編入前の大学等のカリキュラムの事情等により、自由選択科目から対応科目を見つけにくい場合には、本人および教室の要望を勘案した上で、教務委員会の判断で、編入後の自コース選択必修科目を最大限修得するよう指導することを条件に、選択必修科目を個別認定案に含めることができる。

単位認定の手続き

単位認定を希望する者は、第１年次・第３年次いずれの場合も、入学後最初の学期における履修登録の確認・修正登録期間開始時までに、成績証明書の写しを添付して「既修得単位認定願」を学部長に提出する。

なお、第３年次に編入学した者の専門教育科目の認定については、以下の手順で行う。

（１）編入学生は、まず教室教務委員と面談し、認定仮案を作成する。

（２）文学部教務委員は認定仮案を持参した編入学生全員と面談し、相談の上、認定案を作成する。

（３）編入学生は、教室教務委員に認定案の確認を受けた後、「既修得単位認定願」を作成し、学生サポートセンターに提出する。

Ⅵ 科目履修の手続きと成績評価

ここでは、実際に各学期において科目を履修する際の手続きとその際の留意事項について説明する。各学期に修得した単位を成績通知書により確認し、新学期の科目履修の計画を立て、時間割表により開講曜日・時限を確認し、遺漏のないように登録すること。

履修登録スケジュールおよび成績開示については、掲示板およびOCU UNIPAへの掲載により周知する。

なお、障がいを有する学生が、受講等について要望がある場合は、その旨を学生サポートセンター文学部教務担当に申し出ること。履修にあたって必要な措置をとる。

１．履修登録について

（１）OCU UNIPAによる履修登録

科目を履修するにあたっては、各学期はじめの定める期日まで（４月上旬・９月中旬）にOCU UNIPAより履修登録をしなければならない（「履修規程」第10条）。

履修を考えている科目は全て履修登録期間に登録しておくこと。

※OCU UNIPAの操作方法等の詳細については『OCU　UNIPA操作マニュアル』を熟読すること。

（２）登録上の諸注意

科目表にある標準履修年次、重複履修（合格済科目を再度履修すること）の可否などによく注意して登録すること。試験で不合格となった科目についても、次学期以降、改めて履修することができる。

（３）履修申請の確認

履修登録締切後の履修登録状況確認日・抽選結果発表日に、OCU UNIPAの「抽選希望登録対象一覧」画面および「学生時間割表」画面上にて抽選科目の抽選結果および履修登録内容の確認が可能になる。履修登録状況確認日・抽選結果発表日に登録内容を点検し、希望通り正しく登録されているか確認すること。特に、エラーが出ている科目については放置することなく、必ずエラー内容を確認し、履修登録確認・修正期間内に修正をすること（エラーを放置するとその学期の履修登録がすべてできない事態も起こりうるので、十分に注意すること）。この確認を怠り、希望する科目履修が正確に登録されていない場合は、その科目の履修を認めない。

（４）休学した学生が復学した場合

休学した学生が履修登録期間最終日を過ぎて復学した場合には、履修登録確認・修正期間中にOCU UNIPAより履修登録をすること。なお、履修登録確認・修正期間最終日を過ぎて復学した場合には、すみやかに学生サポートセンター文学部教務担当へ申し出ること。ただし、復学の時期によっては単位の修得ができない場合がある。

２．試験と成績評価

（１）定期試験その他の方法による成績評価

各科目の成績評価の方法については科目案内（シラバス）に明記する。

① 定期試験

卒業論文および卒業論文演習を除く科目については、原則として各学期末に定期試験を実施する（『履修規程』第11条）。なお、一部の科目については試験期間を繰り上げて定期試験を実施することもある。

② 試験以外の評価

科目によっては、授業期間中の臨時試験、レポートの提出、および平常の学修状況等をもって定期試験に代える場合がある。

（２）追試験

定期試験の際、①「学校において予防すべき感染症」に罹患し出席停止措置の対象になった学生には、出席停止期間に実施されたすべての科目の試験について、追試験を実施する。この場合、「学校において予防すべき感染症」罹患証明書」と「出席停止措置による欠席科目報告書」を提出すること。

詳細は、OCU UNIPA＞学生Navi＞授業・履修から確認すること。

また、②卒業単位として認められる外国語科目については、上記以外の病気その他やむをえない事情により欠席し、受験できなかった学生に対しても、追試験を行うことがある。この場合、当該科目の試験終了後１週間以内に「追試験願」（所定の様式に記入し、病気のときは医師の診断書、その他の事故のときは適当な証明書を添付する）を、学生サポートセンター文学部教務担当に提出しなければならない。裁判員として裁判に参加したために欠席した場合は、別途定める条件に従うこと。

追試験の該当者、実施期日等は、定期試験終了後に掲示等で周知する。

（３）再試験

不合格科目の再試験は一切実施しない。

（４）成績評価および表示

定期試験等による成績は、100点満点で60点以上を合格とし単位を認定する（『履修規程』第11条第３項）。成績通知には合格科目をAA・Ａ・Ｂ・Ｃで表示し、不合格科目はＦで表示する。

AA～Ｆの区分は100点満点で、次の通りである。

AA：100点～90点、Ａ：89点～80点、Ｂ：79点～70点、Ｃ：69点～60点、Ｆ：59点以下

（５）不正行為

定期試験等において不正行為を行った学生には、「試験における不正行為に対する処置およびその取扱手続に関する内規」に基づいて厳しく対処する。具体的には、その学期の成績をすべて無効とする。不正行為は絶対に行わないこと。

３．成績確認

前学期に履修・受験した科目の成績については、OCU UNIPAの「成績照会」画面によって確認できる。成績開示日に、自分の単位修得状況を確認し、その上で新学期の履修登録を行うこと。

※「成績照会」画面には前学期までの成績がすべて反映されており、印刷も可能である。

４．成績異議申立制度について

学生は、当該期の成績評価について、次に該当する場合に限り当該学部等へ異議を申し立てることができる。

(1) 成績の誤記入等、明らかに担当教員の誤りであると思われるもの

(2) シラバスや授業時間内での指示等により周知している成績評価の方法から、明らかに逸脱した評価であると思われるもの

下記の手続きをよく読み、学生サポートセンター文学部教務担当へ申し出ること。異議申立書の様式及び異議申立期間については、成績開示前にOCU UNIPAに掲載する。

なお、これは単に成績評価に納得がいかない者が、問い合わせ、また異議申立を行う制度ではないので、注意すること。

異議申立の手続き

(1) 異議を申し立てようとする学生は、成績評価についての異議申立書を学部等に提出しなければならない。また、担当教員への直接の異議申立は認めない。

(2) 異議申立期限は、成績開示日から原則として３日以内（日曜日、土曜日及び国民の祝日に関する法律に規定する休日を含めない。次項において同じ）とする。

(3) 担当教員は異議申立書受理日から原則として７日以内に、回答書により学部等へ回答する。学部等は、異議申立書受理日から原則として７日以内に、成績評価についての異議申立にかかる回答書により学生への回答を行うものとする。

(4) 異議申立への回答に対しての再異議申立は認めない。

５．文学部グレード・ポイント・アベレージ（GPA）制度について

文学部では、Grade Point Average（GPA）制度を導入している。GPAとは、各科目の成績から特定の方式によって算出された学生の成績評価値（あるいはその成績評価方式）を指し、算出された数値は学力を測る指標となる。

履修登録した全科目がGPAの対象となる（ただし、単位認定に係る科目、「合」評価の科目、教職課程科目の教職に関する科目（※）、学芸員関連科目（※）、副専攻科目、その他卒業単位に含まれない科目はGPAの対象にはならない）。

（※）これらの科目であっても、卒業単位に含まれる単位はGPA対象となる。

成績は「AA／A／B／C」の合格、「F」の不合格、「欠」、「無効」で評価され、次の方法でGPAを算出する。

① 成績評価を下表の換算ポイントに置き換える

評価	得点等	換算ポイント
AA	100～90	4
A	89～80	3
B	79～70	2
C	69～60	1
F	60未満	0
欠	欠席	0
無効	試験等での不正行為	0

② 次の計算式に数値を入れて算出する

$$\text{GPA数値} = \frac{[\text{※履修登録した科目の単位数} \times \text{当該科目の換算ポイント}]\text{の合計}}{\text{※履修登録した科目の単位数の合計（不合格を含む）}}$$

※GPA対象科目のみ

仮に履修したすべての科目の評価が「AA」であった場合、GPAは４点となり、すべての科目の評価が「F」や「欠席」だと０点になる。

なお、履修科目の登録が確定した後、原則として登録削除はできない。ただし、病気や事故などやむをえない事情により履修が困難になった際は、教授会の承認を経ることにより、履修を取り消すことができる場合があるので、サポートセンター文学部教務担当まで申し出ること。

また、病気や事故などやむをえない事情により試験を欠席することになった場合は、当該科目についてGPA評価対象から除外するので当該科目の試験実施日から1週間以内に「試験欠席理由書」を提出すること。ただし、追試験を受験できない場合に限る。

なお、文学部では、2020年度よりGPAの数値はOCU UNIPAの「成績照会画面」に掲載され、就学支援制度の審査に利用される。

以上のことをふまえて、自分が真剣に学習する意欲があるのかどうか充分に考えたうえで計画的に履修登録すること。

６．その他

（１）交通機関の運休による授業の休講について

次の交通機関の①または②のいずれかが運休（事故等による一時的な運行停止を除く）を行った場合の授業は原則として休講とする（定期試験の延期措置を含む）。ただし、別表のとおり運行再開の時刻により、全部又は一部の授業を行う。また、運休の有無にかかわらず別段の決定を行うことがある。

●杉本キャンパス

① JR阪和線全線

② Osaka Metro御堂筋線全線およびJR大阪環状線全線が同時

（２）気象条件の悪化による授業の休講について

「大阪府下に暴風警報又は特別警報（すべて対象とする）のいずれか」が発令された場合の授業は原則として休講とする（定期試験の延期措置を含む）。ただし、別表のとおり運行再開・警報解除の時刻により、全部又は一部の授業を行う。また、警報発令の有無にかかわらず別段の決定を行うことがある。

（３）遠隔授業（同時双方向型に限る）においてWebClassが停止した場合の休講について

WebClassが停止した場合は同時双方向型の授業に限り、原則として休講とする（授業担当教員から履修者へ個別の連絡がある場合は除く）。ただし、別表のとおりWebClassの復旧の時刻により、全部又は一部の授業を行う。また、遠隔授業（オンデマンド型）については休講の措置を行わない。

（別表）

●杉本キャンパス

運行再開・警報解除・WebClass復旧の時間	休講となる時限	授業を行う時限
午　前　7　時　以　前		全時限
午　前　10　時　以　前	１・２　時限	３・４・５　時限
午前10 時を過ぎても運行再開・警報解除されない、復旧しない場合	全時限	

※交通機関の運休とは、事故、気象現象、地震、交通ストライキ、その他の理由により交通機関が運行休止になり、通学が困難な場合をいう。

※授業中または試験中に、暴風警報又は特別警報が発令された場合は、原則として、実施中の授業・試験についてはそのまま行い、その次の時限から授業は休講とする。

※このほか、必要がある場合は、各学部又は各研究科において別に定める。

Ⅶ 諸手続並びに注意事項

１．修業年限と在学年限

（１）修業年限

卒業するまでの修業年限は４年である（「履修規程」第５条第１項）。第３年次に編入した学生の修業年限は２年である（「履修規程」第５条第３項）。

（２）在学年限

第３年次への進級条件および卒業に必要な単位数に満たない場合、留年となるが、その場合、在学できる年数に上限が定められている。卒業までの在学年限は８年である（「履修規程」第７条）。

①　第３年次への進級

進級の期限は入学後４年以内である（「履修規程」第７条第２項）。入学後４年以内（休学期間を除く）で進級条件を満たさない場合は、引き続き在学することはできない。

②　卒　業

卒業の期限は、入学後８年以内である。（「履修規程」第７条第１項）。入学後８年以内(休学期間を除く）で卒業条件を満たさない場合は、除籍となる。第３年次に編入した学生は４年以内に卒業しなければならない（「履修規程」第７条第４項）。

（３）退学と除籍

在学年限内に必要な単位が修得できない場合、除籍となる。なお、退学に際しては「退学願」の提出が必要であり、未提出の場合は除籍となる。

２．転学部

文学部学生の大阪市立大学他学部への転学部は原則として認めていない。ただし、受け入れ学部の承認のある場合には、教授会の審議を経て認めることがある。

３．休学、復学、退学、除籍、再入学

（１）休　学

病気その他やむをえない理由で２ヶ月以上学修できない場合は、休学することができる。一度に願い出ることのできる休学期間は原則最大で６ヶ月である。

休学を願い出る時は、学生サポートセンター文学部教務担当に申し出て、その指示を受けること。休学は本人と教室代表（１回生は担任）および学生担当委員との面接、「休学願」の提出により、教授会で審議され決定される。

なお、「休学願」の提出は、緊急の場合を除いて、前期は３月末日、後期は９月末日までに行わなければならない。

学期開始後に提出した場合は、その学期の授業料を納入しなければならない。

「休学願」は授業料が未納の場合は受理されない。

休学を延長する場合も、上記と同様の手続きをおこなったうえで、「休学願」を提出しなければならない。休学期間は、通算して４年を超えることができない。休学期間は在学年数に算入しない。

また、当該学年には、休学期間を除き12ヶ月以上在籍しなければならない。学年進行の時期は、４月とする。

（２）復　学

休学期間中にその事由が消滅したときには、願い出て復学することができる。復学後の履修については、学生サポートセンター文学部教務担当の指示を受けること。

休学期間終了までに申し出がない限り、終了翌日に復学する。したがって、復学した学期の授業料を納入しなければならない。

（３）退　学

退学を希望する場合は、学生サポートセンター文学部教務担当に申し出て、その指示を受けること。退学は本人と教室代表（１回生は担任）および学生担当委員との面接、「退学願」の提出により、教授会で審議され決定される。

なお、「退学願」の提出は、緊急の場合を除いて、前期をもって退学する場合は９月末日、後期をもって退学する場合は３月末日までに行わなければならない。学期開始後に提出した場合は、その学期の授業料を納入しなければならない。

「退学願」は授業料が未納の場合は受理されない。

（４）除　籍

年度内に授業料を納入しなかった場合、あるいは在学年限内に所定の単位を修得できなかった場合で「退学願」の提出のないときは除籍となる。

（５）再入学

退学または除籍された者が、再入学を願い出たときには、教授会の審議を経て許可することがある。ただし、再入学の願い出は、退学または除籍の日から３年以内に限る。再入学には、受験料、入学料が必要となり、許可された場合は、退学時または除籍時の在学年限を引き継ぐ。

４．大学における経済支援制度

授業料は、通常、前期分（５月下旬頃）、後期分（10月下旬頃）に、指定の銀行口座から引き落とされる。

年度内に授業料を納入しなかった場合は除籍になるので注意すること。

（１）高等教育の就学支援新制度

家庭の事情その他の理由で、支払いが困難な者は、就学支援の申請ができる。この制度を利用することにより授業料が減免されることに加え、給付奨学金が支給される。

（２）奨学金

奨学金には、(1)日本学生支援機構奨学金、(2)本学独自の奨学金、(3)公的団体や民間団体の奨学金（各種奨学金）がある。

以上の経済支援制度については、https://www.osaka-cu.ac.jp/ja/education/financial_aidから確認することができる。

５．就職活動

近年、就職活動の開始時期は、業界によって異なるため流動的であるが、おおむね第３年次生の秋頃から始まっている。第３年次生は専門教育の重要な時期でもあるので、就職活動と学修のバランスをよく考えて活動するよう心がけてほしい。進路報告の提出時期や用紙のダウンロードについては、OCU UNIPA＞学生Navi＞進路・就職から確認すること。

（１）進路希望登録票の提出

第３年次生になったら、「進路希望登録票」に記入し、キャリア支援室（学生サポートセンター１階）に提出すること。

（２）進路報告登録用紙の提出

就職先が内定した場合や進路先が確定した場合は、「進路報告登録用紙」に記入し、就職支援室に提出すること。

内定状況は、キャリア支援室に届けるとともに、指導教員等にも必ず伝えること。

（３）就職活動に関する情報提供

就職先が内定した場合は、上記の進路報告登録用紙（キャリア支援室に提出するもの）とは別に、文学部・文学研究科教育促進支援機構「就職活動に関する情報提供のお願い」の用紙（学生サポートセンター文学部教務担当にて配布）に必要事項を記入し、学生サポートセンター１階の文学部教務担当のレポートボックスに提出すること。

（４）求人情報等の提供

大学への求人情報、インターンシップ等の情報は、学生サポートセンターのキャリア支援室に集約されるので、随時、有効に活用してほしい。

また、キャリア支援室による就職ガイダンス、会社説明会等についても、OCU UNIPA（学生Navi＞進路・就職）や学内掲示に注意して積極的に参加してほしい。近年、インターネットによる就職エントリー・就職情報エントリーが多いので、そちらの方も活用してほしい。

文学部では、教育学教室による教員採用試験研究会、文学部・文学研究科教育促進支援機構による進路・就職活動支援プログラム等もあるので、学内掲示等に注意すること。

国家公務員採用試験、教員採用試験は、申込期日が４月上旬であり、応募期間も短いので、希望する学生は注意すること。

６．各種変更届について

入学時に申告した学生本人の住所・氏名などに変更があった場合は、すみやかに学生サポートセンター文学部教務担当に届け出なければならない。

７．学生証、通学証明書について

（１）学生証

学生証は、本学の学生であることを証明するものであるので、通学時には必ず携行すること。試験時において学生証の提示のない者は受験できない。また、各種証明書の発行には学生証が必要となるので、紛失しないように注意すること。再交付を申請する場合は学生サポートセンター文学部教務担当に再交付願を提出すること。再交付には原則として１回1,500円（実費、以下同じ）がかかる。

（２）通学証明書

本学に通学するための定期券購入に必要である。通学経路、住所等に変更があった場合は、すみやかに学生サポートセンター文学部教務担当に届け出ること。通学経路は何度も変更できないので注意すること。

８．各種証明書の発行について

（１）自動発行機で発行される証明書

下記の証明書は、自動発行機によって発行される。発行の際には、学生証と入学時に発行されるパスワードが必要なので紛失しないようにすること。

① 在学証明書、成績証明書、卒業見込証明書（和文・英文）

有料（１通100円）で発行する。

卒業見込証明書は、４年次生になった４月１日以降でないと発行されない。また、成績証明書は、４月１日以降あるいは10月１日以降でなければ、直前学期の成績は反映されないので注意すること。

② 学割証明書

無料で発行する。

③ 健康診断証明書

有料（１通200円）で発行する。（当該年度に定期試健康診断を受診した学生が対象）

（２）学生サポートセンター1階教育推進課教務担当で発行される証明書

下記の証明書は、学生サポートセンター文学部教務担当で発行される。証明書の種類によっては、申請から発行まで数週間程度必要なものもあるので、余裕を持って申請すること。

① 教職免許に関する証明書（学力に関する証明書）

有料で発行する（１通100円）。

手作業で作成するため即時発行できない。通常１～２週間程度かかる。

卒業時に教員免許を個人申請する場合の単位修得証明書は、卒業式以後の発行となるため、在学中に事前に学生サポートセンター文学部教務担当に申し出ること。

教職免許取得見込み証明書については、原則、翌日発行となる。

② 学芸員に関する単位修得証明書

有料で発行する（１通100円）。

学芸員となる資格は、免許状の発行がない。それにかわる単位修得証明書が必要な場合は、学生サポートセンター文学部教務担当に申し出ること。原則として翌日発行となる。

９.学校で予防すべき感染症における出席停止と手続きについて

本学では、学校保健安全法の定めにより、「学校において予防すべき感染症」に罹患、または罹患した疑いがある場合、大学内での感染拡大を予防するため出席停止としている。

詳細・手続きについて

OCU UNIPA＞学生Navi＞授業・履修＞授業の欠席の取扱いで必要な書類等を確認すること。

10. 卒業後の各種証明書の発行について

卒業後の各種証明書については、いつでも申し込むことが可能である（１通300円）。

窓口で申し込むほか、郵送でも可能である。和文の卒業証明書・成績証明書については、原則として即時発行される。証明書の種類によっては、即時発行できないものもあるので注意すること。

詳しくは、本学ホームページを参照すること。

大阪市立大学ホーム＞大学案内＞卒業生の方へ＞卒業生の方向け各種証明書の発行手続き

問合せ先　大阪市立大学　学生サポートセンター１階教育推進課教務担当

電話　06-6605-2960

Ⅷ 文学部専門科目表

哲学歴史学科　哲学コース				
区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	人間文化基礎論Ⅰ	1	2	LAGEN1101
	人間文化基礎論Ⅱ	1	2	LAGEN1102
	人間文化概論Ⅰ	1・2	2	LAGEN1103
	人間文化概論Ⅱ	1・2	2	LAGEN1104
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	哲学概論Ⅰ	2・3	2	LAPHL3201
	哲学概論Ⅱ	2・3	2	LAPHL3202
	哲学史通論Ⅰ	1・2	2	LAPHL2101
	哲学史通論Ⅱ	1・2	2	LAPHL2102
	哲学演習・講読Ⅰ	2～4	2	LAPHL3203
	哲学演習・講読Ⅱ	2～4	2	LAPHL3204
	哲学史演習・講読Ⅰ	2～4	2	LAPHL3205
	哲学史演習・講読Ⅱ	2～4	2	LAPHL3206
	倫理学概論Ⅰ	2・3	2	LAPHL3207
	倫理学概論Ⅱ	2・3	2	LAPHL3208
	倫理学演習・講読Ⅰ	2～4	2	LAPHL3209
	倫理学演習・講読Ⅱ	2～4	2	LAPHL3210
	宗教学概論Ⅰ	2・3	2	LAPHL3211
	宗教学概論Ⅱ	2・3	2	LAPHL3212
	宗教学演習・講読Ⅰ	2～4	2	LAPHL3213
	宗教学演習・講読Ⅱ	2～4	2	LAPHL3214
	美学概論Ⅰ	2・3	2	LAPHL3217
	美学概論Ⅱ	2・3	2	LAPHL3218
	哲学歴史学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	哲学特講Ⅰ	2～4	2	LAPHL3219
	哲学特講Ⅱ	2～4	2	LAPHL3220
	哲学特講Ⅲ	2～4	2	LAPHL3221
	哲学特講Ⅳ	2～4	2	LAPHL3222
	哲学特講Ⅴ	2～4	2	LAPHL3223
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

注．本コース所属学生は、「哲学概論Ⅰ」「哲学概論Ⅱ」「哲学史通論Ⅰ」「哲学史通論Ⅱ」「倫理学概論Ⅰ」「倫理学概論Ⅱ」「宗教学概論Ⅰ」「宗教学概論Ⅱ」「美学概論Ⅰ」「美学概論Ⅱ」を優先的に履修することが望ましい。

哲学歴史学科　日本史コース

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	人間文化基礎論Ⅰ	1	2	LAGEN1101
	人間文化基礎論Ⅱ	1	2	LAGEN1102
	人間文化概論Ⅰ	1・2	2	LAGEN1103
	人間文化概論Ⅱ	1・2	2	LAGEN1104
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	史学概論	2・3	2	LAGEN3201
	日本史基礎講読Ⅰ	1・2	2	LAJPH2101
	日本史基礎講読Ⅱ	2・3	2	LAJPH3201
	日本史通論Ⅰ	2・3	2	LAJPH3202
	日本史通論Ⅱ	2・3	2	LAJPH3203
	考古学通論	2・3	2	LAJPH3204
	日本史講読Ⅰ	2～4	2	LAJPH3205
	日本史講読Ⅱ	2～4	2	LAJPH3206
	日本史講読Ⅲ	2～4	2	LAJPH3207
	日本史講読Ⅳ	2～4	2	LAJPH3208
	日本史演習Ⅰ	3・4	2	LAJPH3301
	日本史演習Ⅱ	3・4	2	LAJPH3302
	日本史演習Ⅲ	3・4	2	LAJPH3303
	日本史演習Ⅳ	3・4	2	LAJPH3304
	考古学演習	3・4	2	LAJPH3305
	哲学歴史学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	○　日本史特講Ⅰ	3・4	2	LAJPH3306
	○　日本史特講Ⅱ	3・4	2	LAJPH3307
	○　日本史特講Ⅲ	3・4	2	LAJPH3308
	○　日本史特講Ⅳ	3・4	2	LAJPH3309
	考古学実習	2～4	2	LAJPH3209
	大阪の歴史演習	2～4	2	LAJPH3210
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

○印のついている科目は当該コースの学生のみ、２回まで卒業単位に含むことができる。

哲学歴史学科　世界史コースＡ（東洋史）

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	人間文化基礎論Ⅰ	1	2	LAGEN1101
	人間文化基礎論Ⅱ	1	2	LAGEN1102
	人間文化概論Ⅰ	1・2	2	LAGEN1103
	人間文化概論Ⅱ	1・2	2	LAGEN1104
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	史学概論	2・3	2	LAGEN3201
	世界史基礎講読	1・2	2	LAGEN2101
	東洋史基礎講読	2・3	2	LAWHE3201
	東洋史通論	2・3	2	LAWHE3202
	世界史通論	2・3	2	LAGEN3202
	東洋史講読Ⅰ	2～4	2	LAWHE3203
	東洋史講読Ⅱ	2～4	2	LAWHE3204
	東洋史講読Ⅲ	2～4	2	LAWHE3205
	世界史講読	2～4	2	LAGEN3203
	東洋史演習Ⅰ	3・4	2	LAWHE3301
	東洋史演習Ⅱ	3・4	2	LAWHE3302
	東洋史演習Ⅲ	3・4	2	LAWHE3303
	世界史演習	3・4	2	LAGEN3301
	哲学歴史学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	○　東洋史特講Ⅰ	3・4	2	LAWHE3304
	○　東洋史特講Ⅱ	3・4	2	LAWHE3305
	○　世界史特講	3・4	2	LAGEN3302
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

○印のついている科目は当該コースの学生のみ、２回まで卒業単位に含むことができる。

哲学歴史学科　世界史コースＢ（西洋史）

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	人間文化基礎論Ⅰ	1	2	LAGEN1101
	人間文化基礎論Ⅱ	1	2	LAGEN1102
	人間文化概論Ⅰ	1・2	2	LAGEN1103
	人間文化概論Ⅱ	1・2	2	LAGEN1104
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	史学概論	2・3	2	LAGEN3201
	世界史基礎講読	1・2	2	LAGEN2101
	西洋史基礎講読	2・3	2	LAWHW3201
	西洋史通論	2・3	2	LAWHW3202
	世界史通論	2・3	2	LAGEN3202
	西洋史講読Ⅰ	2・3	2	LAWHW3203
	西洋史講読Ⅱ	3・4	2	LAWHW3301
	西洋史講読Ⅲ	2・3	2	LAWHW3204
	西洋史講読Ⅳ	3・4	2	LAWHW3302
	世界史講読	2・3	2	LAGEN3203
	西洋史演習Ⅰ	3・4	2	LAWHW3303
	西洋史演習Ⅱ	3・4	2	LAWHW3304
	西洋史演習Ⅲ	3・4	2	LAWHW3305
	世界史演習	3・4	2	LAGEN3301
	哲学歴史学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	○　西洋史特講Ⅰ	3・4	2	LAWHW3306
	○　西洋史特講Ⅱ	3・4	2	LAWHW3307
	○　世界史特講	3・4	2	LAGEN3302
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

○印のついている科目は当該コースの学生のみ、２回まで卒業単位に含むことができる。

人間行動学科　社会学コース

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	人間行動学概論Ⅰ	1	2	LBGEN1101
	人間行動学概論Ⅱ	1	2	LBGEN1102
	◎ 人間行動学データ解析法Ⅰ	2	2	LBGEN1201
	◎ 人間行動学データ解析法Ⅱ	2	2	LBGEN1202
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	社会学概論Ⅰ	2	2	LBSOC3201
	社会学概論Ⅱ	2	2	LBSOC3202
	社会学史Ⅰ	2	2	LBSOC3203
	社会学史Ⅱ	2	2	LBSOC3204
	◎ 社会学研究法Ⅰ	2	2	LBSOC3205
	◎ 社会学研究法Ⅱ	2	2	LBSOC3206
	◎ 社会学実習Ⅰ	3	2	LBSOC3301
	◎ 社会学実習Ⅱ	3	2	LBSOC3302
	社会学基礎演習	2	2	LBSOC3207
	社会学演習Ⅰ	2～4	2	LBSOC3208
	社会学演習Ⅱ	2～4	2	LBSOC3209
	社会学演習Ⅲ	2～4	2	LBSOC3210
	社会学演習Ⅳ	2～4	2	LBSOC3211
	◎ 社会調査法	2～4	2	LBSOC3217
	◎ 社会学データ解析法	2～4	2	LBSOC3218
	人間行動学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	○ 社会学特講Ⅰ	2～4	2	LBSOC3214
	○ 社会学特講Ⅱ	2～4	2	LBSOC3215
	○ 社会学特講Ⅲ	2～4	2	LBSOC3216
	社会学特論Ⅰ	2～4	2	LBSOC3212
	社会学特論Ⅱ	2～4	2	LBSOC3213
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

注①　社会学実習Ⅰと同Ⅱは通年履修しなければならない。

注②　◎印は社会調査士資格取得に必要な科目である。

　ただし、人間行動学データ解析法Ⅰ・Ⅱについては、ａ組のみ資格対応科目である。

○印のついている科目は当該コースの学生のみ、２回まで卒業単位に含むことができる。

人間行動学科　心理学コース

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	人間行動学概論Ⅰ	1	2	LBGEN1101
	人間行動学概論Ⅱ	1	2	LBGEN1102
	人間行動学データ解析法Ⅰ	2	2	LBGEN1201
	人間行動学データ解析法Ⅱ	2	2	LBGEN1202
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	心理学概論Ⅰ	2～4	2	LBPSY3201
	心理学概論Ⅱ	2～4	2	LBPSY3202
	心理学研究法Ⅰ	2～4	2	LBPSY3203
	心理学研究法Ⅱ	2～4	2	LBPSY3204
	心理学実験演習Ⅰ（心理学実験）	2	2	LBPSY3205
	心理学実験演習Ⅱ（心理学実験）	2	2	LBPSY3206
	心理学統計法	2～4	2	LBPSY3216
	心理学研究演習Ⅰ	3	2	LBPSY3301
	心理学研究演習Ⅱ	3	2	LBPSY3302
	人間行動学データ解析法Ⅲ（心理学統計法）	3・4	2	LBPSY3303
	人間行動学データ解析法Ⅳ	3・4	2	LBGEN3306
	人間行動学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	神経・生理心理学特論	2～4	2	LBPSY3207
	知覚・認知心理学特論	2～4	2	LBPSY3208
	学習・言語心理学特論	2～4	2	LBPSY3209
	発達心理学特論	2～4	2	LBPSY3210
	社会・集団・家族心理学特論	2～4	2	LBPSY3211
	感情・人格心理学特論	2～4	2	LBPSY3212
	動物心理学特論	2～4	2	LBPSY3213
	文化心理学特論	2～4	2	LBPSY3214
	心理的アセスメント特論	2～4	2	LBPSY3215
	心理学特講Ⅰ	3・4	2	LBPSY3304
	心理学特講Ⅱ	3・4	2	LBPSY3305
	心理学特講Ⅲ	3・4	2	LBPSY3306
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

人間行動学科　教育学コース

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	人間行動学概論Ⅰ	1	2	LBGEN1101
	人間行動学概論Ⅱ	1	2	LBGEN1102
	人間行動学データ解析法Ⅰ	2	2	LBGEN1201
	人間行動学データ解析法Ⅱ	2	2	LBGEN1202
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	教育学概論Ⅰ	2・3	2	LBEDU3201
	教育学概論Ⅱ	2・3	2	LBEDU3202
	教育方法学Ⅰ	2・3	2	LBEDU3203
	教育方法学Ⅱ	3	2	LBEDU3301
	比較・国際教育学	3	2	LBEDU3302
	教育学研究法Ⅰ	2	2	LBEDU3204
	教育学研究法Ⅱ	3	2	LBEDU3303
	教育学実習	2	2	LBEDU3205
	教育学演習Ⅰ	2	2	LBEDU3206
	教育学演習Ⅱ	3	2	LBEDU3304
	教育学演習Ⅲ	2	2	LBEDU3207
	教育学演習Ⅳ	3	2	LBEDU3305
	人間行動学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	教育学演習Ⅴ	3・4	2	LBEDU3306
	教育行政学	3・4	2	LBEDU3307
	教育史	2～4	2	LBEDU3208
	教育メディア論	2～4	2	LBEDU3209
	教育学特講Ⅰ	3・4	2	LBEDU3308
	教育学特講Ⅱ	3・4	2	LBEDU3309
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

注．本コース所属学生が次の科目の単位を修得した場合、それらを文学部専門科目のうちの自由選択科目の単位とみなす。この原則は、2019年４月以降に入学した学生に適用する。

「教職概論」「教育基礎論※」「発達・学習論※」「教育制度論※」「教育方法論」
「教育課程論」「特別活動論」「道徳指導論」「教育相談論」「生徒・進路指導論」
「特別支援教育論」「総合的な探究の指導論」

（本コース以外の学生については、自由選択科目としてみなされるのは、※印の科目のみなので注意すること）

人間行動学科　地理学コース

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	人間行動学概論Ⅰ	1	2	LBGEN1101
	人間行動学概論Ⅱ	1	2	LBGEN1102
	人間行動学データ解析法Ⅰ	2	2	LBGEN1201
	人間行動学データ解析法Ⅱ	2	2	LBGEN1202
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	地理学概論Ⅰ	2～4	2	LBGE03201
	地理学概論Ⅱ	2～4	2	LBGE03202
	地誌学Ⅰ	2～4	2	LBGE03203
	地誌学Ⅱ	2～4	2	LBGE03204
	地理学実験実習Ⅰ	2・3	2	LBGE03205
	地理学実験実習Ⅱ	2・3	2	LBGE03206
	地理学講読演習Ⅰ	3	2	LBGE03301
	地理学講読演習Ⅱ	3	2	LBGE03302
	地理学野外調査実習Ⅰ	2・3	2	LBGE03207
	地理学野外調査実習Ⅱ	3	2	LBGE03303
	地理学演習Ⅰ	3	2	LBGE03304
	地理学演習Ⅱ	3	2	LBGE03305
	人間行動学データ解析法Ⅳ	3・4	2	LBGEN3306
	人間行動学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	地図学	2～4	2	LBGE03209
	地理情報学	2～4	2	LBGE03210
	○　地理学特講Ⅰ	2～4	2	LBGE03211
	○　地理学特講Ⅱ	2～4	2	LBGE03212
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

○印のついている科目は当該コースの学生のみ、２回まで卒業単位に含むことができる。

言語文化学科　国語国文学コース

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	言語文化概論Ⅰ	1・2	2	LCGEN1103
	言語文化概論Ⅱ	1・2	2	LCGEN1104
	言語文化基礎論Ⅰ	1・2	2	LCGEN1101
	言語文化基礎論Ⅱ	1・2	2	LCGEN1102
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	国文学史Ⅰ	1～3	2	LCJPN2101
	国文学史Ⅱ	1～3	2	LCJPN2102
	国語学基礎論	2～4	2	LCJPN3201
	国語学方法論	2～4	2	LCJPN3202
	国語国文学講読Ⅰ	2～4	2	LCJPN3203
	国語国文学講読Ⅱ	2～4	2	LCJPN3204
	国語国文学講読Ⅲ	2～4	2	LCJPN3205
	国語国文学講読Ⅳ	2～4	2	LCJPN3206
	国語国文学演習Ⅰ	3・4	2	LCJPN3301
	国語国文学演習Ⅱ	3・4	2	LCJPN3302
	国語国文学演習Ⅲ	3・4	2	LCJPN3303
	国語国文学演習Ⅳ	3・4	2	LCJPN3304
	国語国文学演習Ⅴ	3・4	2	LCJPN3305
	国語国文学演習Ⅵ	3・4	2	LCJPN3306
	言語文化学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	○　国語国文学特講Ⅰ	2～4	2	LCJPN3207
	○　国語国文学特講Ⅱ	2～4	2	LCJPN3208
	○　国語国文学特論	3・4	2	LCJPN3307
	○　国語国文学特論演習	3・4	2	LCJPN3308
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

○印のついている科目は当該コースの学生のみ、２回まで卒業単位に含むことができる。

言語文化学科　中国語中国文学コース

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	言語文化概論Ⅰ	1・2	2	LCGEN1103
	言語文化概論Ⅱ	1・2	2	LCGEN1104
	言語文化基礎論Ⅰ	1・2	2	LCGEN1101
	言語文化基礎論Ⅱ	1・2	2	LCGEN1102
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	中国語中国文学概論Ⅰ	2・3	2	LCCHN3201
	中国語中国文学概論Ⅱ	2・3	2	LCCHN3202
	中国語中国文学概論Ⅲ	2・3	2	LCCHN3203
	中国語中国文学概論Ⅳ	2・3	2	LCCHN3204
	中国語基礎演習Ⅰ	2・3	2	LCCHN3205
	中国語基礎演習Ⅱ	2・3	2	LCCHN3206
	中国語学演習Ⅰ	3・4	2	LCCHN3301
	中国語学演習Ⅱ	3・4	2	LCCHN3302
	中国文学演習Ⅰ	3・4	2	LCCHN3303
	中国文化学演習Ⅰ	3・4	2	LCCHN3305
	中国文化学演習Ⅱ	3・4	2	LCCHN3306
	中国語コミュニケーションⅠ	2・3	2	LCCHN3207
	中国語コミュニケーションⅡ	2・3	2	LCCHN3208
	言語文化学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	○　中国語コミュニケーションⅢ	2～4	2	LCCHN3209
	○　中国語コミュニケーションⅣ	2～4	2	LCCHN3210
	○　中国語中国文学特講Ⅰ	2・3	2	LCCHN3211
	○　中国語中国文学特講Ⅱ	2・3	2	LCCHN3212
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

注．中国語基礎演習Ⅰ、Ⅱと中国語コミュニケーションⅠ、Ⅱはペア科目である。

○印のついている科目は当該コースの学生のみ、２回まで卒業単位に含むことができる。

言語文化学科　英米言語文化コース

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	言語文化概論Ⅰ	1・2	2	LCGEN1103
	言語文化概論Ⅱ	1・2	2	LCGEN1104
	言語文化基礎論Ⅰ	1・2	2	LCGEN1101
	言語文化基礎論Ⅱ	1・2	2	LCGEN1102
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	英米文化概論	2・3	2	LCENG3201
	英米文学史Ⅰ	2・3	2	LCENG3202
	英米文学史Ⅱ	2・3	2	LCENG3203
	英米文学史Ⅲ	2・3	2	LCENG3204
	英語学概論Ⅰ	2・3	2	LCENG3205
	英語学概論Ⅱ	2・3	2	LCENG3206
	英米文化演習	2～4	2	LCENG3207
	英米文学演習Ⅰ	2～4	2	LCENG3208
	英米文学演習Ⅱ	2～4	2	LCENG3209
	英米文学演習Ⅲ	2～4	2	LCENG3210
	英米文学演習Ⅳ	2～4	2	LCENG3211
	英語学演習	2～4	2	LCENG3212
	言語文化学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	○ 英米文化特講	2～4	2	LCENG3213
	○ 英米文学特講	2～4	2	LCENG3214
	○ 英語学特講	2～4	2	LCENG3215
	○ 英語コミュニケーションⅠ	2～4	2	LCENG3216
	○ 英語コミュニケーションⅡ	2～4	2	LCENG3217
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

○印のついている科目は当該コースの学生のみ、２回まで卒業単位に含むことができる。

言語文化学科　ドイツ語フランス語圏言語文化コース

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	言語文化概論Ⅰ	1・2	2	LCGEN1103
	言語文化概論Ⅱ	1・2	2	LCGEN1104
	言語文化基礎論Ⅰ	1・2	2	LCGEN1101
	言語文化基礎論Ⅱ	1・2	2	LCGEN1102
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	ドイツ語フランス語圏言語文化論Ⅰ	2～4	2	LCDFX3201
	ドイツ語フランス語圏言語文化論Ⅱ	2～4	2	LCDFX3202
	ドイツ語圏文学史	2・3	2	LCDFD3201
	ドイツ語圏文化論	2・3	2	LCDFD3202
	ドイツ語学概論	2・3	2	LCDFD3203
	ドイツ語圏言語文化基礎演習Ⅰ	2	2	LCDFD3204
	ドイツ語圏言語文化基礎演習Ⅱ	2	2	LCDFD3205
	ドイツ語圏言語文化演習Ⅰ	3・4	2	LCDFD3301
	ドイツ語圏言語文化演習Ⅱ	3・4	2	LCDFD3302
	ドイツ語圏言語文化演習Ⅲ	3・4	2	LCDFD3303
	ドイツ語圏言語文化特別演習	3	2	LCDFD3304
	ドイツ語コミュニケーションⅠ	3・4	2	LCDFD3305
	ドイツ語コミュニケーションⅡ	3・4	2	LCDFD3306
	ドイツ語圏ランデスクンデ	3・4	2	LCDFD3307
	フランス語圏文学史	1・2	2	LCDFF2101
	フランス語圏文化論	2・3	2	LCDFF3201
	フランス語学概論	2・3	2	LCDFF3202
	フランス語圏言語文化基礎演習Ⅰ	2	2	LCDFF3203
	フランス語圏言語文化基礎演習Ⅱ	2	2	LCDFF3204
	フランス語圏言語文化演習Ⅰ	3・4	2	LCDFF3301
	フランス語圏言語文化演習Ⅱ	3・4	2	LCDFF3302
	フランス語圏言語文化演習Ⅲ	3・4	2	LCDFF3303
	フランス語圏言語文化特別演習	3	2	LCDFF3304
	フランス語コミュニケーションⅠ	3・4	2	LCDFF3305
	フランス語コミュニケーションⅡ	3・4	2	LCDFF3306
	エチュード・フランコフォーヌ	2～4	2	LCDFF3205
	言語文化学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	○　ヨーロッパ言語文化特講	2～4	2	LCDFX3203
	○　インターカルチュラルスタディーズ	2～4	2	LCDFX3204
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

○印のついている科目は当該コースの学生のみ、２回まで卒業単位に含むことができる。

文化構想学科　表現文化コース

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	文化構想学概論Ⅰ	1	2	LEGEN1101
	文化構想学概論Ⅱ	1	2	LEGEN1102
	文化構想学基礎演習Ⅰ	2	2	LEGEN1201
	文化構想学基礎演習Ⅱ	2	2	LEGEN1202
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	文化理論	2・3	2	LEART3201
	表象文化論	2・3	2	LEART3202
	ポピュラー文化論	2・3	2	LEART3203
	比較表現論	2・3	2	LEART3204
	テクスト文化論	2・3	2	LEART3205
	表現文化論基礎演習	2	2	LEART3206
	表象文化論演習	2～4	2	LEART3207
	ポピュラー文化論演習	2～4	2	LEART3208
	比較表現論演習	2～4	2	LEART3209
	テクスト文化論演習	2～4	2	LEART3210
	表現文化論特殊演習Ⅰ	3・4	2	LEART3301
	表現文化論特殊演習Ⅱ	3・4	2	LEART3302
	文化理論演習	3	2	LEART3303
	文化構想学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	○　表現文化特論	3・4	2	LEART3304
	○　表象文化特論	3・4	2	LEART3305
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

○印のついている科目は当該コースの学生のみ、２回まで卒業単位に含むことができる。

文化構想学科　アジア文化コース

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	文化構想学概論Ⅰ	1	2	LEGEN1101
	文化構想学概論Ⅱ	1	2	LEGEN1102
	文化構想学基礎演習Ⅰ	2	2	LEGEN1201
	文化構想学基礎演習Ⅱ	2	2	LEGEN1202
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	アジア文化学基礎論	2	2	LEASA3201
	アジア地域文化概論	2	2	LEASA3202
	アジア伝統文化概論	3	2	LEASA3301
	アジア共生文化概論	2	2	LEASA3203
	アジア比較文化概論	2	2	LEASA3204
	アジア地域文化論	2～4	2	LEASA3205
	アジア伝統文化論	3・4	2	LEASA3302
	アジア共生文化論	2～4	2	LEASA3206
	アジア比較文化論	2～4	2	LEASA3207
	アジア地域文化論演習	3・4	2	LEASA3303
	アジア伝統文化論演習	3・4	2	LEASA3304
	アジア共生文化論演習	3・4	2	LEASA3305
	アジア比較文化論演習	3・4	2	LEASA3306
	文化構想学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	文化人類学	2～4	2	LEASA3210
	○　アジア文化特論Ⅰ	3・4	2	LEASA3307
	○　アジア文化特論Ⅱ	3・4	2	LEASA3308
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

○印のついている科目は当該コースの学生のみ、２回まで卒業単位に含むことができる。

文化構想学科　文化資源コース

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
必修科目	文化構想学概論Ⅰ	1	2	LEGEN1101
	文化構想学概論Ⅱ	1	2	LEGEN1102
	文化構想学基礎演習Ⅰ	2	2	LEGEN1201
	文化構想学基礎演習Ⅱ	2	2	LEGEN1202
	卒業論文演習Ⅰ	4	2	LXGEN4402
	卒業論文演習Ⅱ	4	2	LXGEN4403
	卒業論文	4	10	LXGEN4401
	（履修必要単位数）		（２２）	
選択必修科目	文化資源基礎論	2	2	LECRS3201
	観光文化論	2	2	LECRS3202
	文化デザイン論	2	2	LECRS3203
	視覚芸術文化論	2	2	LECRS3204
	舞台芸術文化論	2	2	LECRS3205
	視覚文化資源論演習	2～4	2	LECRS3206
	地域文化資源論演習	2～4	2	LECRS3207
	音楽文化資源論演習	3・4	2	LECRS3301
	舞台文化資源論演習	3・4	2	LECRS3302
	視覚文化資源論実習	2～4	2	LECRS3208
	地域文化資源論実習	2～4	2	LECRS3209
	音楽文化資源論実習	3・4	2	LECRS3303
	舞台文化資源論実習	3・4	2	LECRS3304
	文化構想学科　他コース提供選択必修科目			
	（履修必要単位数）		（３０）	
自由選択科目	文化資源特論Ⅰ	2～4	2	LECRS3210
	○　文化資源特論Ⅱ	2～4	2	LECRS3211
	○　文化資源特論Ⅲ	3・4	2	LECRS3305
	文化資源論特別演習	2～4	2	LECRS3212
	学部共通専門教育科目			
	他学科、コース提供専門教育科目			
	教職課程科目で指定された科目			
	博物館に関する科目で指定された科目			
	他学部提供専門教育科目（16単位以内）			
	（履修必要単位数）		（４０）	

○印のついている科目は当該コースの学生のみ、２回まで卒業単位に含むことができる。

学部共通専門教育科目

区分	授業科目名	標準履修年次	単位数	科目ナンバー
自由選択科目	美術史通論	2～4	2	LXGEN3201
	民俗学	2～4	2	LXGEN3202
	広報情報論Ⅰ	2～4	2	LXGEN3207
	広報情報論Ⅱ	2～4	2	LXGEN3208
	マス・コミュニケーション論Ⅰ	2～4	2	LXGEN3209
	マス・コミュニケーション論Ⅱ	2～4	2	LXGEN3210
	中国古典語Ⅰ	2・3	2	LXGEN3211
	中国古典語Ⅱ	2・3	2	LXGEN3212
	ギリシア語Ⅰ	1～4	2	LXGEN2101
	ギリシア語Ⅱ	1～4	2	LXGEN2102
	ラテン語Ⅰ	1～4	2	LXGEN2103
	ラテン語Ⅱ	1～4	2	LXGEN2104
	西洋古典学	1～4	2	LXGEN2105
	比較文化交流論Ⅰ	2～4	2	LXGEN3215
	比較文化交流論Ⅱ	2～4	2	LXGEN3216
	国際都市文化論Ⅰ	2～4	2	LXGEN3217
	国際都市文化論Ⅱ	2～4	2	LXGEN3218
	国際都市社会論Ⅰ	2～4	2	LXGEN3219
	国際都市社会論Ⅱ	2～4	2	LXGEN3220
	上方文化講座	1～4	2	LXGEN2106
	文学部基礎演習	1	2	LXGEN1101
	日本文化発信のための英語	2～4	2	LXGEN3223
	大阪の地域・文化実践演習	2～4	2	LXGEN3224
	自然地理学概論	2～4	2	LXGEN3225
	外国大学科目Ⅰ	1～4	2	LXGEN2107
	外国大学科目Ⅱ	1～4	2	LXGEN2108
	外国大学科目Ⅲ	1～4	2	LXGEN2109
	外国大学科目Ⅳ	1～4	2	LXGEN2110

教職課程科目のうち自由選択科目としうるもの				
	教育基礎論	2～4	2	KLPED2201
	教育制度論	2～4	2	KLPED2203
	発達・学習論	2～4	2	KLPED2202

博物館に関する科目のうち自由選択科目としうるもの				
	生涯学習概論	1・2	2	MULEC1101
	博物館概論	1・2	2	MULEC1102
	博物館経営論	2・3	2	MULEC1103
	博物館資料論	2・3	2	MULEC1104
	博物館資料保存論	2・3	2	MULEC1105
	博物館展示論	2・3	2	MULEC1106
	博物館教育論	2・3	2	MULEC1107
	博物館情報・メディア論	2・3	2	MULEC1108

Ⅸ 教職課程の履修方法

１．取得することのできる教育職員免許状

文学部において取得することのできる教育職員免許状は次のとおりである。また、複数の教科の免許状を取得することも可能である。

（１）中学校教諭　一種免許状

免許教科 ： 社会　国語　英語　中国語　ドイツ語　フランス語

（２）高等学校教諭　一種普通免許状

免許教科 ： 地理歴史　公民　国語　英語　中国語　ドイツ語　フランス語

教職課程の履修方法には注意すべき点が多く、計画的な履修が必要である。教職課程を履修しようと考える人は、10月に行われる全学教職課程ガイダンスに必ず出席し、教職課程履修登録を行うこと。この登録を行わないと、免許状の取得ができなくなるので注意すること。

２．教職課程科目の履修

教育職員免許状は、「基礎資格（「学士の学位を有すること」つまり、学部を卒業すること）」を有し、かつ法令に定められた「所定の単位」を修得することにより取得することができる。教育職員免許を取得するためには、文学部を卒業するために必要な単位とは別に、多くの科目履修が必要となる。したがって、必要な科目を計画的に履修する必要がある。なお、教職課程の履修については、別冊の「教職課程履修の手引き」（大阪市立大学教職課程委員会発行）及び「教職課程履修の手引き（文学部用）」（大阪市立大学文学部発行）を参照すること。また、入学年度により履修方法等が異なる場合があるので、自身の入学年度用の手引きを参照すること。

Ｘ 博物館学芸員課程の履修方法

大阪市立大学では、博物館学芸員の資格取得のための課程を文学部に設置し、全学の学生に対して〈博物館に関する科目〉を開講している。大阪市立大学の学生および大学院生は、所定の科目履修により博物館学芸員となる資格を取得することができる。

１．博物館学芸員をめざすために

博物館学芸員は専門的職員であり、大阪市立大学で学んだ専門的知識を活かすことのできる職種であるが、その分、それぞれの分野における高い専門性が求められる。各地の博物館施設での学芸員公募においては、学芸員資格が応募条件となっていることはもちろんであるが、博物館活動に関わる基礎的知識とともに高い専門的能力が問われることになる。

したがって、学芸員をめざす者は、大学における資格取得のための科目履修のみならず、博物館活動への自主的な参画や継続的な学修とともに、それぞれの分野の専門的能力を身につけることが必要である。

（１）取得すべき単位等（博物館法施行規則第１条第１項）

博物館法に定める学芸員となる資格を取得しようとする学生は、〈博物館に関する科目〉の単位を修得しなければならない。

① 必修科目

博物館法施行規則に定められた必修科目は、「生涯学習概論」「博物館概論」「博物館経営論」「博物館資料論」「博物館資料保存論」「博物館展示論」「博物館情報・メディア論」「博物館教育論」「博物館実習Ⅰ」「博物館実習Ⅱ」の計10科目19単位である。

「博物館実習Ⅰ」「博物館実習Ⅱ」を除く８科目は、文学部の卒業要件である自由選択科目の単位に含めることができる。

② 選択科目

博物館学芸員となる資格を取得するにあたって、履修しておくことが望ましい科目である。

③ 自主的な学び

博物館学芸員をめざす者は、普段から各地の博物館施設を見学し、施設や展示のみならず、博物館が実施している普及事業をはじめとする業務にも興味をもち、博物館の社会的な役割や運営についても学び、考えることが望ましい。

（２）講義科目の履修

① 講義科目

「博物館実習Ⅰ」「博物館実習Ⅱ」を除く８科目は、基本的に大学で行う講義科目であり、毎年、開講する。このうち、「博物館展示論」など、博物館での学外講義が含まれることがある。

② 概論科目

「博物館概論」および「生涯学習概論」は、〈博物館に関する科目〉の入口となる科目であるため、第１年次から履修できる。学芸員資格を取得しようとする学生は、第２年次以降の科目履修に先立ち、「博物館概論」および「生涯学習概論」を第１年次に履修しておくことが望ましい。

③ ２年次以降の講義科目

「博物館概論」と「生涯学習概論」を除く６科目は、いずれも第２年次以上で履修することができる。後述するように、「博物館実習Ⅰ」と「博物館実習Ⅱ」の履修条件として、講義科目の単位修得状況を設定しているので、計画的に科目を履修すること。

④ 特定科目の履修制限

「博物館資料保存論」および「博物館展示論」は、学外での現地講義を実施することがあるため、適正な人数である必要があり、履修者数の制限を設ける（60名）。履修希望者が60名を超える場合は、「生涯学習概論」と「博物館概論」の単位修得者および現履修登録者を優先し、その他の者は抽選する。

（３）博物館実習の履修

博物館実習は、学芸員の資格を取得するための最終段階の科目である。法令に定められた科目である「博物館実習」（３単位）について、大阪市立大学では、学内実習である「博物館実習Ⅰ」（２単位）と、大阪歴史博物館等の受け入れ館で行う館園実習である「博物館実習Ⅱ」（１単位）に区分している。両者を履修し、あわせて３単位を修得しなければならない。

① 履修年次

「博物館実習Ⅰ」「博物館実習Ⅱ」は標準履修年次を第３～４年次とする。「博物館実習Ⅰ」は通年科目であり、第３年次に履修することが望ましい。また「博物館実習Ⅱ」を「博物館実習Ⅰ」より先に履修することはできない。

夏休み期間に行われる「博物館実習Ⅱ」の館園実習の日程は、受け入れ館の指定があるので、都合があわない場合もありうる。したがって、「博物館実習Ⅱ」も第３年次に履修することが望ましい。履修できなかった場合は第４年次での履修となる。

② 履修条件

「博物館実習Ⅰ」を履修するには、「博物館概論」を含む〈博物館に関する科目〉６単位を、第２年次までに修得済みであることを条件とする。

さらに、「博物館実習Ⅱ」を履修するには、博物館実習以外の必修科目の単位をすべて修得済みか、あるいは履修しようとする年度中にすべて修得できる見込みであることを条件とする。必修科目の単位修得状況が条件を満たしていない場合、「博物館実習Ⅱ」を履修することはできない。

（４）博物館実習Ⅰ（学内実習）の履修

この実習は、多様な博物館の姿を観覧する『見学実習』、資料を実際に取り扱う『実務実習』、博物館の基本的業務である企画展実施を体験する『博物館実習展』から構成される。

通年科目であり、また『博物館実習展』の準備期間など、時間外の作業が必要となることもある。また、『見学実習』についても、時間外での見学となる。

後期の中心となる『博物館実習展』は、受講生が企画を立案し、展示物や解説パネル等の準備を行い、12月～１月に、学術情報総合センターで展示を行う。

（５）博物館実習Ⅱ（館園実習）の履修

この実習は、前期の夏休み期間に、４～５日の集中講義の形式で、博物館において、施設、資料の保管・取り扱い、展示などについて、現職の学芸員から実地の指導を受け、館務の実際を学ぶものである。この実習では、博物館における館園実習に加え、事前・事後指導を受けることが必要である。

① 館園実習を行う博物館施設

「博物館実習Ⅱ」の館園実習は、大阪歴史博物館、大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）、大阪市立大学理学部附属植物園および大阪府立弥生文化博物館の４施設で行う。

② 履修登録と博物館実習Ⅱ（館園実習）ガイダンス

「博物館実習Ⅱ（館園実習）」の日程は、前期の履修登録期間にはまだ決まっていないが、履修予定者は必ず登録を済ませておくこと。

ガイダンスを４月に開催する（「博物館実習Ⅰ」の初回を予定）。「博物館実習Ⅱ」の履修者は必ず出席すること。各館の実習日程を発表し、実習を受けたい博物館施設の希望調査などを行う。

この実習では、実際の資料の取り扱いなど、学ぶべきプログラムが各館において組まれている。したがって全日参加が条件となる。また、各館の受け入れ人数に定員があるため、希望者多数の場合は、履修状況を基準に選抜を行う。

③ 館園実習履修者の決定

ガイダンス後、博物館施設ごとに実習の参加者を正式に決定し通知する。その後、実習開始までの間に、どうしても都合が悪くなった場合は、取り消し手続きが必要である。できるだけ早く必ず学生サポートセンター文学部教務担当に申し出ること。

④ 事前・事後指導

「博物館実習Ⅱ」の事前・事後指導は、「博物館実習Ⅰ」の前期の最終回および後期の初回に行う。事前指導を受けなかった者は、館園実習に参加することはできない。

「博物館実習Ⅰ」の単位を修得済みで、当該年度に「博物館実習Ⅱ」のみを履修する者も、事前・事後指導に必ず出席すること。

⑤ 館園実習に要する経費

博物館実習には実習に要する経費（5,000円程度）が必要となる（理学部附属博物館をのぞく）。

⑥ 館園実習の注意

「博物館実習Ⅱ」は、学外の博物館施設にお願いし、受け入れてもらっているものである。遅刻や無断欠席は、受け入れ施設に多大な迷惑をかけることになるので、絶対にしてはならない。また、実物資料を用いた実習においては、資料の取り扱いにくれぐれも注意すること。

繰り返すが、「博物館実習Ⅱ」は、館園実習に全期間参加し、かつ事前・事後指導を受けることが単位認定の条件となる。欠席日があった場合は不合格となる。

博物館に関する科目表

区分	授業科目名 博物館法等による科目名及び単位数（注①）		授業科目名 左記に対応する本学提供の科目名及び単位数（注②）		標準履修年次	備考
必修科目	博物館概論	2	博物館概論	2	1・2	
	生涯学習概論	2	生涯学習概論	2	1・2	
	博物館経営論	2	博物館経営論	2	2・3	
	博物館資料論	2	博物館資料論	2	2・3	
	博物館資料保存論	2	博物館資料保存論	2	2・3	注③
	博物館展示論	2	博物館展示論	2	2・3	注③
	博物館情報・メディア論	2	博物館情報・メディア論	2	2・3	
	博物館教育論	2	博物館教育論	2	2・3	
	博物館実習	3	博物館実習Ⅰ	2	3・4	注④
			博物館実習Ⅱ	1	3・4	注⑤
選択科目			日本史通論Ⅰ	2	日本史コース、地理学コース、アジア文化コース提供科目および学部共通科目の項参照。（注⑥）	
			日本史通論Ⅱ	2		
			地理学概論Ⅰ	2		
			自然地理学概論	2		
			地図学	2		
			文化人類学	2		
			美術史通論	2		
			考古学通論	2		
			民俗学	2		

摘要

注① 本欄の科目は、博物館法第5条第1項第2号に基づき、同法施行規則第1条第1項に定める「大学において修得すべき科目及び単位数」である。

注② 博物館実習Ⅰ・Ⅱを除く科目の単位は、文学部の自由選択科目の単位数に含まれる。

注③ 60名を上限とする履修制限がある。

注④ 「博物館実習Ⅰ」を履修するには「博物館概論」を含む6単位を修得していなければならない。

注⑤「博物館実習Ⅱ」は「博物館実習Ⅰ」より先に履修することはできない。また、博物館実習以外の必修科目の単位をすべて修得済みか、あるいは履修しようとする年度中にすべて修得できる見込みであることを条件とする。

注⑥選択科目は博物館学芸員資格を取得するにあたって、履修しておくことが望ましい科目である。

XI　公認心理師になるために必要な科目の履修方法

大阪市立大学では、「公認心理師法」に基づく公認心理師になるために必要な科目を開講している。本学で公認心理師試験の受験資格を得るためには、以下の条件をすべて満たす必要がある。

(1) 文学部心理学コースまたは生活科学部人間福祉学科の学生で、公認心理師資格取得希望者から選抜された者。両学部合わせて 20 名が選抜される。文学部からは最大 10 名が選抜される。文学部学生の選抜は、２年次前期の、「心理学実験演習Ⅰ・Ⅱ」、「心理学概論Ⅰ」、「心理学研究法Ⅰ」の成績に基づいて行われる。
(2) 所定の単位（別表１）を学部卒業時までに修得した者。別表１の「公認心理師法施行規則に定める科目」欄にある科目をすべて履修する必要がある。該当する「本学開講科目」が複数ある場合には、いずれか１科目を履修すればよいが、「心理学実験演習Ⅰ・Ⅱ」と「心理演習Ⅰ・Ⅱ」は、ⅠとⅡの両方の単位を修得する必要がある。
(3) 学部卒業後、対応したカリキュラムを開設する大学院に進学し修了するか、もしくは公認心理師法に定められた実務経験を経た者。

生活科学部の開講科目のうち、他学部生の履修が認められていない科目については、選抜された者のみが３年次から履修可能である。

編入生が文学部で公認心理師のプログラムを履修する場合、以下のことが必要になる。

(1) 出身校が公認心理師プログラムを提供しており、それに関連する科目の単位を、一定数以上修得していること。
(2) 入学した年の前期に、文学部心理学コースの２回生と一緒に選抜を受けること。

別表１

公認心理師法施行規則に定める科目	本学開講科目	開講学部	履修年次	備考
公認心理師の職責	公認心理師の職責	生	3～4	
心理学概論	心理学概論Ⅰ	文	2～4	Ⅰ・Ⅱのどちらかを修得
	心理学概論Ⅱ	文	2～4	
	心理学・認知科学と人間（心理学概論）	共	1～4	
	心理学への招待（心理学概論）	共	1～4	
臨床心理学概論	臨床心理学概論	生	1～4	
心理学研究法	心理学研究法Ⅰ	文	2～4	Ⅰ・Ⅱのどちらかを修得
	心理学研究法Ⅱ	文	2～4	
心理学統計法	心理学統計法	文	2～4	
	心理学統計法	生	2～4	
	人間行動学データ解析法Ⅲ（心理学統計法）	文	3～4	

心理学実験	心理学実験演習Ⅰ（心理学実験）	文	2～4	Ⅰ・Ⅱの両方を修得
	心理学実験演習Ⅱ（心理学実験）	文	2～4	
	心理学実験	生	3～4	
知覚・認知心理学	知覚・認知心理学特論	文	2～4	認知の仕組み（知覚・認知心理学）と原則隔年開講
	認知の仕組み（知覚・認知心理学）	共	1～4	知覚・認知心理学特論と原則隔年開講
学習・言語心理学	学習・言語心理学特論	文	2～4	行動と学習の心理（学習・言語心理学）と原則隔年開講
	行動と学習の心理（学習・言語心理学）	共	1～4	学習・言語心理学特論と原則隔年開講
感情・人格心理学	感情・人格心理学特論	文	2～4	
	感情・人格心理学	生	2～4	
	性格心理学入門（感情・人格心理学）	共	1～4	隔年開講
神経・生理心理学	神経・生理心理学特論	文	2～4	心と脳（神経・生理心理学）と原則隔年開講
	心と脳（神経・生理心理学）	共	1～4	神経・生理心理学特論と原則隔年開講
社会・集団・家族心理学	社会・集団・家族心理学特論	文	2～4	文化と社会の心理（社会・集団・家族心理学）と原則隔年開講
	文化と社会の心理（社会・集団・家族心理学）	共	1～4	社会・集団・家族心理学特論と原則隔年開講
発達心理学	発達心理学特論	文	2～4	隔年開講
	発達心理学Ⅰ	生	1～4	Ⅰ・Ⅱのどちらかを修得
	発達心理学Ⅱ	生	1～4	
	教育と発達の心理学（発達心理学）	共	1～4	
障害者・障害児心理学	障害者・障害児心理学	生	2～4	
心理的アセスメント	心理的アセスメント特論	文	2～4	
	心理的アセスメント	生	2～4	
心理学的支援法	心理学的支援法Ⅰ	生	1～4	Ⅰ～Ⅲのいずれ

	心理学的支援法Ⅱ	生	2～4	かを修得
	心理学的支援法Ⅲ	生	3～4	
健康・医療心理学	健康・医療心理学	生	3～4	
福祉心理学	福祉心理学	生	3～4	
	発達臨床心理学（福祉心理学）	生	2～4	
教育・学校心理学	教育・学校心理学	生	3～4	
司法・犯罪心理学	司法・犯罪心理学	生	3～4	
産業・組織心理学	産業・組織心理学	生	3～4	
人体の構造と機能及び疾病	医学知識（人体の構造と機能及び疾病）	生	2～4	通年集中
精神疾患とその治療	福祉システム学Ⅱ（精神疾患とその治療）	生	2～4	
関係行政論	関係行政論	生	4	
心理演習	心理演習Ⅰ	生	3～4	Ⅰ・Ⅱの両方を修得
	心理演習Ⅱ	生	3～4	
心理実習	心理実習	生	4	実習費用は個人負担とする。

開講学部の「文」は文学部開講科目、「生」は生活科学部開講科目、「共」は全学共通教育科目を示す。

開講学部・学年ごとの履修科目一覧

<table>
<tr><th></th><th>１年次</th><th>２年次</th><th>３年次</th><th>４年次</th></tr>
<tr><td>全学共通</td><td colspan="4">心理学への招待（心理学概論）、心理学・認知科学と人間（心理学概論）、認知の仕組み（知覚・認知心理学）、行動と学習の心理（学習・言語心理学）、性格心理学入門（感情・人格心理学）、心と脳（神経・生理心理学）、文化と社会の心理（社会・集団・家族心理学）、教育と発達の心理学（発達心理学）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">文学部</td><td rowspan="2"></td><td colspan="2">心理学概論Ⅰ・Ⅱ、心理学研究法Ⅰ・Ⅱ、心理学統計法、心理学実験演習Ⅰ・Ⅱ（心理学実験）、知覚・認知心理学特論、学習・言語心理学特論、感情・人格心理学特論、神経・生理心理学特論、社会・集団・家族心理学特論、発達心理学特論、心理的アセスメント特論</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td>人間行動学データ解析法Ⅲ（心理学統計法）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">生活科学部</td><td colspan="2" rowspan="2"></td><td>後期</td><td>臨床心理学概論、福祉システム学Ⅱ（精神疾患とその治療）</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td colspan="2">公認心理師の職責、心理学統計法、心理学実験、感情・人格心理学、発達心理学Ⅰ・Ⅱ、障害者・障害児心理学、心理的アセスメント、心理学的支援法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、健康・医療心理学、福祉心理学、発達臨床心理学（福祉心理学）、教育・学校心理学、司法・犯罪心理学、産業・組織心理学、医学知識（人体の構造と機能及び疾病）、心理演習Ⅰ・Ⅱ</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td>心理実習、関係行政論</td></tr>
</table>

Appendix

大阪市立大学文学部履修規程

制　　定　平成 10 年　2 月　6 日
最近改正　令和２年 11 月 27 日

（学則その他との関係）

第１条　大阪市立大学文学部教授会（以下、教授会という）は、大阪市立大学学則第 19 条の第３項および第 24 条にもとづき、この規程を定める。

２　大阪市立大学文学部学生（以下、学生という）の履修に関する事項は、大阪市立大学学則、大阪市立大学文学部規程、その他共通規則によるほか、この規程の定めるところによる。

（学科・履修コースおよび学生定員）

第２条　文学部に次の学科、履修コース（以下、コースという）をおく。

	学科	哲学歴史	人間行動	言語文化	文化構想	
	履修コース	哲学 日本史 世界史	社会学 心理学 教育学 地理学	国語国文学 中国語中国文学 英米言語文化 ドイツ語フランス語圏言語文化	表現文化 アジア文化 文化資源	合計
学生定員	１学年	32	56	43	24	155
	全学年	128 (8)	224 (8)	172 (8)	96 (8)	620 (32)

（　）内の数は編入学定員で外数

２　哲学歴史学科、人間行動学科、言語文化学科および文化構想学科の学生定員は、上表のとおりとする。

３　学科およびコースへの所属は、第１年次（１回生）の終了時に、学部長が、教授会の審議を経て決定する。「学科・コース志望届」は、第１年次の 12 月 1 日から 12 月 10 日までの期間に、学部長に提出しなければならない。決定の手続きについては、別に『文学部科目履修の手引き』等に定める。

４　第２年次（２回生）以降に学科およびコースの変更を希望するものが、12 月 1 日から 12 月 10 日までの期間に「学科・コース変更願」を提出した場合は、教授会において審議し、学部長がその意見を聴いたうえ、変更を許可することがある。

　なお、コース変更をした場合でも在学年限は第７条に定めるとおりである。ただし、学科を変更した場合、変更後２年以上修業しなければならない。

（授業科目）

第３条　授業科目（以下、科目という）は、全学共通科目（総合教育科目、基礎教育科目、外国語科目、健康・スポーツ科学科目）、および別に定める文学部専門教育科目、教職課程科目、博物館に関する科目、および公認心理師に関する科目からなる。

（卒業要件・修得単位）

第４条　卒業しようとする学生は、下記の単位を修得しなければならない。

<table>
<tr><th colspan="5">全学共通科目</th><th colspan="3">文学部専門教育科目</th></tr>
<tr><td>総合教育科目</td><td>基礎教育科目</td><td>外国語科目</td><td>健康･スポーツ科学科目</td><td>総合教育科目または外国語科目</td><td>必修科目</td><td>選択必修科目</td><td>自由選択科目</td></tr>
<tr><td colspan="2">16 単位</td><td>12 単位</td><td>３単位</td><td>８単位</td><td>22 単位</td><td>30 単位</td><td>40 単位</td></tr>
<tr><td colspan="5">39 単位以上</td><td colspan="3">92 単位以上</td></tr>
<tr><td colspan="8">131 単位以上</td></tr>
</table>

２　前項の規定にかかわらず、第３年次に編入した学生の卒業にあたっては、専門教育科目 92 単位以上を修得しなければならない。

（修業年限）

第５条　修業年限は、４年とする。

２　３年次（３回生）に進級した学生の修業年限は、２年とする。

３　編入学した学生の修業年限は、２年とする。

（進級条件）

第６条　第２年次から第３年次に進級するためには、卒業に必要な単位のうち、下表のそれぞれの単位以上を修得しなければならない。

全学共通科目の外国語科目	10 単位
総合教育科目（基礎教育科目を含む）および所属する学科の必修科目	14 単位

ただし、本学に入学した外国人留学生が、『文学部科目履修の手引き』に定める「外国人留学生の外国語科目の履修と特例」により履修する場合は、この限りではない。

２　９月末時点で在学年数２年以上の者のうち、進級条件を満たす見込みがあり、前期定期試験期間終了の日までに願い出たうえ、所定の単位を修得した場合は、教授会で審議のうえ、学部長の承認により、その学期の次の学期から標準履修３年次の科目履修を許可する。ただし、３年次に進級できるのは年度の初めとする。

（在学年限）

第７条　在学年限は、８年とする。

２　入学後４年以内に前条第１項の進級条件を満たさない場合は、引き続き在学することはできない。

３　編入学した学生が、４年以内に卒業に必要な単位を修得できない場合は、引き続き在学することはできない。

（全学共通科目の履修方法）

第８条　全学共通科目の履修に当たっては「全学共通科目の履修案内」の定めるところによるほか、『文学部科目履修の手引き』に定める文学部の履修条件をみたさなければならない。

（専門教育科目の履修方法）
第９条　専門教育科目の履修方法については、『文学部科目履修の手引き』に定めるところによる。

（履修登録）
第 10 条　科目を履修するためには、各学期の初めに履修登録を行わなければならない。
２　履修登録については、『文学部科目履修の手引き』に定めるところによるほか、各学期初めに通知する。

（単位の認定・学修の評価）
第 11 条　卒業論文および卒業論文演習Ⅱを除く科目の単位の認定は、原則として試験による。
２　前項の規定にかかわらず、科目によって平常の成績または報告書等の結果により認定することができる。
３　成績は、100 点満点法により、次の区分に応じて評価し、60 点以上を合格とする。
AA：90 点以上　　A：80 点以上 90 点未満　　B：70 点以上 80 点未満
C：60 点以上 70 点未満　　F：60 点未満
４　前項の規定にかかわらず、授業科目によっては、合格又は不合格で評価することができる。
５　単位の認定は、各学期末に行う。
６　本学入学以前の既修得単位の認定については、別途定める。

（卒業論文の提出）
第 12 条　卒業論文は、卒業しようとする年度の１月 14 日正午（午後０時）までに学部長に提出しなければならない。ただし、当日が本学の休業日にあたるときは、教授会で審議のうえ、学部長の承認により変更することがある。

（卒業論文・卒業論文演習Ⅱの単位認定）
第 13 条　卒業論文の単位の認定は、卒業論文の提出およびその内容に関する面接試問の結果による。ただし、卒業論文および卒業論文演習Ⅱを除く卒業に必要な所定の単位を修得しなかった場合は、卒業論文の単位認定はしない。
２　卒業論文演習Ⅱの単位認定は、卒業論文の単位が認定されたことをもって行う。
３　第１項にもかかわらず、卒業要件に不足する科目・単位が、２科目かつ４単位以内である場合に限り、卒業論文および卒業論文演習Ⅱの単位を仮認定する。仮認定となった卒業論文および卒業論文演習Ⅱの単位は、当該学生が次年度前期に卒業要件に必要な単位を修得し、かつ本人がその学期末に卒業することを希望する場合にのみ、正式認定とする。なお、この正式認定とする条件を満たさない場合は、仮認定を取り消す。
４　卒業論文および卒業論文演習Ⅰ及びⅡの成績は、第 11 条第３項に定めるところによる。

（卒業判定・学位）
第 14 条　この規程に基づき卒業資格を得た学生に対し、学部長は、教授会の審議を経て、その意見を聴いたうえで卒業を認定する。
２　前項により卒業を認定された学生に対しては、「大阪市立大学学士（文学）」の学位が授与される。

（教職免許）
第 15 条　教育職員免許法第２条に定める教育職員の免許状を修得しようとする者は、教育職員免許法に基づき、大学が提供する「教職課程に関する科目」の必要単位を修得しなければならない。
２　「教職課程に関する科目」の履修方法は、別に『文学部科目履修の手引き』等に定める。

（学芸員資格）
第 16 条　博物館法第５条に定める学芸員となる資格を得ようとする者は、大学が提供する「博物館に関する科目」の必要単位を修得しなければならない。
２　「博物館に関する科目」の履修方法は、別に『文学部科目履修の手引き』等に定める。

（公認心理師）
第 17 条　公認心理師法第７条に定める公認心理師となる資格を得ようとする者は、大学が提供する「公認心理師に関する科目」の必要単位を修得しなければならない。
２　「公認心理師に関する科目」の履修方法は、別に『文学部科目履修の手引き』等に定める。

（その他）
第 18 条　この規程に定めるもののほか、必要な事項は、別に『文学部科目履修の手引き』等に定める。

附　則
１　この規程は、平成 31 年４月 1 日から施行する。
２　この規程は、平成 31 年４月 1 日以降に入学する学生に適用する。平成 31 年３月 31 日以前入学の学生については、この規程を適用せず、改正以前の規程および文学部の定めるところによる。
３　附則２にもかかわらず、第６条、第８条、第 10 条については平成 31 年３月 31 日以前入学の学生にも適用する。
４　附則２にもかかわらず、第３条、第 17 条の規定による「公認心理師に関する科目」については、平成 30 年４月１日以降入学の学生に適用する。

附　則
１　この規程は、令和３年 4 月 1 日から施行する。
　ただし、第７条については、平成 28 年 4 月 1 日以降に入学する学生に適用する。平成 28 年 3 月 31 日以前入学の学生については、この規定を適用せず、改正以前の規定および文学部の定めるところによる。